
とある科学の座標交換《テンソルフォース》

シラッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の座標交換^{テンソルフォース}

【Nコード】

N6320Q

【作者名】

シラッチ

【あらすじ】

総人口230万人。180万人の学生が住む学園都市。この街の社会現象の一つである置き去り。その被害者である少年……学園都市一位のベクトルを操る超能力者《レベル5》の一方通行の様な幾何学的な能力。座標交換^{テンソルフォース}。原石であり、あらゆる素粒子を操り変換する『もう一つ』の超能力者《レベル5》、八方封鎖^{オールコンクリート}。二人が出会う時物語は始まる！？

プロローグ

とある少年は八歳の頃、両親に学園都市に連れてこられた。

この街に置き去りにされる為に。

すなわち
諏佐十拳。

置き去り《チャイルドエラー》となった彼は実験動物モルモットの如く研究所をたらい回しにされた。体も弄くり回された。

そして彼はある日とある能力に目覚める。

テンソルフォース
座標交換。

ベクトルの概念を拡張した幾何学的な量、テンソル。
それを操る能力。

その特異な能力を買われ、諏佐は“長点上機学園”の入学が決定する。

そんな諏佐十拳の物語が幕を開ける。

プロローグ（後書き）

ベクトル、スカラー、テンソルとありますが具体的にどんな能力なのかは次回をお楽しみに（え

いずれは『とある暗部の電脳幻影《A I シャドー》』でクロスさせようと思っております。

諏佐十拳へ座標交換（前書き）

お気に入り登録してくれた方、閲覧してくれた方。ありがとうございます！

諏佐十拳へ座標交換

地面に転がる黒服の男達。その男達は全員絶命していた。

手足が千切れている者。焼かれて体の所々が炭になっている者や最早、人間の原型を留めていない者もある。

強い鉄の臭いが立ち込める惨劇の場で、大能力者《レベル4》で長点上機学園の生徒 諏佐十拳すけじゅうけんは返り血を一滴も浴びずにその中心に立っていた。

180cm程の身長に、少し洒落つ気のある短く切られた茶髪。カッターシャツに黒い学生ズボン。暖かくなってきた気候の所為かネクタイは着けていない。

公園の点滅する街灯が整った顔立ちを照らしている。その表情は死屍累々のこの場には相応しく無い無機質なモノだった。

ゆっくりと辺りを見回した後、諏佐は整った顔が崩れる程の引き裂く笑みを浮かべる。

新たな獲物を見つけた事によって明らかに豹変していく表情。

「あと二匹か」

その言葉に呼応する様に茂みから二体のバードスーツ駆動鎧が姿を現した。

上半身は一般的なスリムな人間の体型、だが両足の部分は明らかに上半身を支えるのに必要無いと思える太さだ。

普段作業場などで見るそれとは違うタイプのモデルであった。

「生身の人間じゃ勝てねえから戦闘用の駆動鎧を寄越してきたってワケか。」

「たまたまねーな」

白い駆動鎧は脚に力を込めると、人間の反射神経を遙かに上回るスピードで諏佐との間合いを詰める。更にその勢いで強靱な拳を振るう。

人間の頭など簡単に砕く速さと質量の拳が諏佐の顔面に吸い込ま

れて行く。

が。

「ッ!？」

見えない質量を持った何かによって攻撃は阻まれていた。

「ひやはッ」

啞然としている駆動鎧のその腕を諏佐は掴んで引つ張った。

ブチリ、とその腕は駆動鎧の装甲ごと引き千切られた。人間の膂力で出来る事ではない。

絶叫を上げ肩口を押さえながらのたうち回る駆動鎧。夥しい出血が辺りに血溜まりを広げ始める。

諏佐は駆動鎧を殺虫剤を浴びて転げ回るゴキブリを見る時と同等の冷たい目で見下ろす。

「大の大人がギャーギャー情けねえな」

突如、諏佐を中心に原因不明の爆発が起こった。

側にいた駆動鎧の装甲は爆風で剥がれ、乗員だった男は公衆便所の壁に叩きつけられた。骨が砕ける音と肉が潰れる気味の悪い音が辺りに響く。

「おーおー、オブジエが出来ちゃったな」

肉と駆動鎧の装甲が入り交じったグチャグチャになった肉塊を見ながら、爆発の中心に居た諏佐は無傷で笑っている。

普通の能力者では無い。

爆発によるクレーターは半径五メートル程。駆動鎧の装甲をいとも簡単にバラバラに砕く衝撃。生身の人間なら跡形も残らないかもしれない。

普通では無い。

そんな中で無傷な事も、あんな無残な死体を見て嬉々とした顔を作れる事も。

気付けばもう一人の駆動鎧は銃器の引き金を引いていた。諏佐が倒れるまで何度も引き金を引き、立て続けに発砲音が響く。

だが、弾が切れるまで撃ち続けても、諏佐は立っていた。相変わらずの無傷で、邪気満々の笑顔で。

「クソつたれ！」

駆動鎧は銃器を投げ捨て、背中に背負っていたRPGを構える。

「おっと。それを食らわされたら流石にたまらねーな」

声は目の前から聞こえた。

いつの間にか、諏佐が駆動鎧のほぼ0距離まで迫っていた。余りにも変則的な動きをする相手に駆動鎧はRPGを構えたまま固まっ
てしまった。

「き、貴様……空間移動能力者だったのか!？」

「あん？ ちげえよ」

「な、なら。あの爆発は何なんだ!？ お前まさか多重」

「それも違うつてのムシケラが」

諏佐は相手の胸元に手を置き、

「こういふ事だよ」

駆動鎧が弾け飛んだ。

血や肉や装甲の破片が空中に散り、赤い雨となって一時的に辺りに降り注いだ。

第十八学区 長点上機学園。PM8:30。

校門前で諏佐は携帯で通話をしていた。真っ白なカッターシャツには赤い点一つも無い。

「ああ、とゆるワケで“プロデュース”の野郎共は始末しといた」

『ふむ。相も変わらさず仕事が早いな、君は』

「……そうでもねえよ」

気怠そうに門に背を凭れる。こういうちょっとした動作でさえ斜に構えていて格好良く見えるのは憎むべき点なのか。

「あ、連れ去られそうになったガキ達は件の公園のベンチに寝かせてある。早く回収班を呼んだ方がいい。

死体回収とガキ達を保護するのも兼ねてな」

「分かっている。子供達も脳をケーキみたいに切り分けられずに済んでホッとしてるだろうね」

「……俺をイラつかせる冗談は止しとけよジジイが」

「ふむ。また何かあったらお願いするよ“座標交換”デンスルフォー」

ここで通話が切れた、というより諏佐が意図的に携帯の通話を切った。パチンと音を鳴らせて携帯を閉じる。

「相変わらずイラつくジジイだ。イラついてたまらねーな」

一度大きな伸びをした後、座標交換は帰路に着く為、ゆったりとした足取りでこの場を去っていった。

諏佐十拳へ座標交換 (後書き)

グロ多くてすいません。

てか……能力曖昧なままじゃね？ 作者がアホなだけ。

次回は明るい話なる……のかな？

原作キャラも頑張っって出したいです。

能力へちからの意味(前書き)

！ 閲覧、評価、お気に入りしてください
た方々ありがとうございます

能力へちから」の意味

第七学区。その学区の霧ヶ丘や常盤台のなどの比較的裕福な生徒の姿がよく見られる高級なエリアを諏佐はゆっくり歩いていた。

携帯で時刻を確認するとPM10:20であった。

人通りは無かった。完全下校時刻を過ぎているのもあるが、今は深夜だ。お嬢様が多いこのエリアをこんな時間帯に歩いている人間がいるとすれば、余程のお転婆娘か自分と同じ『裏』の人間だろう。と諏佐は大体の推測を着けた。

カードキー式の扉を開ける。このエリアにある高級マンションが諏佐の住居である。

高校生が住むにしては贅沢な4LDKの内装である。裏の仕事で稼いだり、諏佐自身が大能力者というのもあってこの環境があったのだ。

リビングに入ると何やら騒がしいテレビの音が聞こえてきた。因みに、全室防音加工を施してあるのでお隣から苦情が来る事は無い。「あ。お帰り、兄ちゃん」

ソファーに腰掛けていた同居人が弾んだ調子で此方に向いた。テレビの内容は主人公らしき人物が蟹をモチーフにしている怪人と対峙している所だった。日曜日の朝方にやっていたヒーロー番組を録画したヤツを見ていたのだろう。

「おい……十時前には寝ておけと言っておいた筈だぞ、八咫^{やまた}」

諏佐の険しい目付きを見た少年は思わずソファーから立ち上がった。しまった。

諏佐をそのまま小さくして顔を幼くした、と言っても大袈裟ではない容貌の八歳の小学生はションボリと肩を落とした。

「こんな時間まで起きてたらなあ。発育に悪いんだよ発育」

「はついく……?」

「要は一生お前は今みたいなチビのまんまって事だ」

「えっ!?! 本当、なの……?」

「マジだ。たまらねーだろ?」

止めとばかり、最後に諏佐のニヒルな笑みを見てしまった少年は慌てて隣の寝室に駆け込んでしまった。

諏佐八咫すさ やあた。諏佐の血の繋がった弟であり唯一の肉親である。

不思議と自分を安堵させる点もあるが、いつか簡単に壊れてしまいうような不安も与えてくる妙な存在である。

コイツは何があっても守らなければ、という意味が諏佐にはあった。理由は自分でも臍氣にしか解らなかった。

唯一の肉親だから。

自分達を捨てた糞両親をいつか見返してやりたいから。

兎に角、だ。コイツが居なくなれば、日常、プライド、アイデンティティー……自分の全てが壊れてしまうのではないか、という得たいの知れない恐怖があるのは確かだ。

「本当に、何なんだろな」

ソファーに腰掛け、意味も無くヒーロー番組を観始める諏佐。

ストーリーは終盤に差し掛かったようで、先程の蟹怪人と主人公が一对一で格闘を繰り返している所だった。周りには主人公が倒したと思われる黒い全身タイツを着た戦闘員が転がっている。

怪人がハサミ状の腕を振るう、が主人公はそれを見事なタイミングで掴み、引き千切った。

諏佐の顔が少し歪んだ。三時間前に殺した駆動鎧パワードスーツの姿が思い浮かぶ。

それでもテレビの映像は流れていく。

怯んだ怪人から距離を取り、その距離から走って勢いを付けて飛び蹴りを相手の体の中心に打ち込む。怪人は踏鞴を踏んだ後、無残

に爆散した。

「……たまらねーな」

そう呟いた後、乱暴にリモコンを掴むとテレビの電源をオフにした。

「ったく。こんなのを格好いいとか思ってたのか？」

低能力者《レベル1》　だが、開発されたのは史上初という能

力　多重人格エビルロボットの弟の顔を思い浮かべながらソファーに横になる。

弟には最低でも自分を守るだけの力は持つて欲しい、と諏佐は思っている。だが、レベルが上がったら別人になってしまうのだろうか。

レベルが上がるにしても腐った研究者の材料にされるのは真つ平御免だが。

目を閉じると諏佐の意識は直ぐに闇に落ちた。

携帯のアラームで諏佐は目を覚ました。

「……7時か」

寝起きはかなり良い方だと自覚している諏佐はソファーから飛び起きるなり、自室に飛び込むと、替えのカッターシャツとズボンに着替えた。昨日制服のまま寝ちゃったからこのまま学校行けばいいやあー、などという怠慢な事を彼はほしくない。

その後、リビングに戻った彼は冷蔵庫を漁り一昨日、総菜屋で購入した肉じゃがと茶碗に入ったご飯を取り出した。学園都市のスバラシイ技術が詰まった冷蔵庫だから悪くはなっていない。恐らくはそれを食卓として使っている横長のテーブルの上に置き、自分は味気の無い固形食料を口に放り込んだ。

「学校行くの久しぶりだな……たまらねーな」

六月二十日。今日は長点上機学園の課題の提出日だった。

課題提出、テスト、システムスキャン能力検査。これさえこなしていれば普段登校していなくても在学が許される学校だ。「裏」の仕事が始めてから学校に通うという『普通』の生活が色々な面で億劫になってきたというのが学校をサボる理由だった。

馬鹿らしい理由だと笑う奴等は放っておくに限る、と『裏』の世界にいる諏佐は思う。どうせ授業なんて和気藹々とやるだけで殺し合いの練習なんかさせてくれないのだから。

「あら、久しぶりね」

後ろから掛けられた声に振り向くとそこには大能力者《レベル4

《↑ポイントの座標移動の少女が学生用靴を両手に佇んでいた。

むすじめ あわき結標淡希。諏佐と同じ『裏』の人間である。

『裏』で活躍している時の彼女の格好は何の意味があるのかは知らないが、冬服のミニスカートを履き、豊かな双丘にサラシを巻いてその上にブレザーを羽織っているだけという、その整った顔と相俟ってかなりセクシーで危なっかしい外見をしていた。

しかし、今の彼女はちゃんと霧ヶ丘の夏服を着用している。

「結標か」

結標は後ろで二つに結っている赤い髪を揺らしながら一学年下の諏佐の横に並び、口を開く。

「仕事の調子はどう？」

「まあまあだな。お前はどんなんだ」

「最近は何もない仕事ばかりね……“窓の無いビル”の出入りばかりよ。」

そっちの仕事は子供達に感謝されたりするんでしょう？ はあ、羨ましいわ」

「そりゃシヨタコンのお前からしたら羨ましいよな」

昔から結標と縁がある諏佐は彼女のこういう癖を見抜いていた。シヨタコン女淡希の顔がみるみる赤く染まっていく。

「ひゃっ!? む!? ぶぶっ! わわわわわっただただ誰がシ

シシッシヨタシヨタコンって貴方な、何をッ!？」

少しからかっただけでこれである。

「否定してる割には顔赤いなお前」

「ち、違うのよ! これは怒っているから赤いのであって! そうよっ! 貴方にキレてんのよ!？」

支離滅裂な事を言う結標を横目に諏佐は溜め息をついた。

暫く無言で歩いていった二人であったが、顔色を取り戻した結標が不意に切り出した。

「ねえ」

「あ?」

「私達って何の為にこんな能力ちからを持つてるのかしらね」

「はあ?」

何を言い出したんだコイツ、と思わず結標の顔を見遣る。彼女は果敢なげな顔をしていた。どうやら冗談で言った台詞では無いらしい。

「そりやお前、何かしらの意味があるからだろ」

「……意味って?」

「俺はこの能力があるから捨てられた後も野垂れ死にする事も無かつたし、今も少々贅沢な暮らしをしている」

「……」

「それに自分で自分の身を守れるしな。お前も大体そんな風だろ? 根本的な理由は分からねえ。だがな。今、学園都市で生活してる俺達にとってはそういうのが能力の意味になってるんじゃないか?」

「つか、こんな事考えてたらキリが無くてたまらねーよ」

「そう、ね」

結標は微かに笑みを浮かべる。

「私達には能力を手に入れる必要性があったのよ」

能力へちから』の意味（後書き）

取り敢えず最初の原作キャラとしてあわきん登場させました！

次回は戦闘に有りだと思えます。あと、おかしな点があればご指摘
お願いします……

VS素敵無敵へスーパーヒーローへ(前書き)

やはり毎日更新はキツイですね；

閲覧、評価、お気に入りありがとうございます！

V S 素敵無敵へスーパーヒーロー

地下鉄を乗り継いで十八学区に着いた諏佐は長点上機学園の通路を歩いていた。のんびりと歩いてもまだ学校には間に合う時間帯だ。

「それにしても学校来てない間、お前は何をやってたんですかー？」隣を歩く、金髪の全体的に逆立ったヘアースタイルの男子生徒がおどけた口調で話し掛けてきた。

わどう たかお
和銅貴雄。諏佐と同じ高校に通う彼の数少ない友人である。

「あ？ 何でもいいだろ。一々そんな事聞くなよ、たまらねーな」
「何でも良くないから聞いているんだけどなー。危ないバイトでもしてたんですかー？」

確かに金を報酬にしている諏佐の『裏』の仕事は危険なアルバイトと言ってもあながち間違いではないのかもしれない。

「うっせえな。そうだよ、バイトだよバイト」

それを聞いた和銅は鞆を持った片手を肩に回し、含み笑いを浮かべる。

「バイトの為に学校サボるなんて塩っぱい青春送ってますなー」

「人の勝手だろおがよ」

「彼女とか欲しくないのかー？」

「あー、もうお前黙れ。ほら、学校に着いたぞ」

長い間駄弁っている間に二人は長点上機学園の校門前に到着していた。会話する時間というのはあつという間に過ぎるモノである。

「そうだなー。話の続きは校舎内でしょうかー？」

「お前いい加減にしとけよ……」

小競り合いをしながら校門を抜ける。無駄に広い校庭の所為で校舎への道程がかなり遠く見える。

この距離を隣の男にからかわれながら歩くのは怠いな、と溜め息

を吐いた時、

「諏佐十拳あああッ！」

大音量で校庭内に自分の名が響き渡った。

突然、諏佐の名前を叫んだその男は十五メートル程の時計台の上
に立っていた。

日の丸がプリンタされた白いシャツに黒い学ランを羽織ったどこ
ぞの応援団みたいな格好をしたスポーツ刈りの男を確認した諏佐は
思わず額に手をやり、空を仰いだ。

隣を見ると和銅と目が合った。

「おい、和銅。あの馬鹿の格好は何だ」

「何でも軍覇くんぱの舎弟になつたらしいぜー？」

二人合わせて上を見上げる。そして再び顔を合わせる。

「諏佐十拳！ 貴様無断で学校を長期間欠席するとは許せん！

ジャツジメント風紀員であるこの箱根勇次郎はこねゆうじろうが正義の能力 スーパーヒーロー素敵無敵で成敗し

てくれる！！」

諏佐達の周りを歩く生徒達も含めて空気が凍り付いた。

「おい和銅」

諏佐が辛うじてという感じで口を開く。こめかみには脂汗がうっ
すらと滲んでいる。

「スーパーヒーローって何だ。まさか能力名じゃないよな？」

「さ、さあ？ 俺にもよく分かりません」

二人の会話が聞こえていたのか、わーはっはっはと高笑いをした
後、箱根はこう告げる。

「この素晴らしい能力名は自分で申請したのだよ。同じように自分
で申請した御坂美琴みさかみことの超電磁砲レールガンなんかより余程センスがある能力名
だろ？」

「おいお前。後で超電磁砲に謝った方がいいぜー？ 絶対にー」

絶対それはないという風に首と片手を振りながら和銅は応じた。

「さて行くか和銅。と、いうか逃げるぞ和銅」

「そうした方がいいみたいだなー」

そう言いながら一歩足を踏み出した諏佐だったが、次の瞬間彼はうつ伏せに地面に倒れた。何かに突然、押し潰された様に地に叩き付けられた。

「んなツ!？」

突然の出来事に隣に居た和銅がたじろぐ。周りもおろおろと騒ぎ始める。

「逃がすとも思ってたか諏佐十拳よ」

軽々と十五メートルの高さから着地し、地に平伏している諏佐を見下ろす。

「俺は入学して貴様を見掛けて以来、不真面目な貴様の事が気にならなかった。

だから俺が貴様の怠るんだ精神に正義の鉄槌を食らわしてやろうと言っているんだ」

箱根がその台詞を言い終えた途端、倒れていた場所から諏佐が姿を消した。代わりにその場には花卉を散らしたチューリップが出現する。

「……気にくわなかった、だと？」

能力を使って花壇の中央に移動し、声を震わせる諏佐。

「そりゃこつちも同じなんだよコラアツ!!!」

花壇が吹き飛んだ。爆音と共に砂埃が舞う。

周りに居たギャラリイ達が悲鳴を上げる。

諏佐は敢えて大雑把な演算（諏佐にとっては）をする事により、花壇と周りにあった土、石などの座標を交換し、更にその余波で爆風も起こしたのだった。

「あのー。諏佐君？ 一応聞きますがまさか今からおつ始めるんじゃないですよねー？」

睨み合う両者から身を引きながら、諏佐に問い掛ける和銅だったが。

「和銅……お前は一切手を出すなよ。もし少しでも妙な真似をしたらお前も一緒に潰す。ひゃははッ」

諏佐は完全にキレている。もう頭の中は箱根をどう潰すか、という事で一杯に違いない。

諏佐十拳がキレやすく、更にそうなると周りが見えなくなるという性質たちだと知っている和銅はそう思った。

もう駄目だコイツ等と苦笑いで肩を竦めた強能力者《レベル3》センスコントロールの感覚支配はその場から更に離れた。自分に危害が加わらない程度に。

戦闘には参加しないが、観戦する気は満々な様だ。

（謎の大能力者《レベル4》で原石かもと噂されている奴と我が高校のエース扱いの大能力者《レベル4》の対決か！。こんな面白いもん多くは見られないぜー！？

もう遅刻なんざどうでもいいッ！）

周りの生徒達も和銅と似たような心境なのだろう。それに、ここは学園都市で能力開発ナンバーワンを誇る高校である。流れ弾を防げる自信が彼等にはあるのだろう。でなければ興味本意でこんな場所には近付かない。

「正義であるこの俺に対してお前の勝ち目は無い。覚悟するんだな 諏佐十拳」

「同じ大能力者《レベル4》でも格が違え事を教えてやるうか？

デコ助君よおー！！」

諏佐が演算を開始する。

周りに散らばっていた花壇の煉瓦や小石を座標を移動させて結合し、直径五十センチ程の球体を作り出す。

「そおらアッ！」

更に爪先に電荷を発生させ、軽く蹴りつけた。正電荷同士が反発し合う斥力によって飛ばされた球体は十メートル程先に立っている箱根に向かって猛スピードで飛んでいく。

だが、箱根は動かなかった。

煉瓦や砂利の集合体である球体は箱根に届くまであと三十センチという距離で何らかの力よって弾き飛ばされた。

只でさえ歪いびつだった球状の塊が分離して弾け飛ぶ。だが、諏佐は臆せず次の手に移る。電荷同士を反発させた今、擬似的な電磁場を発生させている。

それを利用し、自由電子と電磁場を座標交換を使って共鳴させる。自由電子を相対論的な速度まで加速させ、出力をメガワット級まで上げた緑色のレーザーが相手に迫る。

「ほう、ビームまで撃てるとはな」

薄く微笑みながらそれを軽々と避ける箱根。

「つつかまえたあ！ ひやははッ！」

先程弾け飛んだ塊の破片と位置を入れ換えた諏佐が箱根の腕を掴んでいた。

これで捻ひねって筋肉を断裂させるなり引ひつ張ひって骨を外すかは自由だ。この瞬間、そういう事を考える余裕さえ生じていた。その筈はずだった。

「がっ……はあッ!？」

諏佐の鳩尾に拳がめり込んでいた。彼の小さな油断がこの一撃を呼んだのだ。

体をクの字に曲げてノーバウンドで数メートル吹っ飛ぶ諏佐であったが、途中で小石と座標を入れ替え、体制を立て直した。

先程、正拳突きを叩き込んだ腰を落とした体勢から腕を組んで仁王立ちになり、箱根は鼻を鳴らす。

「ほう、今のを立て直すとはな。意外に気合いがあるではないか」
忌々しそくに地面に唾を吐き捨てる諏佐。

「あ？ 別に俺が立ってるのは気合いでも何でも無いんだよ」
隣に在った時計塔に片手を着く。そして首をコキコキと鳴らしながら説明を始める。

「俺も一方通行アクセラレタじゃあねえが少しはベクトルを操る事が出来る。

ま、熱量や電気量は止まってるかゆっくり動いてるヤツしか操作できねえ」

周りの生徒達が息を飲む。

この諏佐十拳という男は学園都市最強の超能力者《レベル5》の名前を自分と対比する為に口に出し、更にそれと同じ様な事が出来ると宣言したのだ。

「それも、ベクトルの向きを拡散させる事しかできねえ。さっきのはお前のパンチのベクトルの向きを有らぬ方向に拡散させて威力を殺した」

更に、と諏佐は付け加え。

「逆にこういう事も出来る」

口角を吊り上げながら、時計塔に着いていた手を一旦離し、拳を突き立てる。

その場から入った輝が瞬く間に時計塔全体に広がり、ゴージャスな白い時計塔は跡形も無くバラバラに崩れた。

(何やってんだあの馬鹿ーッ!?)

今や見る影も無い時計塔は噂のお値段では数千万円はする代物というのを知っていた和銅は思わず頭を抱える。

「だがな、不可解な点が二つある。一つは何故パンチの威力を殺したのに関わらず俺が吹き飛んだのか……恐らく斥力や念動力の類いつてのは判る」

もう一つの時計塔の前に立つ箱根が何が可笑しいのか高笑いをする。

目の前で公共物が壊されても笑える所を見るとコイツは風紀員失格ではないだろうか。

「はっはっはっは！ いい線を行ってるぞ！ だがそれが判ったとこでどうするっていうのだ？」

「不可解な点その二」

煽りを無視して静かに諏佐が告げる。

「既に敗北が決定しているお前のその得意げな態度」

「は？」

諏佐の意味不明な発言に呆気取られる箱根。その発言をした当の本人は、時計塔の残骸を二つ自分の前に移動させ、その一つを蹴り飛ばす。

突如、再開された戦闘にも慌てず箱根は残骸を能力を使って弾いた。

「ちっ！」

此方に飛んでくるもう一つの残骸に気付き、地面を高速で滑る様に移動する。

だがそこは安全地帯では無かった。

残骸を片手に持ち、口元を引き裂いた様に歪ませた諏佐がそこに立っていた。

その事に気付いた箱根は諏佐と正面に向き合う。その時には既に、残骸が投げ放たれていた。

「何をやっても無駄だあッ！」

至近距離で投げられた残骸は箱根に届かず虚しく弾け飛ぶ。

「ぐああああアアアッ!？」

だが、諏佐十拳の拳は届いていた。箱根の腹に入った衝撃が彼の内臓や脳にまで伝わる。

「俺の賭けは正解だったようだな」

勝負が決したのを確信したのか、諏佐の表情は元の無機質なモノに戻っていた。

「お前、その斥力みたいな力は数秒のインターバルがあるだろ？」

「ぐっ……何故、気付い……た」

「俺が飛び道具を使った時に二発目は必ずお前は避けてたからな。勘だよ勘」

「なる……程……な。俺もまだまだ ガフッ!？」

止めとして諏佐は箱根の首に手刀を打ち込む。腹にめり込ませて

いた拳を引くと、彼は力無くうつ伏せに倒れた。その表情は何故か苦し気では無く清々しいモノだった。

「ったく。賭けとか勘で俺を勝たせてんじゃねえよ。たまらねーな」

この戦いの始終を屋上で見ていた人物が居た。

そぎいたぐんは
削板軍覇

この都市に七人しかいない超能力者《レベル5》の

一人である。

「根性が足りなかったな。箱根」

特攻隊の様な衣服に身を包んだ軍覇はそう呟き、屋上から姿を消した。

VS素敵無敵へスーパーヒーローへ（後書き）

次回は主人公の設定を書こうと思っているのですが……
需要無かったら言ってください！

主人公設定（前書き）

麦野さんのブチ確の笑顔がたまらなく好きな最近です（え

主人公設定

【諏佐十拳^{すさじゅうけん}】

置き去り《チャイルドエラー》の16歳の少年。

容姿は長身のイケメン。

長点上機学園に戸籍を置いているが、必要な日以外は学校をサボっている。

結構きまぐれな所がある。普段は感情の起伏は低いが、キレやすくキレると周りが見えなくなる。

戦闘の時にも感情が高ぶる傾向があり、一方通行さんや麦野沈利さんばりの顔芸や罵倒を發揮する。

自分の血が繋がった弟の安全を第一に行動する。

【座標交換^{テンソルフォーリス}】

この能力のせいで諏佐は様々な研究所をたらい回しにされ、更にとあるトラウマを植え付けられた。

原則に言えばテンソル場を操る能力。素粒子の座標も操れる。

以下は出来る事。

- ・自分と指定した物体と座標を入れ替える。(但し、物体の重量は0・5グラムから10000キログラムまで)
- ・自分の半径20メートル以内の物体と物体の座標を入れ替える。(演算によっては結合も可)

・電荷を操って正電荷(負電荷)同士を反発させて斥力を発生させ、それを自分の周りに纏い装甲の様になる。

また、それを使って怪力を発したりと攻撃に転ずる事も出来る。

- ・自由電子を操ってメガワット級の出力があるレーザーを出す。
- ・ベクトルの向きをダメージ軽減に拡散させたり、電荷の怪力と合わせて攻撃にも転ずる事が出来る。

他にも能力とは関係無いが、とある特殊な体質がある。

主人公設定（後書き）

主人公君には他にもまだ色々ありますが、またそれは先のお話で。他のキャラも暇があったら設定書こうかな、と思っています。

集う同士(前書き)

主人公の口癖は「たまたねーな」です(笑)

集う同士

夕日が辺りをオレンジ色に照らし、時刻はそろそろ最終下校時刻を下回るうとしている。

そんな時間に第七学区のとある公園内を二人の男が並んで歩いていた。

「に、しても箱根の奴を申しちまうとはな。しかも、お咎め無しとはな？」

頭の後ろで手を組み、ニヤニヤしながら諏佐に話し掛ける和銅。

あれほど校庭を荒らしたというのに、諏佐には何のペナルティも無かった。

あるとすれば、自分を許した教頭のあの気味の悪い笑顔。まるで、能力者同士の激突を楽しんでいたかの様な。それは自分を面白がって研究していた連中と似通っていた点があった。

反吐が出る。かつて、何も思わずに従っていた自分にも。

「だが箱根の野郎は立場が立場だから暫く停学だつてよ。面白え結果になったからわざわざ保健室に駆け込んで『ざまあ見やがればーかあ』って伝えといた。ま、俺は停学とか関係ねえけどな」
ククク、と二人揃って人の悪い笑い声を出す。

「その所為で箱根がリベンジを挑んでくるかもな」

「何にせよ学校で俺の姿を確認した瞬間に絡んできそつだがな。あの馬鹿は」

ふと、自動販売機が目に入った。入れたお金が呑まれるという噂がある恐怖の自販機だ。

「なあ、なんかジュース飲むか？俺の勝利祝いとして奢ってやるよ」

「さっすがエースの諏佐君は太っ腹ですな。んじゃあ“ヤシの実

サイダー”で」

「りょーかい」

「とか言いながらお前の指先“苺おでん”に伸びてね!? やめろオ! それ俺のトラウマなんだよーッ!?”」

一悶着あつたが、二人共無事に“ヤシの実サイダー”を購入出来た。和銅はベンチに腰掛け、CMの様に豪快に喉を鳴らしながら缶ジュースを一気に飲み干す。

「ぶはーっ! ……あれ? お前は飲まないのかー?」

「お前の“苺おでん”を嫌々ながら食べる姿があつたら飲んでたよ。豪快に飲んでた」

「お前ただけSなんだよ!?”」

「冗談だよ、と冗談だったとは思えない無表情で言いながら諏佐も缶の蓋を開ける。

「でさー。お前また明日から学校には来ないのかー?」

「そういう事になるな。次来るのは夏休み直前のシステムスキャン身体検査の日だな」

ちよびちよびと美味しく無さそうに缶ジュースを飲みながら諏佐が応える。

「ふーん。ところでお前の知り合いの女の子のメアド教えてくれな
い?」

「おい何だそのおかしな流れは……てか女の子関連なら『茶髪メガ
ネ』に当たれよ」

「いや、アイツ俺にはなーんにも女の子紹介してくれないしー。と
いうか」

「そこのお二人。完全下校時刻を過ぎていきますの。こんな所でのん
びりしないで御自宅にお帰りくださいませ」

誰かが和銅の声を遮った。思わずベンチから立ち上がり、声のし
た方を見る。

そこには、ライトブラウン色の髪をツインテールにした小柄な少
女がいた。制服を見る限り、常磐台中学の生徒だろう。そして、腕

に付けている“それ”には和銅は見覚えがあった。

「風紀員かー？」

「そうですね。面倒な事にならない内に……って諏佐さん？」

先程まで凜とした顔をしていた少女は諏佐に気付くなり、キョトンとした表情を浮かべた。

「久しぶりだな黒子」

「あの娘、お前の知り合いなの？」

親しい感じで応答した諏佐に近付き、黒子をチラチラ見ながら耳打ちをし始める和銅。

「ああ、俺の妹」

「何いーッ!？」

「みために可愛がってあげている白井黒子だ」

「紛らわしいわッ!」

和銅のツツコミが終わった途端、黒子の姿がその場から消えた。そして次の瞬間。

彼女は諏佐の頭に両足を向けたドロップキックの体勢で現れた。

だが、その攻撃が来るのがまるで分かっていたかの様なタイミングで諏佐はベンチに腰掛けた。目標を失ったその攻撃は当然、隣に居た和銅に向かう事になる。

「ギョピーッ!？」

鈍い音と同時に数メートル吹っ飛ぶ和銅の奇声が響いた。

地面に降り立った黒子は友人が蹴り飛ばされたのにも関わらず、ベンチに座って缶ジュースを飲んでいる男に向き直る。

「猪口才ちたけな。相も変わらず私の空間移動テレポートを使った攻撃が効きませんの」

「十一次元座標を介してる時点で俺に空間移動戦法は通用しねえって大体分かるだろ。諦める」

「……というか、私の本題はそこではありませんの！ 私は貴方の妹では無くてお姉様の妹ですよ!？」

「おい。誰もお前の事なんざ妹だと……」

「いえッ！ そんな所で留まるワケにはいきませんの！ 将来的には私がお姉様の生涯の伴侶にイイイイ！」

諏佐は頭を両手で抱えて喚き出した黒子を意識して視界から外した。空き缶を放り投げ、数メートル先で転がっていた和銅と座標を入れ替える。

風紀員の新米の時は普通の感性を持っていたのになあ、と少々寂しい気分になりながら和銅の肩を担ぐ。

「んじゃあ俺帰るから。あばよ、黒子」
適当に手を振ってその場を去った。

「俺、可愛い女の子に夢を持つのやめようかなー？」

公園の出口ら辺で意識を取り戻した和銅は死んだ魚の目で有らぬ方向を見ていた。

「そうだな諦める」

「そもそも僕は女の子は夢見るモノでは無く他人に紹介するモノだと思ってるけどね」

「あ？」

割り込んできた第三者の声の正体は長点上機学園の二年の生徒だった。

「おい黙れよ茶髪メガネ《ブラコン》。和銅の傷に塩を塗るな」

茶髪メガネと呼ばれた四角いフレームの眼鏡を掛けた茶髪の無造作ヘアアの美青年はクスリと笑う。

「君はいつも喧嘩腰だね諏佐君。冗談の一つくらい通じないのかな？」

「お前が気に入らねえからだ……で、何しに来た？」

自分より一学年上の相手を睨みながら低い声で諏佐が告げる。

「ここら辺に空間移動者特有の負の感情を観測したので立ち寄っただけですよ」

「……俺はお前の能力は未だによく分からねえからな。で、本題は」

態度を変えない諏佐に思わずガクリと首を傾げる。

「相変わらず僕の嘘を見破るねえ。」

実は最近ネットだとある噂を聞いてね」

「噂？」

はにかみながら話す茶髪メガネは諏佐の無表情と同じで感情の高
低が見えない。

「何でもさ、能力者を研究する施設全てを潰そうと企んでいる連中
が居るらしくてね。その調査さ」

「……ほーう」

諏佐の顔が紙袋を潰すかの如く狂喜に歪んでいく。

「詳しく聞かせて貰おうか？ 超天才の探偵ごっこさんよお」

集う同士（後書き）

黒子の口調とかは大丈夫だったでしょうか；

茶髪メガネはあのとてつも無い守備範囲を持つ男の従兄だったりしますw

あと次話は恐らく相当日にち飛びますw

情報収集(前書き)

やー。執筆スピードと文才が欲しいです……(泣)

情報収集

七月十六日。PM 21:30。

ファーストフード店『マクロナルハンバーガー』の前に諏佐十拳は立っていた。

「ここか」

携帯の画面に映し出された地図を確認しながら僅かに諏佐が微笑む。

「オフ会つーモンに付き合うのは面倒でたまらねーが。」

……俺と利害が一致する連中との付き合いなら我慢するしかねえよなっ！」

普段の彼を知ってる人物なら間違いなく気味の悪さで身を引いてしまっ程の上機嫌で大能力者《レベル4》の座標交換は自動ドアを抜けて入店した。

事の始まりは諏佐の知り合い（和銅と違ってあくまでも友人とは諏佐は思っていない）である茶髪メガネが漏らしたとある情報だった。

ネット内での噂だが子供を研究する施設全てを潰そうと企んでいる連中がいる、と。

「茶髪メガネ……。あの糸目フェチブラコン野郎が」

六月某日。日曜日。

諏佐は第七学区のとあるファミレスの四人席に一人腰掛けていた。茶髪メガネの口から出た気になる噂。本人から聞き出した情報は全てダミーだった。超天才探偵として活躍している茶髪メガネの立場から察するに諏佐に横槍を入れられたく無かったのだろう。

とつちめて無理矢理にでも吐かせてやろうかとも諏佐は思った。だが、生憎な事に茶髪メガネという人間は諏佐と同じく、普段は学校に通わないタイプであった。

しかも、調査の為にあちこちを動き回っており、行方が全く掴めない。

和銅もそういう話には疎い。結標に聞いても『曖昧な噂話だけで分かるワケないでしょ』と撥ね付けられる。

頼りの綱が無くなった諏佐が取った行動は

「御免なさい諏佐さん。少々遅れてしまいましたの」

頼りになりそうな最後の綱《白井黒子》を頼る事だった。

「別に十分くらいは待たされた内に入らねえよ」

目の前の席に座る黒子とその隣に座る見慣れない少女を一瞥しながら諏佐が返す。

（黒子の隣の奴は何者だ？ 何で頭に花なんざ乗せてるんだよ）

「紹介しますの。私の同僚の初春ついはる飾利かざりですの」

「は、初めまして……えつと」

切り出した黒子に初春という少女が飴玉を転がす様な甘ったるい声で続いた。

諏佐が知りたかったのは名前よりもその頭の上の花の事だったのだが……とりあえずは自分も名を名乗る。

「諏佐十拳だ。宜しく」

「白井さんに聞いていたんですけど諏佐さんは長点上機学園の生徒なんですよね？」

お星様が浮かびそうなくらい目をキラキラさせて初春は諏佐を見る。

「あ？ それがどうかしたのか」

「諏佐さんってもしかして都市伝説にもなっている謎の能力者だったりとかするんですか!？」

遂には身を乗り出す初春。

「謎の能力者？」

「はい！ 実は本気を全然出してないだけで超能力者《レベル5》にも全く劣らない能力者達が長点上機学園に居るって聞きました！ ネットの書き込みで知りました！」

思わず諏佐は固まってしまった。

確かに長点上機学園にはそんな噂話がある。去年の大覇星祭では超能力者《レベル5》を二人保持している常盤台を難なく破っている。

単に大能力者《レベル4》の数で圧倒したのか、他の超能力者《レベル5》が在籍していたのか、それとも初春の言うとおり

けれども、それは然程おかしな事では無いかもしれない。学園都市には幻想殺し《イマジンプレイカー》の様なイレギュラーな存在はいくらでも居るかもしれないのだから。

「初春。諏佐さんは歴とした大能力者《レベル4》の座標交換であつて書庫バンクにもちゃんとしたデータがありますのよ？

それにネットの書き込みなんて大半は嘘ですのに」「リアクションを起こさない諏佐を見兼ねたのか黒子がフォローを入れた。

「そういう事で俺は平凡な能力者だ……それより、そろそろ本題に移らせて貰おうか」

黒子の話を取り次いだ諏佐に大能力者《レベル4》だという時点で平凡ではないだろ！ という突っ込みは誰もしなかった。

同僚が大能力者《レベル4》である初春と自分自身が大能力者《レベル4》で身近に超能力者《レベル5》の第三位が居る黒子なら反応が薄くても仕方が無いかもしれないが。

「ええ。そう言えばどの様な話なのか事前に聞いていなかったですの」

「自称超天才探偵さんから聞いた噂話なんだがな。風紀員のお前な

「何か知ってるんじゃないかと思ったんだ」

「それで私に……。それでその噂とやらの内容は？」

隣でメニューを眺め始めた初春からメニュー表を引ったくりながら黒子が聞き返す。

「ああ、どうやら能力者を研究したり開発する組織や施設を潰そうとしている連中が居るとい噂だ」

「えっ。情報はそれだけですか？」

「こんな曖昧な情報しか無いからお前に聞いてんだよ」

半分呆れた視線を黒子に向ける。黒子は首を右に九十度回転させる。

「出番ですよ初春」

「あいあいさー」

役割放棄して初春にバトンタッチする黒子。怪訝な顔をする諏佐を余所に初春はノートパソコンを取り出してキーボードを叩き始める。

「ご心配無く。初春は私のバックアップを任せられる優秀な子ですの」

「いや、それと件の噂話と何の関係が……」

「見つけました！」

初春の大声に諏佐と黒子の二人は思わず体をビクリと震わせる。

検索時間一分足らず。恐ろしい娘である。

「本当に見つかったのかよ？」

座っていた席を離れて黒子の横に立ち、ノートパソコンの画面を覗き込む。

画面には電子掲示板らしきサイトが映し出されていた。様々なスレッドが並ぶ中であるタイトルが諏佐の目に入った。

『学園都市の研究施設は存在するべきかそうでないか』

初春がそのスレッドを開く。

内容はスレッドタイトル通りに学園都市に研究施設は必要かそうで無いかの議論が行われていた。画面をスクロールしていくと、あ

る一文が三人の目を引いた。

『お前らさあ。ごちゃごちゃ議論してないで実際に会って行動起こそうや。』

七月十六日。詳しい場所と日時が聞きたいならURL欄に書いてあるメールアドレスに連絡してくれ』

「これだ……これだよ」

思わず諏佐は呟いていた。

「黒子、このサイトのURLを後で俺に送っておいてくれ」

「は、はあ。本当にこれだけで良かったんですの？」

「十分だ」

眉を八の字にする黒子にキツパリと諏佐は言い放つ。それに対してやれやれといった風に黒子は手で顔を扇ぐ。

「それにしても馬鹿馬鹿しい与太話ですの。可能か不可能かは一目瞭然でしょうに」

「ですよー。本当、ネットって何でも言えますよね。学園都市の能力開発関連の研究施設を全部無くすなんて無理」

バン！ という机を叩く音が二人を黙らせた。

「……休日呼び出して悪かったな」

無表情でそう言っただけで諏佐は叩きつけた掌を離す。そこには万札が一枚置かれていた。

「シヨボいかもしれねえが、ソイツは情報料金だ。あばよ、助かったぜ」

啞然としている黒子と初春を残して、諏佐は足早にその場を去った。

「不可能？ 無理？ やってみなきゃ分からねえじゃねえか。たまらねーな」

情報収集（後書き）

次回は戦闘入れられたらいいな……
あと次回はまたオリキャラが増えますW

目標への初動（前書き）

m 相変わらず稚拙な文章ですがお楽しみ頂けたら幸いですm（――）

目標への初動

時は戻り七月十六日。

「さーて連中はどこだ？」

完全下校時刻をとつくに過ぎているというのに店内は中々に混んでいた。

ぐるりと諏佐は客の顔を見回す。殆どが人相が悪い武装無能力集スキルアウ団みたいな連中だった。時間が時間だからそれは仕方がないのかもしれないが。

「ん？」

その中で諏佐はそれらの連中とは少々違う奇抜さを放つ四人席に三人で腰を掛けている集団を見つけた。

一人は黒いパーカーを羽織っており、顔はよく分からない。もう一人の黒髪のポニーテールの少女はパーティーでも無いのに青いドレスみたいな服を着ている。そして最後に此方に背を向けているスポーツ刈りの胴着の男。

諏佐は迷わずその集団に近付いていく。

「おい。この書き込みをした奴はお前等の中にいるのか？」

三人が一斉に諏佐の方を向く。臆さずに諏佐は携帯画面を側にいた黒いパーカーの男に突き付ける。

「ん？ お前、それは……」

「この書き込みの内容に興味を覚えた。わざわざ怠りいところを来てやったんだ。つまらねえ話したらブチ潰す」

「注文も揃ったとこで自己紹介から始めようか？ 名前と能力を教え合おうや」

注文したフライドポテトを一つつまみながら黒いパーカーの男が

フレンドリーな調子で告げる。

「俺は朱雀陽炎^{ひばり}。能力は大能力者《レベル4》^{フルリジット}の絶対剛体だ。

因みに猫耳好きだ」

「あ？ つまんねー話したら潰すつったろうが」

場を和ませようとした朱雀の台詞《気遣い》は冗談ブレイカーの諏佐にあっさり叩き潰された。

「私は眞島摂子^{まじま}。強能力者《レベル3》^{トランスベアレント}の硝子細工よ」

先程、パフェを突いていたスプーンを銜えたまま眞島が朱雀に続いて簡潔に自己紹介を済ませる。

「んじゃあ。次、お前等新人達の自己紹介をして貰おうか？」

馴れ馴れしくしゃがって、と諏佐は呟き、

「諏佐十拳。大能力者《レベル4》。座標交換」

片言に聞こえる名詞だけを並べた諏佐の自己紹介を聞いた朱雀と眞島は目を丸くした。

「テ、座標交換……？」

「おい、諏佐十拳って名前聞いた事あるぞ……確かあの“長点上機学園”で入学二ヶ月で殆ど学校にも通ってないのにエリート扱いされてる能力者がいるって……！」

驚愕を露にする二人に対して諏佐の機嫌はますます悪くなってゆく。

「いちいちうっせえな。何だよそのバトル漫画の噛ませの三下みてえな台詞はよ。

これから組もつとする連中にそんな反応されちゃあたまらねーんだわ」

「それは悪かった。誰でも取り乱す事はあるだろうから許してくれ……で、最後に」

険悪なムードになった後に三人の視線を受ける胴着の男。相当に居心地が悪いだろう。

「え……ああ、俺ですか。俺は宇井式^{ういしき}です！ 宜しくお願ひします

「！」
見た目通りというべきか、はきはきと声を出す宇井。まさにスポ
ーツマンという感じが。が、そんな宇井をポカンとした顔で朱雀は
見ていた。

「えーと。お前の能力は？」

「無能力者《レベル0》です。でも、学園都市の非人道的な実験が
許せない気持ちは皆さんと同じですよ」

「いや、お前にやる気あるのは分かった。だけれども俺達は化け物
みたいな能力者達と殺し合う事もあるかもしれない。

……命の保証は出来ないぞ？」

朱雀の最後の台詞は脅しでは無い、警告。これから学園都市の『
裏』の世界で活動する際に常に付きまとうリスクを視野に入れた警
告だ。

「構いませんよ」

それでも相手の目を見て言い放つ宇井に朱雀は「分かった」と頷
き、それ以上は何も言わなかった。

(コイツ……妙だな)

三人の中で唯一宇井に不信な目を向ける人物が居た。諏佐十拳で
ある。

(無能力者《レベル0》だと？ じゃあコイツが与えてくる妙な圧
迫感は何なんだ？ 無能力者《レベル0》でも少しはAIM拡散力
場を発してるのは知ってるが……)

「よっし。全員自己紹介を済ませたところで早速行くか！」

「行くって何処へですか？」

「決まってるんだろ」

朱雀は口の両端をニツと吊り上げる。

「俺達の初めての活動だよ。第七学区ミタニ小児用薬品研究所だ」

PM22:40。ミタニ小児用薬品第三研究所。

「さてと……始めるか」

IDカード式の重圧な印象を放つ鉄の扉の前に立つ四人。朱雀がゴキゴキと拳を鳴らす。

「本当にここに置き去り《チャイルドエラー》の子供達が閉じ込められているんですかね？」

「何だ？ ここに来て腰が引けてきたのか宇井？」

「いえ……。でも、もしも違つて無関係な人達を傷付けるのは気が引けてしまうというか……」

「無関係？ んなワケねーよ」

朱雀と宇井の会話に諏佐が割り込む。

「ガキ達が捕まつてるとかそうでねえとかは関係ねえ。元々ミタニの奴等は医療に関係ねえ薬品とかをガキ達に投与しているって警備員キルからも疑いをかけられてる連中だけ？」

遠慮なんかしてられるかよ、たまらねーな」

「驚いたな。警備員の俺でさえ最近手に入れた情報だぞ、それは」

「俺は前からこういう仕事やってたんだよ。片手間必殺仕事人のお前とは『裏』での経験が違う」

「とんでもないエリート不良だなお前は」

メンバーの中に早速罵り合いを始める二人が居るといふのは如何なるものか。

宇井はこの四人の小組織の行く先に不安を感じ始めていた。諏佐と朱雀の小競り合いを見ても止める素振りを全く見せないあの真島という少女も、同類と見なしていいだろう。

「さてと仕切り直しだ。始めるぞ」

そう言い終わると朱雀は右半身を捻つて鉄の扉に拳を叩き付けた。突き立てられた拳は500キロの重量はありそうな扉をあつさりつぶち抜いた。

「さあーて。記念すべき仲間との初活動だ」

浮き浮きとし調子で朱雀は研究所の内装を眺める。

通路は一本道で突き当たりに曲がり角がある。壁、床、天井は全て白一色だ。材質は判らないが、警戒するには足りない。

そう判断した朱雀は研究所内へ一歩踏み込んだ。

ピツという電子音が鳴った後、朱雀の立っている場所が爆破された。爆風はその場に留まらず、諏佐達にも襲い掛かる。

「チツ」

諏佐は即座に演算を開始し、宇井と眞島も一緒に自分を能力を使って十メートル程後退させた。

「助かりました、諏佐さん」

「あはは。センサー式の爆弾が何か埋まっていたのかしらね」

全く朱雀を心配している様子も無くそれどころか、眞島は嘲笑する。諏佐の無表情は相変わらずだが、宇井はそんな眞島を睨み付ける。今にも掴み掛かりそうな勢いだ。

「何よその目。アイツなら大丈夫だって」

小悪魔染みた笑みを浮かべ、眞島は沸き上がる黒煙を指差す。慌てて宇井がその先を見ると丁度、その中から黒いパーカーの男が出てきているところだった。

「痛てえな。俺とした事が油断してしまったよ」

頭の後ろを搔きながら朱雀が諏佐達の元に歩み寄る。パーカーの中から見える顔には掠り傷一つも無い。

「あーあ。今ので間違い無く気付かれたわよ。その内ここの警備隊とか出くるわよ絶対……どうするのよ陽炎」

「問題無いだろ。どうせ研究所内は隈無く探索する必要があったんだから戦闘は避けられない筈だったんだ」

そのやり取りを見ていた諏佐は溜め息を吐いた後、朱雀達三人から離れて研究所の外壁を伝って歩き始めた。それに逸早く気付いた朱雀が呼び止める。

「おい、何処に行くんだお前は」

「ガキ達はお前達が保護しろ。俺は別の役割をこなす」

此方に背を向けている諏佐の表情は分からない。

そうかよ、と呟いた朱雀は残った宇井と眞島を引き連れて立ち込める黒煙の中へと戻って行った。

目標への初動（後書き）

あれ？ 今回戦闘シーン殆ど無い気がするけど。あれー？（麦のん風に）

今回は間違いなく戦闘シーンバンバン入れます！

あと週一更新を続けていきたいです（笑）

集まる化け物達(前書き)

閲覧、お気に入りありがとうございます！
更新の励みになります

集まる化け物達

「所長！」

所員の二人がテンパった様子で所長室に雪崩れ込んだ。デスクで書類を整理していた初老の所長の表情がその様子に怪訝なモノになる。

「どうしたんだ？」

「襲撃です！ 既にこの施設の中枢近くまで侵入しています！」

脂汗にまみれた顔の所員が悲痛な声を上げる。服の汚れなどから察するに這這の体でここまで逃げてきたのか。

「まさか、警備員か!?!」

嫌な予感が頭を過る。このミタニ小児用薬品第三研究所は置き去りの子供を使つて違法な実験をしていると、前々から警備員から目を付けられている。

（保管されている置き去り達を発見されたら誤魔化しは効かなくなる。マズイぞ）

「いえ、素性は分かりません。私が見たのは黒いパーカーの男でした……」

「パーカー？」

「それよりも早く外へ！ 警備部隊に誘導させます！」

「おお、今までとは違う感じの所だな」

能力を駆使し、警備部隊を蹴散らしながら一本道を通ってきた朱雀達は開けた空間に辿り着いていた。

相変わらず塗装には白一色しか使われていない。ホテルのロビーぐらいの広さで、円形の空間の隅々には合わせて四つの通路がある。天井はガラス貼りで夜空に星が小さな光を瞬かせているのが見える。

「はあ。どうする？ 別れちゃう？」

四つの通路を見るなり、腰に片手を当て提案する眞島。

「おいおい。折角チーム組んだのにバラバラになるとか無いぜ。それに時間制限があるワケでも無いんだし、焦る必要も無いだろ」

(……諏佐さんは早速単独行動を取りましたがね)

宇井は内心で突っ込みを入れる。

「それに一人だとやっぱり危ないだろ。やはり大人数で行動した方が……」

その時、金属と金属が触れ合う物々しい音がこのフロアに響き始めた。やがて、その音は止みガチャリという朱雀や眞島にとっては非常に聞き覚えのある音が彼方此方から響く。

全身を包む防護スーツを着用した警備部隊が5・6ミリ仕様のF

2000R 通称、オモチャの兵隊トイソルジャーを四方から此方に向けていた。

「ほら、大人数のが色々対応出来るんだよ。例えばこんな風に四方八方から銃向けられた時とかな 伏せるッ!!」

四つの通路を陣取る警備部隊達が一斉に射撃を開始する。

身を伏せた宇井と眞島を朱雀は絶対剛体を使った体を盾代わりに覆い被さる様にして二人を庇う。朱雀の体と銃弾がぶつかり、火花を散らし、騒音を奏でる。

「ぶはっ！ あががががががッ!!」

朱雀の能力は自分の体や触れている者を（開発した科学者曰く）どんな攻撃にも耐える“剛体”に変える事が出来る。

一見、絶対防御にも見えるこの能力だが欠点もある。痛覚は残るのだ。

「ちよっ！ 朱雀さん！ なんか凄く痛そうにしていますけど大丈夫なんですか!？」

「ぐおおおおッ!! だ、だいじょーぶぶぶぶッ!!」

(全然大丈夫そうに見えない!)

全身をバイブレータの如く小刻みに揺らし、穴という穴から汗を

吹き出しているその姿を見ればそりゃそう思っても仕方が無いかと
言えば仕方が無い。

「あー。朱雀の奴いつまで持つかしらね。気絶なんかされたら私達
は確実に蜂の巣ね」

「なら、俺がなんとかします」

銃弾の嵐の中で自称無能力者の宇井が信じられない言葉を吐く。

「えーとアンタ無能力者だったよね？ 手榴弾でも投げ込む気かし
ら。無理よ、この這いつくばった体勢じゃアイツ等には届きはしな
いわよ」

「そんな物使いませんよ。というか扱い方知らないし」

小馬鹿にした様に宇井が軽く笑う。小馬鹿にしたいのはこっちだ、
と眞島は思う。この状況で無能力者が生身で硝煙時雨の中に飛び込
むなど正気の沙汰とは取れない。

宇井は懐から札を取り出す。片面には『悪』という文字、もう片
面には対極図が書かれている。

その札を文字が書かれた面を表にして宇井自らの胸に張り付けた。
札は白く淡い光を放ちながら宇井の胸に吸い込まれて消えて行った。
「ちょ、ちょっと何よソレ!？」

明らかに動揺している眞島を無視して宇井は不可解な言葉を放つ。

「式神ヲ界ヲ廻リテ我ヲ包ミタマヘ。」

(さあて、奴隷共精々頑張って俺の盾にでもなってくださいな)「
それを言い終わると宇井四つ通路の一つに屯していた警備部隊に
向かって走って行った。

銃弾を物ともしていない。

弾が当たってもそこに小さな黒く塗り潰された揺らめきが現れる
だけ。啞然とする警備部隊の前で宇井は軽く腕を振るう。

その軌道に白い、というより白濁したもやもやとした物が現れ、
消える。その直後、警備部隊の構えていたオモチャの兵隊は砂の様
に粉々になり手や腕をすり抜けて行く。

この間僅か十秒足らず。

今、宇井が立っている位置と朱雀達の伏せている位置は十メートル以上は離れている。明らかに既存の物理法則を超越している動きをしている。これはまるで、

「能力者だ……あれはガガガガハッ!!」

「何なのよ……あれ……」

こうして朱雀達が驚愕している間にも宇井は通路の入り口から別の通路の入り口へと移動し、銃のみを攻撃し、破壊していく。

そして、銃弾の嵐は止み一発の発砲もされなくなった。

直ぐ様朱雀が起き上がる。これくらいの痛みなどまだ彼にとって
は序の口だ。

「やりやがったな。お返しさせて貰うぜ」

警備部隊の二人は入り口から最遠に位置する一室に居た。縛りつける様に幾つもの鎖が巻かれたID認識式の鉄の扉が二つある部屋だ。このローテクとハイテクが混じった感じと妙に明るい照明が不気味な雰囲気を出している。

「最優先保護対象 シリアルナンバー 検体番号068と069を拘束している扉の前に到着」

警備部隊の一人が無線で連絡を始める。もう一人は入り口で侵入者の有無を確認していた。

「しかし、危険は無いのか？ 化け物二匹運ぶのにこんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題無い。普段はコールドスリープで眠らされているらしいからな。襲撃者に見つかからずに運べばノルマクリアだ」

「成る程な。ならさっさと運んで　!？」

突如、部屋の照明が消えた。

「何だ!? 襲撃者達の仕業かッ!?」

「マズイ停電だ! 恐らくコールドスリープの電気供給も切れちま

う！」

慌ててIDカードを取りだし、扉に付いているディスプレイの光を頼りに暗闇の中を近付く。

その時、人が近付くのを待っていたかのタイミングで扉を破って飛び出した細長い何かが警備部隊の一人の喉を貫いた。

「ぐ……ぐぶつ……」

銃を床に落とし、言葉も発せず全身を痙攣させていたが、やがて動かなくなる。

「うわああああッ!？」

出入口に居た警備部隊が銃の引き金に手を掛ける。だが、もう遅かった。

実験体の置き去りが化け物として数ヶ月ぶりに独房から飛び出す。

所長である手駒三朗てこまさんろうは三人の警備部隊と二人の所員と共に所内を駆けていた。

やがて、脱出用の非常口が見えてくる。

「所長、此方です！」

先導していた警備部隊の一人が電子ロックされていた非常口の扉を開けて外に飛び出し、手駒に手招きをする。

（くっ……。置き去りの事も気になるが、今は私の命が第一だ。仕方あるまい）

出口まであと数メートル。外にも大勢の警備部隊が動員されている筈。この施設から出れば命は保証される。

「!？」

外で待機していた警備部隊が吹き飛んだ。直径二メートル程の砂利の塊が突然飛来し、彼を弾き飛ばしたのだ。

続いて、発狂した笑い声が手駒達の鼓膜を揺らした。

「ひやはははははあッ!! 潰す! たまらねーぜ! 潰すうう

うッ!!」

「根性の足らねえ奴等だな」

削板軍覇は襲い掛かってきた武装無能力集団達を一人残らず叩きのめしていた。

呻く敗者共を一瞥した後帰路に着こうとする軍覇だったが

「何だ!?!」

ここから数十メートル離れている建物の一部が轟音と共に爆発するのが視界に入った。入ってしまった。

「何だか分からんが、俺の根性を試せそうだ。らっしやアアアアアアアッ!!!」

フルスピード猛ダッシュで軍覇はその建物へと駆け出した。

集まる化け物達（後書き）

何かネタありましたけど大丈夫か？

次回すごいパンチ（かも）

集まる化け物達(2) (前書き)

閲覧とお気に入りと評価ありがとうございますm(_____)m
励みになりますあわきんきん！(え

集まる化け物達（2）

「何をグズグズしている！ は、早く撃ち殺せえええッ！！」
焦って裏返った手駒の絶叫。

ハツとした二人の警備部隊は手駒の前に盾になる様に素早く並ぶと、手に持ったオモチャの兵隊の引き金を引いた。目の前の最早、獰猛を超えた猟奇的な笑みを浮かべた茶髪の少年に向けて。

赤外線によつて標的を補足した5・6ミリの弾丸が少年に向かつて行く。だが、肌に触れるあと数センチで弾き飛ばされてしまった。理由は簡単だ。銃弾では諏佐十拳の電荷装甲を破れ無かつたという事だ。

「さてと」

次の瞬間、諏佐は警備部隊の一人へと一瞬で間合いを詰め、首を掴んでいた。

「まずは首から潰すか。ひやはははッ！」

小枝を折る様な音が響く。

続いてブチブチという握り潰す音。

最後にブチリ、と何かが千切れる音がした。

「あ？ 悪い悪い。力入れすぎて千切ってしまったわ！」

首の無くなつた死体から吹き出した血が辺りを赤いペイントスプレーの如く汚して行く。

腰を抜かして動けなくなつた手駒の前で諏佐は帰り血一つも浴びずに笑い続けていた。

四つの通路に囲まれた部屋。その内の一つの通路を塞いで立つ二人が居た。

その後ろへと続く通路には眞島が向かっている。拘束された置き

去り達を救い出す為に。

言わば、朱雀と宇井は見張り役というわけだ。

何故、置き去り達の場所が分かったのかは簡単な方法だった。

「それにしてもちよいと脅しただけで簡単に吐いたよなコイツ等」

ざっと見てこのフロアに倒れている警備部隊の数は百人以上か。

完全に意識を失っている者も居れば、呻き声を上げて苦しんでいる者も居る。

「所詮、雇われ警備部隊だったみたいですからね」

宇井が微笑を浮かべる。「ところでよ」

話の流れを朱雀は少々強引に変える。

「さっきの“あれ”は何なんだ？ お前、無能力者ってのは嘘なんだろう？」

「いえ、俺が無能力者だったのは本当ですよ。能力なんて使わないし、というか使えないし」

「何かその言い方されると腹立つな」

「すみません」

「しかし能力じゃないなら何なんだよ……体をいくら鍛えたって銃弾に耐えられるワケが……」

ブツブツと呟き出した朱雀を生暖かい目で見ていた宇井だったが、突然その表情は剣呑に変わった。

「シーツ」

人差し指を自分の唇の前に持っていき、合図を送る。

「へ？ どうした」

「何か聞こえませんか？」

十メートル程前の対になっている通路がクバツ！ と弾け飛んだ。無造作な洞穴の様になってしまった空間から更に突風が吹き荒れる。意識のある警備部隊達は這いずってでも被害を逃れようとしている。

「何だ！？ 機材が爆発でもしたのか！？」

言いながら朱雀が目を凝らす。妙な光景がその瞳に映る。
赤黒い複数の触手が数人の警備部隊達を暗闇の中へと引きずり込
もつとしていた。

「ま、待て！ 貴様私を何処へ連れて行く気だ！？」

所長である手駒は襟首を掴まれ、そのまま地面を引きずられてい
た。

「公開処刑だ」

恐怖に年齢より一層老けて見える手駒。細めた片目でそれを見る。
「お前、所長だろ？ 普通に殺しはしないさ。」

もつじき、この研究所を潰してる奴等が戻ってくる……ソイツ等
の前でゆっくり潰してやる」

諏佐は入り口付近の開けた場所まで歩いて来ると手駒を側に放り
投げた。尻餅を着いた手駒は周りに転がっている無残な数十体の死
体に気付くと思わず「ひいッ！」と短い悲鳴を上げた。

「……とか思っただがな。」

やっぱり俺は短気みたいだわ」

諏佐は愉しげに顔を歪ませる。

人差し指を振り上げ、

「まずは目玉から逝っとくか！？ ひやははははーッ！！」

手駒は死、という未来を直感した。最早、指一本も動かせない。

「ッ！？」

だが、死を体感する事は無かった。

何が起こったのかは分からないが、手駒の目を潰そうとしていた
諏佐十拳が何らかの力によって吹き飛ばされたのだ。

突然の攻撃に諏佐は獲物からかなりの距離を取られる事になる。

「ッ！ お前……ッ！」

庇う様に手駒の前に降り立った人物。その姿を確認した諏佐の表

情は先程とは打って変わって憎々しげに歪んでいく。

「弱々しい老人を襲うとはとんでもねえ根性無しだな。ぶっ飛ばす前に特別に名乗ってやろう……」

オレの名前は削板軍覇そぎいたぐんぱ！　そして学園都市の超能力者《レベル5》のナンバーセブン！

そして今！　このオレの中には怒涛の如く根性が煮えたぎっているーっ！！」

両手を天に向かって広げ、背中を鯨の様に反らして軍覇は高らかに宣言する。

更に、その後ろで爆発が起こり、赤青黄色のカラフルな煙が上がった。

何かもう色々という意味不明である。

「……………」

「……………」

「……………何なんだよこの空気。たまらねーな」

朱雀と宇井は通路を破壊して現れた二人の人物と相對していた。

しかし、緑色の手術衣のような衣服を着用しているあの二人は自分達と同じ人間なのか、と朱雀は疑っていた。

二人揃ってスキンヘッドで目は血走っている。しかも、熱り立った猫みたいに絶えずフーフー、と荒い息を吐いている。

それなら未だしも、一人に至っては片腕が数本もの赤黒い触手に変化して蠢いている。それも一本一本に意思があるかのように様々な動きを見せてくれている。

「メタモルフォーゼ肉体変化なのか？　あれ」

「俺に聞かないでくださいよ。てか、あの二人、いや二匹こっち見てません？　喧嘩売ってませんか？」

「お前って絶対、素の性格悪いだろ。それはとにかく、奴等の注意

が此方に引き付けられているってのは確かみたいだな」

側に倒れている警備部隊には目もくれないのがその証拠だ。

「とりあえずさあ、話してくるか。このまま睨み合っても仕方無いしさあ」

「え？」

「いや、だつて警備部隊の奴等ボコつてたみたいだし、案外味方もしれないぞ？ ボコつてたという証拠にアイツ等出てくるまで銃声響いてたしな」

「まあ、銃声に混じつてグチャツとかいう音も複数混じつてましたけどね！ 絶対危険ですつて！」

「そうビビるなよ。男が泣くぞ」

（朱雀さんは慎重さが無さすぎるんですよ…… どんだけ大雑把なんですか）

宇井に向かつて親指を立てた後、朱雀はまず何て声掛けようかなー、とか考えながら一歩踏み出そうとした。

「ギエアアアアアアアアアツ！！！！！！！！」

耳を塞ぎたくなるような金切り声がフロア全体に響く。それが誰の声なのか認識する前に朱雀に向かって何者かが弾丸の如く突っ込んでいた。

「ぐふッ！？」

まともにタツクルを食らった朱雀は通路の奥にまで押し飛ばされてもおかしく無い程の衝撃を全身に受ける。見たところ自分よりかなり小柄なのに 苦し気に顔を歪める。

「この先だけは死守だコラアツ！！」

何とか踏みとどまった所で頭に嫌な予感が過る。

ここは確か小児用の薬品を研究している施設では無かったか？

（待てよ…… コイツ、もしかして…… ツ！？）

「朱雀さん大丈夫ですか！？」

思わず駆け寄る宇井。それを見て朱雀は大声を上げる。

「宇井！ 後ろだ！！」

振り向こうとした時には既に遅し、胴に触手を巻き付けられた宇井は宙に浮かぶ。

「クソツ！ 油断しすぎた」

空中に舞ったまま、もう一人の手術衣の男へと引き寄せられる。

これで朱雀との距離は十メートル以上引き離される。

宇井を引き寄せた触手の持ち主は黄色く汚れた歯を剥き出しにした穢れた笑みを浮かべながら、もう片方の腕を槍の様に鋭利に変形させた。

集まる化け物達(2) (後書き)

今回シュールってかカオスになってるよーな気がします(････)

次回すごいパンチ(マタカヨ)

V S 根性のヲトコ (前書き)

座標交換 V S 最大原石

V S 根性のヲトコ

宙に浮いているという不安定な体制で、素手の宇井に防御策は無い。あるとすれば、狙われる場所を予測して腕を盾にする事ぐらいだろうか。

だが、宇井はそれすらも行わない。

彼が先程から攻撃を防ぐ為に使っていた術は“すべ魔術”。

手術衣の男の腕が宇井の胴体を自分の触手ごと貫く。だが、宇井は悲鳴の一つも上げない。

彼の魔術の術式の意味は『無限の部下を使役する』。それは相手の攻撃を無力化する事だけでは無く攻撃にも転ずる事が出来る。

左手で自分を突き刺している相手の腕を掴み、右手の手刀を降り下ろし、それを切断した。

「グギョルワツ!？」

宇井の思わぬ反撃に僅かに手術衣の男が怯む。その隙を宇井は見逃さない。

緩んだ触手から脱出し、一気に相手の目の先まで接近する。そして、頭を狙う。貫通させるべく手刀を振り上げる。

「待て! 宇井ッ!!」

張り詰めた朱雀の声が宇井の動きを止めた。

目の前の相手と押し合いながら朱雀は言葉を繋ぐ。

「コイツ等はこの研究所の置き去り……それも実験台にされてる可能性がある! だから、殺さないで動きを止める!!」

それを聞いた宇井は後ろに跳躍して一旦、相手との距離を取る。見ると、手術衣の男の片腕の断面が不気味に蠢き出していた。

「全く。中々に難しい注文ですね」

フ、笑いながら懐から紙を取り出す。その紙には『善』と書かれている。

(無限の部下の使役と言つても、俺の力では使用出来る式神の数に限界がありますからね。長期戦は望めません)

『悪』の札の術式の意味は『無限の部下を使役する』。

道教に通じている宇井は道タオを極めるのに多大な時間を費やしている。『善』の札の術式の意味は『修行してきた時間の一部』。つまり、道の為に修行してきた時間の一部を使用する事が出来という事。
「我が鍛練ノ時ヲ式神ニ託ス。

(さあ、忌み子達。目の前のお人形と遊んであげなさい)」

今度は自分の体に貼り付けず、手に持って宇井は相手に接近する。触手と復活させた槍の様に変形した腕が宇井に向けられる。だが、彼はそれを片手で往なし、手術衣の男の懐まで踏み込む。

「これで動きを止めます！」

(ちゃっちゃと終わらして宇井の奴を手伝いに行くか……その為にはあの“技”を使うしかない)

朱雀は腕の力に演算を割り、今まで両手で組み合っていた相手を片手で押さえ込む。

フルリハンマー
「必殺、剛体拳骨！」

突然、この場に乱入してきた超能力者《レベル5》は腕を組んで諏佐をまじまじと見詰めている。格好も相まってその様子は昭和の(間違つた)番長のようだ。

「お前……諏佐十拳だったのか」

「人をぶっ飛ばしておいて出た台詞がそれかよナンバーセブン。やっぱお前も箱根と同類だな。あー、イラつくたまらねー」

「箱根を倒したお前がまさかこんな根性無しだったとはな」

周りに転がっている死体を一瞥し、軍覇は眉を顰める。その後、

手駒の方をチラリと見て、「今の内に逃げる」と言わんばかりに顎で外を指す。

手駒はコクコクと二回頷いてフラリと立ち上がり、足を引き摺りながらも走り出した。

「おいコラ逃がすかよオツ！」

「お前に負けた箱根の無念……ここで晴らさせてもらう。」

「だから、ここはちよつと根性出す」

インパクトが起きた。

次の瞬間、諏佐の首から上が研究施設の外壁にめり込んだ。

十メートル程距離が離れていた諏佐の頭を掴んで壁に叩き付ける。軍覇がこの一連の動作を音速の二倍で行ったのだ。

「……………」

だが、この攻撃を受けても諏佐はダウンする事は無かった。バキバキという音を立てながら荒々しく頭を外壁から引き抜く。

目を皿の様に見開いて軍覇を睨むその顔には傷一つも無い。電荷の装甲で頭を守り、更に壁と衝突する力の向きのベクトルを拡散させ、ダメージを無効化したのだ。

「俺にワザワザ近付いてくるなんざいい度胸してんなあ！？ ひやははーッ！」

高笑いしながら諏佐は自分の半径五メートルの地面の座標を無理矢理入れ換え、余波による爆風が周囲の物体を粉々に消し飛ばした。それをまともに食らい、さすがの軍覇も吹き飛ばされた。大の字になって二メートル程地面を滑る。

「……………はあ？」

もう少して諏佐は思わず口をあぐりと開けそうになる。

今の爆風は駆動鎧バードスーツの装甲をバラバラに砕く程の威力を有している筈だ。

いくら超能力者《レベル5》とはいえ、まともにあれを食らって原型を留めているのはどう考えてもおかしい。

「ぬうううううん！」

更に諏佐に追い討ちを掛ける超能力者《レベル5》の第七位。起き上がり小坊師の要領で起き上がった彼の体に目立った傷は一つも無い。

「今のは中々に根性がある攻撃だったな」

これが、超能力者《レベル5》。

能力者になってから幾つもの修羅場を潜り抜けた諏佐もこの手応えの無さに憶し初める。

実は諏佐にとって、これほど活路が見出だせない相手と対峙するのはこれが初めてでは無い。

彼がまだ能力を開発されて間もなかった九歳の頃、諏佐十拳を完膚無きまで叩き潰し、トラウマという物を擦り付けた能力者が居た。特力研という場所で見境も無しに力を振るい、向かって来た能力者を肉の塊に変えていた。

だが、最強と謳われていた諏佐を無傷であっさりと破った能力者が突如現れた。

その能力者は現在、学園都市最強とされている男だった。

(くそ、何故今になってアイツの顔が……)

白濁して見えた白い髪と白い肌。

(八八、お前は次元が違ったよなあ)

地面に転がる諏佐を見下ろしていた赤い瞳。

(なあ……一方通行)

あれ以上に恐れる存在が、この世にある筈が無い。いや、他の存在は恐れるに足りない。

自然と頬が緩む。もう目の前の超能力者《レベル5》などあの障壁に比べれば、小さなハードルにも思える。

「面白れえぞナンバーセブン。上等だ、たまらなく上等だ。ぶっ潰してやるよ」

諏佐の周りの地面や研究所の外壁がごっそり削り取られる。否、

そう見えたのだ。

諏佐が砕いたモノは座標交換の力で様々な物体と位置を入れ換えながら、軍覇を囲むかの様に空中に現れた。

土塊が有刺鉄線や銃等と座標を換えながら空中を彷徨う有り様は能力を使った一種の曲芸にも見えてくる。

「ぶっ潰れる！」

複雑な演算をしながらも諏佐は威勢良く叫ぶ。

軍覇の足元の地面の座標と空中の漂っている物体の座標を入れ換える。

一瞬で数多の物体が軍覇に降り注ぐだろう。

「だアアアらっしやアアあああああああああああ！！！」

軍覇が咆哮を上げる。

彼に降り注いでいた数々の物体は謎の爆発によって薙ぎ飛ばされてしまった。

(……………ここだ！)

今現在、軍覇は何かしらの能力を爆発という形で使った。つまり、それに演算を割いているに違いない。だからその隙を諏佐は狙う。

自由電子を操作しレーザーを放つ。メガワット吸の出力を持つそれが第七位に向かって行く。

「超すごいガード」

だが、その攻撃も軍覇の前で起こった赤黄色青のカラフルな爆発によって呆気なく掻き消される。

隙を突いても無駄。再び演算を始めた諏佐の耳にナンバーセブンの掛け声が耳に入った。

「すごいパンチ」

VS根性のヲトコ(後書き)

キャラと崩壊してないでしょうか……

次回すごパ(え

番外個体さんを小説で書いてーっべー

でも大好きな軍覇君書いてるからいいか(^ O ^) /

始まったばかりの残酷な物語（前書き）

軍覇さんのキャラとか崩壊してないっすかね；

始まったばかりの残酷な物語

「グハアッ!?」

軍覇と諏佐の距離は二メートル程離れていた。軍覇は拳を突き出す動作をしただけ。だが、諏佐は鳩尾に鈍い痛みを感じた。

自分の意思とは関係無くノーバウンドで体が五メートル程吹っ飛ぶ。その勢いで地面に叩き付けられるが能力のおかげで痛みは無い。

（何だ今のは……!? 衝撃波か何かの類か？

いや、それだったら俺の電荷斥力とベクトル拡散であそこまでのダメージなんか食らう筈が……!）

仰向けになつたままで様々な考えが諏佐の頭を巡る。

未だに鳩尾に痛みが残っているが、諏佐は立ち上がる。痛みと理解出来ない現状の中でも演算は続ける。

例え負けるとしても削板軍覇に傷一つも付けられ無いまま退くなど考えられない。

諏佐の姿がその場から消えて軍覇の目の前に現れる。

（間接的な攻撃が通らないなら直接殴るしかねえだろ!!）

電荷同士の反発による斥力を最大限に高めた拳が轟!! と空を裂きながら軍覇の顔面に吸い込まれてゆく。それを見た軍覇は何を思ったのか、一旦勢い良く空を見上げると頭突きのと頭突きの要領で諏佐の放った拳に向けて自ら顔を近付けた。

「ふんぬうっ!」

軍覇のオデコと諏佐の拳がぶつかり合う。競り負けたのは諏佐のパンチの方だった。

軍覇の顔面を粉碎する筈だった拳が実にあっさりと弾かれる。

「痛ッ! マジかよコラ!?!」

「すごいパンチ」

思い切り攻撃を弾かれて体制を崩した諏佐に向かって二度目の念^{アタ}
ツククラッシュ

動砲弾が放たれる。

慌てて諏佐は能力を行使し、横に一メートル程移動する。が、

「ごぶツ……!?」

左半身を激しく揺らす衝撃が走る。体が大きく傾いて地面と口付けをしそうになったが、なんとか踏みとどまる。

「……今のも根性がある攻撃だったぜ」

その軍覇の台詞に諏佐は顔を上げて彼の顔を睨む。

チカチカと点滅する研究施設の証明にライトアップされた軍覇の顔。鉢巻きを巻いた額の一部分が赤くなっており、そこから四つの筋に分かれて血が流れ出ているのが確認出来た。

「あ、は……！」

諏佐の目が歓喜によって見開かれる。

「ひやははッ！ 何だよ！ お前無敵じゃないのかよオオオオッ！
?!?!?」

いくら攻撃しても無駄だと思えていた超能力者《レベル5》に傷を負わせた。

とんでもなく強大だが、まだ何とかなる相手だ。このままダメージを与えていけば、勝てる。

「とっておきを見せてやるぜ糞野郎オ！！」

その確信は諏佐の誇る自分の能力の絶対的な自信に変わった。

固く握られた諏佐の右拳の周りを緑色の光が渦巻き始める。作り出した自由電子を手の周りでループさせているのだろう。地面に散らばっていた砕かれた破片や銃などが光に誘われて飛んでくる虫のように諏佐の右手に集まり、粉々に砕かれてゆく。

まるで、諏佐の右手から小さな竜巻が発生しているような光景だった。

「面白ええ！ 最後は拳のぶつかり合いで締めようじゃないか！」

そう言った軍覇の右手の周りに塵気楼を思わせる揺らめきが発生する。軍覇自身にも原理が理解出来ないそれを振りかざしながら地面を一蹴り、諏佐の元へと飛び込む。

軍覇の『自分で理解出来ない力』が込められた拳と諏佐の全ての演算を集中させた拳が衝突したのは、一瞬、一度だけ。それで勝敗は決した。

削板軍覇は元来た道を引き返していた。

先程まで研究施設の敷地内である能力者と戦闘を繰り広げていたのだが、途中で割って入ってきた警備員アンチスキルを名乗る男にそれを止められたのだ。

「戦ってみねえと根性の有無ってのは分からねえモンなのかもしれないな」

継続する右手首の焼ける痛みを感じながら、軍覇は口元を綻ばせた。

「たあーくう。俺が居なかつたら今ごろ俺達全員少年院行きだったぞ。目的も無く好き放題暴れやがって」

目が覚めた直後に待っていたのは朱雀の説教だった。軍覇との激突で意識を失った後、どうやら公園に運ばれた模様だった。

「俺が警備員としての証明になる物を持ってたから助かったみたいだな事だぞ」

「……軍覇の野郎はどうしたんだ？」

「人の話聞いてねえだろテムエツ！！俺が事情を話したら引き返していったよ！」

「倒れたのは俺だけか……チツ」

舌打ちしながら、諏佐は立ち上がるうとする。その時、明らかな違和感を感じた。右腕の感覚が無くなっていた。

軍覇にどれだけの損傷を与えられたかは全く分からない。確実に分かる事は、自分は軍覇に敗北したという事実だけだ。

もう一度舌打ちし、右肩を押さえながら辺りを見回す。そこには、二人の小柄な人間を肩に担いだ宇井と十数人の置き去りを後ろに従える真島が居た。

「いやー、置き去り達を救出したのは良かったんだけどな。宇井が担いでるその二人は普通じゃないんだ。だから、普通の施設に預けるのはマズイと思うんだが……どう思う？」

「おいコラ。いっぺんにガーガー言っても分かるワケねえだろ。たまらねーな」

大雑把な性格の朱雀の質問を一蹴して諏佐はどこかへと歩き始めた。

「おい、また人の話無視するクチかよ!？」

「その二人は『普通』じゃねえんだろ？ ならちよつと俺には当てがあるんでね」

よく口を滑らせて諏佐を激昂させるが、何だかんだで信用を置いている初老の男性を思い浮かべながら諏佐はそう言う。

『裏』の仕事に依頼してくる部分は信頼というより、目的の合致と表現した方が正しいのかもしれないが。

「ついて来い。行く途中にでもお前のくだらねえ武勇伝を聞いてやるよ」

始まったばかりの残酷な物語（後書き）

次回から幻想御手編に入りたいと思います。
ビリビリ中学生とかが出ると思います。

諏佐は相手が悪かったのだ…

chapter? 幻想御手へレベルアップ (前書き)

評価とかがありがとございます><

あと今回は導入部分なので短いです；

chapter? 幻想御手へレベルアップ

「レベルアップ
幻想御手……だあ？」

「そう、確かそんな名前で呼ばれていた筈だ」

自室のソファで腰掛けた状態で諏佐はいつもの「依頼主」と携帯電話を通じて会話していた。テレビの電源はオフになっている。実の弟である八咫やまたがこの部屋に居る時は十中八九、電源はオンになっているが。

「んで、その殲滅をして欲しいと。けど、俺達の趣旨には合わないな。」

俺とアンタの意見が合致している点は「開発を受けていない子供が新たに実験台にされるのを防ぐ」だった筈だぜ。

その幻想御手つてのは使用するだけで自身の能力を上げられるテキストみてえなモンだろ？ 無能力者《レベル0》だって開発を受けている。使いたい奴に使わせとけばいいじゃねえか。まさかまさか、お前の嫉妬によるおつかいってワケじゃあねえよなあ？」

暫く「依頼主」の男は無言だったが、やがてパルス越しにクツクツと腹の底から掬い上げたような笑い声が響いて来た。神経を揺さぶるそれに諏佐は眉を顰める。

「君は実に子供だな。そもそも、能力開発というのがどれだけ危険かというのが分かっている筈だよな？」

ああ、君の言う通り、私が依頼した理由は嫉妬だよ。そんな物で優秀な能力者をどんどん開発されちゃあ私の立場は無いからね」

「……ダメエ」

「でも君の考え方は違うよね？ 例え無能力者《レベル0》やレベルの低い能力者でも悲劇の実験台にされるのは望まないよね？ ほら、君の弟の八咫君とかがいい例だ」

他人の口から、能力、実験関連で弟の名前が飛び出す。思わず、奥歯を噛み締めすぎて碎いてしまいそうな程の感情が諏佐の顔に現

れる。

フツツと小馬鹿にした笑い声をした後、『依頼人』は動き出すスレスレの所にいる諏佐を突き落とすべく言葉を発する。

『幻想御手つてのはさあ、そんな繊細な能力者のレベルを簡単に上げちゃうんだよ。何のリスクも無いと、本気で思うのかなあ君はあ？』

「クフフツ……」

諏佐の口から微かな笑い声が漏れる。

「ぎゃははははははははアーツ！！！！　おい糞爺！　お前やっぱり人を動かすの上手いわ！！」

『それはどうも』

気の抜けた『依頼人』の応答を最後に、携帯の通話は切れた。様々な感情が巡り始めた諏佐は、生きてない、生きてるに関わらず全てのモノに殺意を向ける程に高潮していた。

そして、そのグチャグチャな感情は向かうべき所に向かい始める。「いやあー。たまらねーな。」

こりゃ、幻想御手と関係者全員を物理的に潰さなきゃたまらねーわ」

風紀員である白井黒子は今月の十一日から連続して起きている虚^ケ空爆破事件の為に周辺の地域のとある公園に見廻りに駆り出されていた。

事件が起きてから今日で六日目になるが、未だに真相は掴めない。量子変速の能力者の犯行である事は予測出来ているらしい。だが、その事件に見合った能力者が確認出来ない《書庫に無い》のだ。

唯一、その犯行が起こせそうな大能力者《レベル4》の釧路帷子^{くしろかたひら}量子変速の能力を持つ少女は十日に謎の昏睡状態に陥っている。つまり、彼女にはアリバイがある。

もう既に風紀員の負傷者も出ている。のんびりまったりと調査はしてられない。そう、黒子が決意を固めた時、公園を駆け回っている子供達の向こうで明らかに異質な人物を発見した。長身で、顔はかなり整っている方だが、如何せん目付きの悪さが目立っている。

「だーかーらあー。あの二人の置き去り《チャイルドエラー》はまだ検査中なんだよ。分かったかな？ んじゃあもう切るぞ、ドM猫耳フェチ朱雀君」

知り合いだか分からないが、電話の相手に暴言で通話を締めると、夏服姿の諏佐十拳は携帯電話を折り畳んだ。

そして、

「「あ」「」

目が合ってしまった。

chapter? 幻想御手へレベルアップ (後書き)

主人公にはまだ科学サイドで活躍してもらいます；

あと諏佐君が一方さんにボコボコにされた過去はいつか後で書きま
す (断言)

茶髪メガネの調査（前書き）

更新日遅れてすみません；

新約面白かったですね（〇< >〇）

茶髪メガネの調査

「ふーん。量子変速シンクロトロンねえ。どういう能力かは検討は着いてるのに、書庫のデータとは合致しないと」

「最近特に虚空爆破事件が多発してますの。諏佐さんもお気を付けて」

目が合ってしまった諏佐と黒子は何故かお互いに無視する気になれなかった。そして、諏佐が黒子にパトロールの理由を尋ね、彼女が事の経緯を話して現在に至るワケである。

「……素人の俺が言うのはアレかもしれねえけどよ。遺留品とかをサイコストリー読心能力の能力者に調べさせたら犯人の顔とか分かるんじゃないかねえのか？」

「その方法も試したものの……効果はありませんでしたの」
「そうか、とだけ呟き諏佐は何となく自販機の前で屯たむろってる子供達を見詰める。

数人の小学校低学年くらいの男の子が自販機を囲んで「この前常盤台のお姉ちゃんがこの自動販売機を蹴ったらジュースが出てきたのを見たんだぜー」とか言いながら自販機を「ちえいさー！」やら「チェストー！」とか言いながら蹴り始めた。止めなくて良いのか？と思わず風紀委員である黒子を見るが、彼女は何故か青褪めた顔をして固まっているだけだった。

そんな黒子に軽く首を傾げた後、再び自分の思考に戻る諏佐。

（書庫のデータと一致して無かったって事あ……幻想御手が関係してる可能性が高いな。急ぐ必要があるそうだ）

「んじゃ、俺はもう行くわ」

「はっ！ く、くれぐれも事件に巻き込まれないように気を付けて」
「……お前さつきまで何考えてたの？」

実は先程まで自分が通う中学のEースである超能力者《レベル5》のとある行動を思い浮かべてしまっていた黒子だったが、諏佐の

質問には目を白黒させているだけだった。

その間に諏佐はその場から能力を使って去り、我を取り戻した黒子は先程まで自販機を蹴り続けていた子供達への元へと赴く。

五人の男の子達の興味はもう別のモノに移ってしまったようで今度は茂みの中を覗き込んでいる。だからと言って、風紀委員の黒子にとっては先程の公共物破壊行動を見逃す理由にならない。もう二度とこんな事をするな、と注意だけでもしなければ。

「風紀委員ですの。貴方達は先程」

「おいこの人形、形が変わっていつてるぜ。おもしれー」

人形？ とそれを子供達と共に覗き込んだ黒子の喉が干上がった。そのファンシーなウサギの人形は今まさに中心に向かって不気味に縮んでいるところだった。

「それは爆弾ですのッ！ 今すぐ逃げてくださいですの！！」

側に居た子供達に叫び掛けるものの、当の本人達は啞然、といった調子でその場に突っ立っているだけだ。

（こうなれば私の空間移動テレポルトでこの人形ごと……！！）

子供達を押し退けて人形の前に立った黒子だったが、件の人形に触れる一歩手前で動きが止まってしまった。

黒子の空間移動の飛距離は八十メートル程が限界。別の場所に飛ばせば、そこに被害が及ぶかもしれない。

（私とこの子供達を空間移動……いえ、私の力では二人ぐらいが限界ですの……！！）

思考を進めている間にも時間は止まらない。

人形は今まさに重力子グラビトンを放出して『爆弾』の機能を果たそうとしていた。

「ッ！」

感覚で黒子は理解した。もう、間に合わない。思わずきつく目を閉じた。

「……？」

だが、数秒経つても何の変化は起きなかった。体に痛みも感じないし、物音も無い。

ひよつとしたら痛みも感じずに自分は死んでしまったのか。恐る恐ると目を開ける。

「おいおいおいおい。巻き込まれるなつつつてたお前が真っ先に巻き込まれてんじゃないよ」

そこには、何気無い顔で人形を手に行っている諏佐が居た。それも先程の光景が嘘のようにそのウサギの人形は原型を留めていた。

「量子変速、ねえ。一応、対策方法は分かったけど……こりゃ忙がねえとな」

茶髪メガネは第七学区のスキルアウトが溜まり場に行っている裏路地を歩いて居た。四角い眼鏡を掛けてインバネスコートを羽織った優男がこんな場所を歩いているのは奇妙なのかもしれない。だが、彼にはきちんとした目的がある。

巷で噂の幻想御手。

そして最近多発している能力者による犯罪。

この二つは関係しているのではないか。今まで能力者関連の事件を解決してきた茶髪メガネはそう思ったのだ。

件の幻想御手が巷に広まっているという事はそれを広めている連中が存在している可能性が高い。

そして、その事を調査している途中でたまたま発見したのだ。

幻想御手そのものを高値で密売している連中がいる、と。

「おん？ 何だ兄ちゃん。幻想御手か？」

通り道を塞ぐように屯していた四人の如何にもな連中が茶髪メガネに声を掛けてきた。

スキルアウト

茶髪メガネは答えず、その場で足を止める。

「おいこら。シカトですか？」

金髪の小汚い男がポケットに両手を突っ込んだまま茶髪メガネに歩み寄る。

「まあシカトするんならいいや。迷子になったか何だか知らねえがとりあえず買ってけよ、なあ」

相手の肩に手を置き、力を加える。ミシミシと音まで立て始めたが、それでも茶髪メガネの顔色は変わらない。

「怪我したく無いなら『買います』って言えよほらあ！」

「そうだねえ。けど生憎、僕はそういうの興味無くてね」

口を開くと同時に茶髪メガネは肩に置かれていた手を掴んで捻った。相手が苦痛に声を上げるが、お構い無しに更に押し込む。

ボキリ、と小さく音が響いた。

「あ、ぎゃあああああッ！」

「いやあ。君が逆に怪我してどうするんですか」

崩れ落ちる男の顔を爽やか笑顔で蹴り飛ばしながら、残った三人を見据える。

「実は僕、幻想御手の事を聞きに来たんですよ。大人しく詳しく教えてくれたら危害は加えないよ？」

「くそつたれが！ テメエ、風紀委員か警備員の回し者か！？」

「はっはっはっは。僕は只の物好きな探偵さ」

「テメエ！ ナメやがって！」

茶髪メガネの態度に激昂した男が落ちていた数本の鉄パイプを飛ばす。

それを茶髪メガネは冷静に観察する。

（強能力者《レベル3》の念動力テレキネシスってとこかな）

此方に飛んできた鉄パイプの一本を掴み、数秒程遅れて飛んでくる残りの鉄パイプを得物を使って弾き飛ばした。

「これも幻想御手の成果なのかな？」

あっさりと自分の攻撃を無効化されてアホ面をしている男に難なく近付いた茶髪メガネは、その首筋に手刀を打ち込む。

「でもその割には大した事ないよね。元々がアレだったのかな？ それを含めたとしても僕はまだ能力使ってないんだからさあ……もうちよつと頑張つてよ」

うつ伏せに倒れる男など視界に入れず、残った男達に笑顔を向ける。

愛想笑いのつもりだったのだが、相手には不気味に思われたらしく、

「ひいッ!? ち、ちくしょう! 俺の^{ファイアスロアー}火炎放射を食らえガキいい!」

能力を使って何かしらの攻撃を行おうとしていたスキルアウトだったが、右手を高らかに上げた瞬間に鈍痛が走った。茶髪メガネが持っていた長さ一メートル程の鉄パイプを相手の腕に叩き付けたのだ。

「モーション大きすぎだよ。敵の前で堂々と隙を見せる度胸は素晴らしいけどさ」

片腕を押さえながら蹲まろうとする男を蹴り飛ばした後、残りの一人に目を向ける。

もう既に姿は無かった。仲間を見捨てて逃げたのは間違い無いが、だからといって茶髪メガネはそれを見逃さない。倒れている連中に尋問するのもいいが、こんな連中がこそこそ隠れて売っている物なんて碌な物では無いというのが相場は決まっている。

今ここで幻想御手を学園都市から殲滅する事を茶髪メガネは決めた。

「は」。逃げても結果は同じだというのに。僕の仕事が増えるだけじゃないですか」

茶髪メガネの調査（後書き）

次回はシヨタコンテレポーターのあの方も出す予定ですw

幻想御手殲滅活動 一（前書き）

評価などありがとうございます。><

裏路地を抜けるとそこはフェンスで囲まれた空き地だった。先程逃げていた男は恐らくこの中に逃げ込んだのだろう。

「成る程。隠れ家としては中々の場所ではないですか」

ひしゃげたフェンスを潜り抜けて、茶髪メガネは空き地内へと踏み込む。そして入る前から目を付けていた物に近付いて行く。

五十平方メートル程の広さがある空き地の隅っこに三つの小さなプレハブ小屋があった。恐らくはここに逃げ込んだのだろう。他に隠れられそうな場所は無い。

茶髪メガネは特に何も警戒せずに小屋に近付く。

「どれから搜索するか迷うなあ。地下室とかあったら面倒だしなあ、もう」

しかし、この心配は無駄になった。三つのプレハブ小屋の扉が勢いよく開き、中から如何にもな連中が雪崩れ込むように次々と飛び出してきた。

「……まあ、ある意味安心したよ。予想通りの展開ですね」

敵意丸出しのスキルアウト達を前にしても茶髪メガネの落ち着き払った態度は変わらなかった。ざっと見て四十人程か。

「テメエ、この状況分かってるのか？」

したり顔で一人の男が口を開いた。先程、仲間を見捨てて逃げ出したあの男だった。

「ここにいる連中は俺を含めて全員能力者なんだぜ？ はっはあ！ほら強がってないで少しは怯えろよ！」

怯えるどころか、茶髪メガネは逆に愉しげに口端を緩める。

「さすがに弱者が相手とはいえ、この人数は面倒ですね。大サービスですよ、僕の能力をちよっと披露してあげるよ」

次に茶髪メガネが行った行動は実に単純な事だった。

一瞬でスキルアウト達を行動不能にした茶髪メガネは元来た道を引き返していた。

(どうやって幻想御手を使うかは分かったものの……肝心の配信者の情報はさっぱりでしたね)

三人のスキルアウトを伸した場所で茶髪メガネは立ち止まった。二人の男女が立っていたからだ。

一瞬、身構えるがすぐに自分の知り合いだと気づき、

「やあ、諏佐君」

長点上機学園の制服を着用している大能力者《レベル4》、諏佐十拳に愛想笑いを浮かべる。

「あら、どうやら先を越されちゃったみたいね」

その横に立つ胸に包帯のような物を巻いただけのインナーに霧ヶ丘女学院のブレザーを羽織った格好の少女が隣に居る諏佐を横目で見ながら肩を竦めた。

「先を越された？　もしかして諏佐君も幻想御手を調査しに来たのかな？」

「あ？　調査つーか殲滅だけだな、だからどうしたメガネ君」

「僕に協力、してみないかい？」

「ああ？」

「幻想御手を殲滅したいんだろ？　なら共通の目的って事で僕と協力しても損は無いと思うんだけど」

暫しの間、沈黙が続く。

諏佐から見て茶髪メガネという人物は只、事件を解決するのが趣味という物好きな奴である。だから、腹の底で何かを企んでいるという事は考えていない。

だから、協力してもリスクは無いと思うのだが……普段は避けている人物なだけにどうも精神的な枷フライドが跡を引いてしまう。

「私は協力しても良いと思うけど」

「お連れの方は承諾してくれたみたいだけど？ どうしますか諏佐君」

「結標……お前なあ」

「貴方の気紛れでせつかくの協力者を引き入れるチャンス逃したくないのよ。分かるかしら？」

「どうやら協力を承諾せざるを得ない形になってしまったらしい。

結標という第三者の介入のせいだ。

「わあーったよ、協力するよ。んで、メガネ君よお。先行していたって事はちったあ有力な情報は手に入れたんだろうな？」

煽るような相手の口調には慣れているのか、茶髪メガネは返答せず懐から何かを放り投げた。

「何だこりゃ。音楽プレーヤー？」

「それが現在出回っている幻想御手の正体だよ」

一頻り諏佐はそれを眺める。見た目は何の変哲も無い音楽プレーヤーである。

「俺は薬品の類かと思ってたんだがな」

「まあ、その可能性は僕も加味してたけどね。幻想御手の正体は曲みたいなんだよね」

「それって聞くだけで能力のレベルを上げられるのかしら？」

「さあ？ そこまでは分かりませんが……とにかく」

茶髪メガネは諏佐から音楽プレーヤーを取り上げると、懐にそれを仕舞う。

「これは僕が解析します。君達には引き続き幻想御手の殲滅と調査をお願いするよ」

それを聞いた諏佐の表情が怪訝になる。依頼された内容が気に入らないのではない。

「幻想御手の解析とかは風紀委員とか警備員に任せりゃ済む話じゃねえか。俺達の仕事は殲滅でいいだろうが」

「表舞台的な話だったら配信者を捕まえてハイおしまい、で済む話なんですがね。僕はどうも良くない予感がするんだよ」

珍しく自信が無さそうな口調だった。恐らくは勘なのだろう。だが、今まで幾つもの能力者関連の事件を解決したと噂される人物の勘である。

「……好きにしろよ。俺の目的はあくまでも幻想御手の殲滅だからな」

「ありがとう。何か分かったら連絡お願いするよ。僕もそうするからな」

「あーあ。なんか上手く言いくるめられたみたいでたまらねー」
言いながらも、諏佐は心の中では納得しかけていた。

現について最近に自分の知り合いが事件に巻き込まれたのだ。最近多発している能力者達の犯罪と幻想御手は何か関係しているかと思えない。

よくよく考えてみれば自分は急がないといけない。

「……何にせよ目的を絞れるのはプラスになるな」

「久しぶりの『ツール』の召集だつてのにシケとんなあ」

第四学区。冷凍コンテナが幾つも並ぶ場所に一人の男が訪れていた。

男は何も無い場所を睨み付ける。

「居るんやろ。闇路やみじ」

「……居るぞ。……久しぶりの仕事だ」

低い声は聞こえてくるが、闇路という男の姿は見えない。唯一、存在を認識させている声も感情が込もっていない。ただ単に、空気を振動させているかのよう物だった。

「……要件は幻想御手の保護だ。……もう動いている者も居る。急ぐ必要があるぞ天童てんどう。」

「ケツ！ 幻想御手って低能力者御用達のおれか。またシケたもんを任されたなあ。これってリーダーのお前が不摂生しとる罰か何か

か？」

天童と呼ばれた男は悪態を吐く。だが、姿の見えない相手の顔色など分かる筈も無い。

「……お前は第七学区に行け。……既に御影みかげを先に行かせてある」

「なら、詳しい事は御影の奴に聞けばええんか？」

「……そうだ」

「分かった。ほな、ちやつちやと終わらせてくるわ」

地面を一蹴り。それだけの動作で地面に大きな亀裂を残して天童の姿はその場から消えた。

幻想御手殲滅活動 一（後書き）

今回はオリジナル暗部組織とか出してみました

あわきんが協力している理由は次話くらいで明かします。

座標移動へムーブポイントへVS空間連結へライトチェインへ(前書き)

今回はあわきんが頑張りますよ！

座標移動へムーブポイント〈VS空間連結へライトチェイン〉

七月二十二日。

茶髪メガネや結標淡希と初めて合流した日から五日が経った。そして、諏佐は今も幻想御手を悪用しているスキルアウト達をプチプチといった感覚で潰し続けている。

この数日で全く進展が無かったわけではない。虚空爆破事件は黒子を初めとする風紀委員や、超能力者《レベル5》の第三位の活躍によって解決された。そして、風紀委員達もようやく幻想御手の調査を開始し始めたらしい。

「……………」
だが、目立っていた事件が解決されたからといって安泰は訪れていない。

足元に転がっているスキルアウト達。現にこうやって能力を駆使して悪行を成し遂げている連中がいるのだから。

スキルアウト達から取り上げた幻想御手《音楽プレイヤー》を全て握り潰す。

「ちよつとアンタ」

不意に後ろから声を掛けられた。

振り向くと、そこには前髪から紫電を弾けさせている常盤台中学の少女が立っていた。諏佐はこの人物を知っていた。

学園都市が誇る超能力者《レベル5》の序列第三位。

みさか みこと
御坂美琴。

レベルガン
超電磁砲の異名を持つ電撃使い《エレクトロマスター》だ。

「……………」
「あ？」

「ソイツ等はアンタがやったの？」

「ああ。それがどうした第三位？」

「ここで何をしていたの？」

「答える義務があるのか」

何となく分かっていった。

美琴は連続虚空爆破事件を解決に導いた人物の一人である。恐らくは幻想御手の事も知っているだろう。

現在時刻は午後九時頃。こんな時間に常盤台という門限の厳しい学校の規則を破ってまでこんな人気無しの場所を彷徨いているという事はそれなりの訳があるのだろう。

例えば自分の後輩である白井黒子という風紀委員を助ける為に幻想御手の調査をしている、みたいな。

「痛い目に遇いたくないなら、答えなさい」

「断る。何、優位に立ってんのお前？」

「なら」

紫電がさらに激しく弾ける。

「力づくにでも聞き出させてもらうわ！」

黙って自分も幻想御手の調査をしていたと言えば穩便に物事は済んだかもしれない。適当に相手を撒く事は選択肢の中にはあった。

だが、有り体に表現するなら今日の諏佐の機嫌は悪かった。

何回も何回もスキルアウトという小物をちまちまと狩る作業が続いている。人間、飽きは必ず来るものである。

それに対して今日の前にいる相手は思い切り自分の能力をぶつけられる筈だ。

諏佐達のいる場所は川原だ。ここなら能力をフルに使っても被害は少ないだろう。

要するに諏佐は暴れてストレスを発散したかったのだ。強者にとばっちりを与えても罰は当たらないだろう。恐らくは。

「ハン、やってみやがれ第三位iiiiiiiiッ!!!」

高位能力者同士の激突が始まった。

結標淡希は人通りの少ない裏路地を闊歩していた。

スキルアウト等に見つかればいつ襲われてもおかしく無い格好をしているが、結標はそんな事は気にしない。彼女にはそんな連中を撃退出来る能力がある。

そう、自分に宿っている座標移動ハイポイントという能力。簡単に人を傷付けられる力。

結標が今この世で一番知りたいたい事は何故自分にこんな能力が宿っているか、という事だ。それは今現在分かってないのだが、諏佐に言われた「能力があるからこそ、この街でやっていけている」という言葉で今は無理矢理に納得している。

そして今回、諏佐に協力した理由。

自分の能力を幻想御手というデバイスを使ってまで上げて、力を手に入れた連中が何を行うのか……興味が湧いたのだ。

幻想御手の殲滅はそのついでみたいなものだ。霧ヶ丘に通っている同級生からしてみれば、くだらないと一笑されるかもしれない。

「十拳から連絡が来なければ幻想御手の事を知るよしも無かったかもしれないわけだし……お互い様といったところかしら」

それでも、『窓の無いビル』にVIPを運ぶ陳腐な仕事よりかはマシなのかもしれない。

「おやおやいけないねえ。こんな所を君みたいな女の子が歩いてちゃ」

ガツン！ と鈍い音が路地裏に響いた。一瞬、視界が点滅した結標だったが何とかその場に踏みとどまった。こめかみの辺りからドロリとした赤い液体が流れ出す。

「うぐっ……!？」

勢いよく後ろを振り返る。

白い光の円がそこにあつた。そしてその中から現れた一人の男。

「あはは、これで気絶してくれたら助かったんだけどなあ。無意識に手加減しちゃったかな？」

「あら、幻想御手で強化された自分の能力を試しにでも来たのかしらっ」

「あははっ、俺をスキルアウトなんか達と一緒にしないでよ。俺は元々大能力者《レベル4》だよ」

チャラい風貌だけを見るとスキルアウトにしか見えないその男は似合わない微笑みを浮かべる。

「……目的は何？」

スカートに巻いている金属製のベルトに挿していた軍用懐中電灯を抜きながら結標は相手を睨む。

「君さあ最近、幻想御手を潰しまくってる結標淡希ちゃんでしょ？」

俺は学園都市の暗部の構成員なんだけどさ、上からの命令で君を潰しに来たんだよね」

「……なるほど、『裏』の人間という事ね」

「大人しく幻想御手から君が手を引いてくれればもう手を出さないと約束出来るんだけどなあ」

「生憎だけど、私って中途半端に物事を終わらせるのは好まないのよ。それに」

結標は手の中で懐中電灯をクルクルと回しながら引き攣った笑みを浮かべる。そして、血が流れ出ているこめかみを指差し、

「いきなり殴られてさすがにカチンときてる事だしね」

「なら、仕方が無い」

再び、結標に向かって攻撃が再開された。握られたボールが彼女のこめかみに吸い込まれてゆく。だが、それは突如間に現れたマンホールの蓋によって弾かれた。

「能力は面白いかもしれないけど、やる事は単純ね」

先程振るった懐中電灯を回しながら結標は余裕の笑みを浮かべる。自分の周りの物を転移させて、攻撃を防ぐ。これが結標淡希という能力者の防御策である。自身を空間移動出来ればこんな周りくどい事をしなくても楽々に回避出来る筈だ。だが、結標はとあるトラウマが原因で自身の転移を極端に避ける癖があるのだ。

「おやおや、この御影創みかげ そうの空間連結ライトチェインを嘗めてもらっちゃあ困るなあ」

直径五十センチ程の光の円から右腕を引き抜きながら御影が肩を
竦める。

手に握っているボールには結標の物と思われる少量の血が付着し
ている。

「なら、さつさとその御自慢の能力の真価でも見せてくれないかし
ら」

煽りながら、結標は相手を観察する。

自分との距離は目測で五メートル以上か。相手の手に握られてい
る血の付いたボール。恐らくはあれで殴られたのだろう。

先程のマンホールで防ぐ事が出来た攻撃。あれは御影が隣に現れ
た光の円に右腕を差し込んだ瞬間、結標に向かってボールを握った
腕が振るわれたのだ。そして、初めて自分の目の前に現れた時の三
次元的な法則を無視した登場方法。

これらの事から察するに、御影という男は自分と同じ空間移動系
の能力者だと結標は推測した。

「ははっ、真価なんか見せなくても君のゆるゆるガードなんか破る
のは容易いんだよ」

座標移動へムーブポイントへVS空間連結へライトチェイン（後書き）

やっぱり美琴さんは出しとかないとね、何たって第三位だもん（え

それにしてもあわきんや美琴のしゃべり方って意外と書くの難しい
です……（笑）

自分の中ではあわきんは痛みに強いイメージがあります（笑）

座標移動へムーブポイントへVS空間連結へライトチェインへ 二(前書き)

更新遅れちゃいました；

なんか空間移動系の能力者のバトルは難しいですね(笑)

目の前に出現させた光円に御影は腕を突っ込む。

(……来るッ！)

いつ攻撃が来ても対応出来るように結標は懐中電灯を構える。

どこから光円が現れようが、自分の周りに遮蔽物を出現させれば良い話だ。

結標の目線のすぐ先に光円が現れた。結標は先程の攻撃を凌いだマンホールの蓋を光円の前に転移させる。

(真正面から！？ 随分嘗められたものね)

さて、どうやって反撃しようか。

そんな考えは一瞬で霧散させられた。転移させたマンホールの蓋から滲むように浮かび出た光円が現れたからだ。自分の身を守るうとした行動が逆に仇となった。

ボールが握られた腕が結標の顔面を狙う。

(遮蔽物を『破る』じゃなくて『すり抜ける』なんて……ッ！)

とつさに持っていた懐中電灯で何とかそれを防ぐが、如何せん相手の方がかなり力が強かったらしい。能力を抜くとただの女子高生でしかない結標は後ろへ踏鞆を踏む。あまりの衝撃に仰向けにひっくり返りそうになる程だった。

(守って駄目ならこっちから仕掛けるしかない)

マンホールの蓋が音を立てて地面に落ちると同時に結標はスカートのポケットに手を入れる。その中にあるコルク抜きに触れながら演算を開始する。

(手足にコルク抜きを叩き込んで動きを止める。これで終わらせてもらうわ)

懐中電灯を振るう。ポケットの中のコルク抜きは十一次元上の数値から空間を渡って御影の手足に突き刺さる。

その筈だったのだが。

御影の両手両足に、合計で四つの光円が出現していた。当の本人の涼しげな表情を見た結標は本能で知った。攻撃を、外した。

「音が無いといっても俺クラス的能力者になるとどこに攻撃が来るか大体分かっちゃうんだよねえ。」

……あ、ホラ返すよ。俺は未成年だからお酒は飲まないからね」

おどけた口調で御影はそう言いながら指を鳴らす。

カラン、と鳴りながら自分の足元に落ちてきたコルク抜きを見た結標は思わず歯を食い縛る。

遮蔽物によるガードも無効、転移攻撃も通じない。ならば、体に負担を強いられる戦いを仕掛けるしかないのか。

「わああ。そんな怖い顔しないでよ」

手足に出現させていた光円を消した御影はニタニタとしながら結標に話し掛ける。

「相手が自分より遥かに優秀な能力を持つてるからって恨むなよ。恨むなら君のそのちやちな能力を恨みなよ」

「フッ！」

相手の僅かな隙も見逃せない。

息を短く、鋭く吐き出しながら懐中電灯を振るう。そして今度は相手の体に物体を転移させるのでは無い。

（奴を此方に転移させるッ！）

警棒兼用の懐中電灯を両手で強く握り締め、思い切り振りかぶって振るう。今度は打撃用の武器として。

「ッ!？」

手応えはあった。

だが、それは人間の肌を殴った感覚では無かった。

「なるほどねえ」

ついさっき味わった金属同士をぶつけるような手に痺れが走る重い感覚だった。

「俺自身を転移させて直接殴ろうだなんて中々にワイルドじゃない

「ちやちな能力だったら私は自分の力に恐れる必要も無いし、悩む必要も無かったのよ」

「そんな心配はいらないよ。君の能力がしょぼいという事は俺が再現してあげたじゃないか」

「そう」

結標は少し口端を上げる。

嘲笑う表情では無く相手を哀れむような表情だった。今の彼女に怒りのそれはもう無い。

「残念だわ」

口端を吊り上げたまま結標が空を仰ぐ。つられて上を見上げた御影の喉が干上がった。無意識に唾を喉に流し込む。

「な、何だこれは!？」

一言で表現するならば、空間が歪んでいた。

「ミジミシベキベキッ!」という轟音が辺りを鳴らし始めた。頭上から落ちてくる破片を見ながら、御影は気付いた。何かが、この裏路地ごと押し潰そうとしている。

「私が転移出来る物体の最大重量は四千五百二十キログラム。これがどんな意味か分かるかしら?」

「まさか……!?! 正気か結標淡希ッ!」

結標の座標移動は大量の物体を移動させる際に先行して空間を歪ませる。だから、厳密には『瞬間移動』では無い。現在のこの光景はその性質によるものだ。

（クソッ! すこし遊びすぎたか。いくら何でもあんな質量は俺の空間連結でも通過させきれない!）

迷わず、ビルの壁に光円を出現させる。要は裏路地が押し潰されようが、その裏路地から抜けてしまえばいいだけの話なのだ。

ブン、と何かが空を切る音がした。

「ぐっ!?!」

「貴方には私の能力を確かめてもらう必要があるもの。逃しはしな

いわ」

懐中電灯を結標が振るった音だった。

両足にコルク抜きを叩き込まれた御影は支えきれなくなった上半身の重みで地面に倒れ伏せた。今まで結標の転移攻撃を防げていたのは相手がこちらに攻撃を仕掛けると分かっていたからだ。

脱出の為に演算を割っていた御影に音も無い転移攻撃を回避する余裕は無かった。そんな芸当が出来るのは例え十一次元の座標を解析して迫っている攻撃をいつでもどこでも反射出来る能力者くらいだろう。

自分を見下ろす結標を顔だけ上げて見上げながら御影は脂汗を飛び散らせながら叫ぶ。

「おいっ！ 今すぐ止めるおおっ！！ お前も死ぬつもりか結標ッ！？」

「何を言ってるのかさっぱりだわ」

肩を竦めた結標の姿がその場から消えた。

自分自身を転移させた。御影はすぐにそつだと気付いた。相手は空間移動系の能力者だ、考えれば自分自身を空間移動させて逃げるなど当たり前な行為なのだ。

慌てて自分の体を転移させる御影だが、激しい痛みがただでさえ負担のかかる演算の邪魔をしてくる。

「く……クッソがああああああッ！！！！」

絶叫が響き渡った次の瞬間。

遅れて出現してきた一トン以上の大量の物体がほぼ一瞬で裏路地を瓦礫の山に変えてしまった。

座標移動へムーブポイントへVS空間連結へライトチェインへ 二(後書き)

あわきんさんのキャラ崩壊してないか心配；

今回はビリビリ対主人公です！

V S 超電磁砲へレールガン (前書き)

閲覧、評価、お気に入り登録ありがとうございます！
麦のんのん

V S 超電磁砲〈レールガン〉

目の前に立つ短髪の端麗な顔立ちをしている少女は何を隠そう、学園都市の中でも頂点に立つもの達《レベル5》の第三位である。

これほどの強敵に合法的（？）に喧嘩を売るチャンスに巡り会えたのだ。よって全力をぶつけなければ、勿体無いという言葉では済まされないと諏佐は考える。

「つとその前に」

諏佐の足元に倒れていたスキルアウト達の姿が消えた。座標交換デンスルフォースの力を使って諏佐が自分達から遠ざけたのだ。

「コイツ等いるとお前との勝負の際に邪魔だからな」

「へーえ」

美琴は意表を付かれたような顔をして声を漏らす。

「悪者みたいな顔して意外ねアンタ。気に入ったわ」

「年上に対しては敬語を使え。そして馴れ馴れしい。潰す」

「バオツ！ という音と共に諏佐の目の前に直径三十センチの歪な形の塊が出現した。能力を使って地表や浅い地中の鉱物を無理矢理結合させた無骨な塊である。

それを諏佐が脚を真上に振り上げて蹴り飛ばす。ほぼ音速という速さで塊は美琴へ突き進む。

当たれば無論致命傷だ。

だが、そんな攻撃など超能力者《レベル5》の第三位にとっては恐るに足らな過ぎた。地面から噴出した美琴を守る黒い壁のような物が現れて鉱物の塊を粉々にしたからだ。

それを見せつけられても諏佐の士気が下がる事は無い。序の口の攻撃に過ぎない、お互いに。

「ぎゃっははははははッ！！ さっすが超能力者《レベル5》！

他の電撃使い《エレクトロマスター》とは応用力が違ええ！」

「笑ってる余裕なんかあるのかしら！？」

前髪から火花を散らせ、美琴は電撃を放つ。

電流の弱い、飾りの高圧電流ではなく本物の雷撃。光速でそれが諏佐に迫る。

「……………」

一撃で終わらせる気だった美琴は思わず目を見開いた。御坂美琴は電撃使い《エレクトロマスター》という能力の特性上、常に電磁波を周囲に発している。その反射波を利用してレーザーのように周囲の物体を感知する事もできる。勿論生物も例外では無い。

だから、自分の横数メートルの位置に諏佐十拳が立っている事に気付いたのだ。

「早速、『電撃の槍』に磁力で蠢く砂鉄を見れるとはな。サービスしてくれるじゃねえか第三位。たまらねーぜ！」

「……………アンタ、空間移動系の能力者？」

相手の能力は分からない。諏佐の手足、指一本の動きにも注意を払いながら美琴は問い掛ける。

「まあ似たような事も出来るがな。だが、俺の本質とは違いえんだよな。それより……………」

諏佐が顔を歪ませる。再び目の前に歪な塊が地面を抉り取って現れる。

「さっさと見せてくれねえかな。超電磁砲レールガンつてのをよォー！」

今度は鉋物塊を蹴った後に直ぐ様新たな塊を作り出し、再び蹴り飛ばして連続して攻撃を行う。装甲車を蜂の巣にする程の破壊力だが、それでも超電磁砲レールガンの通り名を持つ少女の行動は変わらない。

向かってくる塊を操った砂鉄で迎撃するだけである。美琴にまともな傷は決して与えられる事は無い。

「使ってもいいけど、アンタに超電磁砲を真正面から受け止める器量はあるのかしら！」

飛んでくる大小の破片を腕で庇いながらも美琴は好奇心が浮き出た笑みを崩さない。

「どうやら使ってくれる気はねえみたいだな」

最後の鉱物塊を蹴飛ばした後、諏佐は足を止める。

「残念だなあ」

声は美琴の真上から聞こえて来た。

「……ッ！ 上か！」

「ま、ここは俺の勝利の為に倒れてくれよなあ！！」

宙に浮かぶ破片と自分自身の座標を入れ換えた諏佐が脚を後ろに引き絞る。狙うは相手の頭。旋毛でも側頭部でも、とにかく当たれば如何に超能力者《レベル5》とはいえ昏倒させるのは容易だ。

それに対して美琴は体を動かさなかった。自分の体を中心にして全方位に電撃を放ったのだ。

「ッ！？ ちいッ！」

遠くに居る相手は電撃でぶち抜けばいい。近くに居る相手は電撃で風ぎ払えばいい。美琴にとってはそういう事なのだ。

慌てて、諏佐も能力を使って進る紫雷を回避する。美琴から十五メートル程離れて立つ諏佐はククク、と含み笑いを漏らす。

「流石だな。反射神経も咄嗟の演算能力もそこの奴等とは違いえ」

「そう言うアンタも私が戦ってきた能力者の中ではかなりいい腕してるけどね！」

「ハッ！ 余裕だな第三位。だが、ここからは雑魚に使うのとは違うモンを見せてやる」

諏佐十拳はニヤリと笑う。今までの狂気染みた笑いでは無く何かを目論んでいるかのような笑い。

直ぐ様、美琴は周りから気配を感じ取った。それと同時にポコポコボコッ！ と地面から幾つもの物体が浮かび上がる。

「何よ、さつきとあまり変わらないじゃない」

美琴の周りを鉱物塊が取り囲む。間隔無く並んでいる様子は金属製の巨大な数珠にも見える。

「弾ける」

ピシリ、と小さく入った亀裂が亀裂を生み始める。そして、鉱物塊は諏佐の座標交換で内側からの拡散するベクトル変換によって四

方に飛び散る。

無数の鋭く小さな破片が美琴を襲う。

「真正面から駄目なら四方から……か。悪くは無いつわー！」
風が唸った。

波のようにつねる砂鉄が美琴の周りに地面を擦り取るかのような音を立てながら現れる。それは黒い竜巻の如く回転し、破片を飲み込んでいく。人が生んだ小さな天災といっても大袈裟では無いだろう。

激しい突風と共に役割を終えた砂鉄は消え失せる。

「ヒューッ！ やるねえ。だが、隙有り」

不穏な言葉に美琴が疑問を浮かべた時、まだ彼女は気付けてはいなかった。

足元から出現した鉋物塊に。

「下！？ しまっ ！」

物音が聞こえた、しかし、もうその瞬間には鉋物塊は爆散していた。

「さあて。まともに食らえば足の大怪我は避けられないが」

土煙が上がる一点を諏佐は睨む。倒れていれば諏佐の勝ちだが、それでは彼は満足しない。諏佐十拳も学園都市の能力者の一人だ。超能力者《レベル5》の憧れという物は認めたくなくとも心の奥隅で存在している。

だから、ここで簡単に第三位の人間に倒れてもらうと興が削がれる。

アクセラレータ
一方通行。
そぎいたくんは
削板軍覇。

手強いという一言ではとても表せない超能力者《レベル5》。
越え難い壁として立ちはだかつてこそ望んで戦う程の相手なのだ。

「……！ 上等だよ第三位」

のつぺりとした銀色の物体がうつすらと輪郭を現す。それを蹴り倒してふらつきもせず姿を見せた御坂美琴に諏佐は再び狂気染みた笑みを作る。

「磁力で即席の盾でも作りやがったか。……どうやら俺の遠距離攻撃は通用しねえみてえだな。たまらねー」

堪らない、そう言いながらも諏佐に焦りの色は見えない。右手に緑色の光が集約して行く。渦巻く自由電子レーザーが形を型どる。平たく、長く、鋭く。

それは一メートル程の剣の形を成していた。

「行くぜ、第三位」

真つ直ぐに諏佐十拳は駆け出す。咆哮も上げず、ただ相手を見据えて走る。

(今度は空間移動もどきはしない！？)

一瞬、たじろいだ美琴だったが。

(でも、それなら好都合かもしれない。手に獲物を持ってるけど電撃の速さに人間の腕は追い付けない。真正面から向かってくるんなら……)

体から紫雷が荒ぶり、迸る。

「吹っ飛ばすッ!!」

全方位に電撃が放たれる。地面に跡を作りながら諏佐に電撃が迫る。

例えば、空間移動テレポートをしようが美琴に近付けば電撃をまともに浴びる事になる。

「なっ……!!」

今度こそ美琴はたじろぐ。

諏佐は足を止めない。電撃は諏佐に当たらないからだ。

彼が走る道のりにレールを敷くかの如く鉄の杭のような物体が次々と出現する。その物体に電撃は吸い寄せられるように向かってしまい、どうしても諏佐十拳という的から外れてしまう。

「避雷針を作り出した……?」

そうとしか考えられない。だが、避雷針という物はただ金属の棒を突き立てるだけではこんなにも効率良く効果を発揮しない。

突針部、避雷導線、接地電極から成り、尚且つ有効範囲は突針からの垂直線との間の角が六十度以下となる円錐内とされる物である。これを的確に再現出来るのは諏佐の高い演算能力があつて成せる技だ。

電撃が封じられたと判断した美琴は今度は砂鉄を操る。剣、槍、鞭の役割を持った砂鉄が諏佐に襲い掛かるが、彼は自由電子で作り上げた剣でそれを風ぎ払う。

相手との距離は二メートル程に縮まる。

砂鉄の黒い壁が地面から現れる。今までの遠距離攻撃全てを呑み込んだ壁。それに向かって諏佐は剣を一振りした。

振った軌道線上に沿ってレーザーが飛び出した。それはいとも簡単に黒い壁を霧散させてしまう。

「動くな」

美琴の喉に自由電子の剣を突き付け、レーザーシート 諏佐は口端を吊り上げた。

VS超電磁砲へレールガン《後書き》

いやー意外と御坂さんの戦闘シーン書くのに苦労しました；
もっと扱い易いイメージあったんですけどねw

次回はどんなになるか分かりません（え

V S 超電磁砲 二（前書き）

更新遅れてすいません！ しかも今回短いつていう……；

最近妙に用事入って……すみません；

「このまま喉を突かれたく無いなら、参りましたとでも言えよ第三位」

剣の形を成している自由電子がチリチリと音を放つ。その状況で、尚も美琴は不敵な笑みを浮かべる。

「それは、アンタが先に言った方がいいんじゃない？」

「……………」

背後の物音に感付いた諏佐が顔を横に向ける。瞳を動かすと何十本もの砂鉄の槍が自分の衣服すれすれの所まで迫っているのが確認出来た。

視線を戻して諏佐は相手と睨み合う。こちらが動けば相手も間違はなく動く。どちらが速いか。

この状況では、相討ちも有り得る。

「……………チツ！」

舌打ちが聞こえた。美琴は思わず体を強張らせる。

「止めだ」

ぷらん、と腕を力無く諏佐は下ろす。手に集まっていたメガワット級に出力を上げられていた自由電子も消え去った。

「へ！？ 突然アンタ何を……………」

ポカンとしている美琴を他所に諏佐は言葉を続ける。

「止めだ。俺がやりたかったのはストレス解消であって関係無い奴を潰す事じゃねえからな。ここで勝負を終わらせるのが丁度、区切りがいい」

「ちよつと、勝手に話を終わらせようとしてんじゃないわよ！ 私たちはまだアンタに用があんのよ！」

もう既に諏佐は再びいつもの無表情を顔に貼り付けているが、美琴の険しい表情は変わらない。

「あ？ 用って何だよ」

「アンタはさっきまでここで何をしていたかって事よ！」

「何だ、それか。幻想御手を潰してた」

「へええっ!？」

思わず後ろに飛び退いた美琴だったが、直ぐに困惑した表情を浮かべる。

「じゃあ何でさっきアンタは紛らわしい態度をしたのよ?」

「黒子の奴に散々お前の事を聞かされてたからな。元々、超能力者《レベル5》だったのは知ってたが、黒子の話聞いてから無性に戦いたくなってたんだ。」

つまり、俺の身勝手だ。悪かったな第三位」

「別に私も悪くは思っただけだよ。それに、突っ掛かっていったのは私の方からだし……それより、アンタ黒子の知り合いなの?」

「まあな」

ここで諏佐はバツの悪そうな顔をする。明らかに興味有りな目をしている相手を見ながら、黒子の事を話に出したのは蛇足だったと今になって気付いてしまった。

「聞いて無かったけど、名前は?」

「諏佐十拳だ」

どうせここで答えなくても美琴が黒子から聞き出すだろう。だから、あえて堂々と名乗ってみせる。

美琴がこの出来事^{バトル}を黒子に話したらドロップキックからの金属矢で地面に磔コンボは確定。どっちにしる御坂美琴に喧嘩を売った時点で白井黒子からの制裁は確定したような物である。

「諏佐十拳……ああ!」

パツと表情を明るくし、美琴は手を打った。

諏佐はせめてこの場から離れてさっさと次の行動に移りたいのだが、もう嫌な予感しかしなかった。

逃げようとする素振りをしただけで電撃が飛んできそうな気がしてならない。

「諏佐って名前、何日か前に黒子から聞いたわよ。自分の窮地を助

けられたって言うてたけどまさかアンタだったとはね。確か量子変則が使われたアルミ缶爆弾を握り潰したって話だったわ！」

「助けてなんかねえよ。たまたま近くに良い素材があったから俺の能力を試したみただけ……」

「もしかして、照れてる？」

「は？」

「アンタってこういう類いの感情が顔に出ないタイプでしょ！」

「じゃあ顔に出してやろうか『うぜえ』ってな」

ここまで諏佐を煽ってふと美琴はある事が思い浮かんだ。

くるん、と身を翻して不機嫌になっっている諏佐に背中を向ける。

悪巧みしている時の顔というのは見られて良い気は全くしない。

(前から黒子が男を話題に出すのは珍しいと思っただのよねえ)

思い浮かぶのは自分と同居している変態《百合》疑惑のある後輩。

自分の事を慕ってくれてるのはありがたいと思うのだが、どうも一線を越えてる気がしてならない。

(これは……これはもしか！？)

チラリと後ろの諏佐を見る。

容姿はかなり整っている方だと思う。現在着ているカッターシャツでは無く少し、洒落た服を着ていればモデルです、と言っても疑われないかもしれない。

それに、この男は強い。恐らくは大能力者《レベル4》クラスだろう。

(はっ！ そうだ思い出したわ)

そういえば黒子は諏佐という名前を一回だけでは無く何回か出していた。確か前の件では妹扱いされた事の愚痴を漏らしていた。

無意識に握り締めていた両拳に美琴は目を落とす。そして、あの結論に辿り着く。

(これは……黒子の変態《百合》を治す一大チャンスでは！？ キューピッドになるのよ私！)

意を決して勢い良く振り替える。

「ねえ、アンタ……ってアレ!？」

諏佐の姿はもうそこには無かった。

「嫌だねえ。他の連中は働いているってプレッシャーを与えられるのは。」

「……やっぱり一人で動くのがベストなのかもしれねえな。何やってんだろうなあ……俺」

頭を掻きながら諏佐はスキルアウトがたまり場にしていそうな場所をしらみ潰しに探していた。

御坂美琴との戦闘もあつたが、そこらの能力者を料理出来るくらいの体力は残っている。

「それにしても茶髪メガネの連絡がここ数日無えな。死んでないだろうなアイツ」

「お前は今から死ぬけどな」

「ッ!？」

どこから発せられた声か、それも確認出来ずに斥力の装甲で包まれている筈の諏佐の身体は宙を舞っていた。

V S 超電磁砲 二(後書き)

御坂美琴嬢のキャラってこんなでしたっけ？

キャラ崩壊してる気がします……、

VS重力制御ヘフリーウォーカー

襲撃を受けた諏佐の身体はコンクリートで固められた壁を豆腐を崩すかのように突き破り、建物の中のデスクを蹴散らしながら廃ビルの中を転がる。

「ぐ、うッ」

壁に激突してようやく諏佐の動きは止まった。ぐぐもった声を上げながらも、壁に手を突いて立ち上がる。

埃が積もった床がポツポツと赤く汚れる。激しく頭が揺れていた。恐らくはそこからの出血だろう。

だが、そんな事を今、気にかけている暇は無い。

「久しぶりやなあ。諏佐十拳」

目の前に、襲撃者が姿を現したからである。

「天童……空歩」

目の前の赤髪の無造作ヘアの男を睨みながら諏佐は思わず奥歯を噛み締めていた。普段、彼があまり見せない表情だ。まるで、再開を拒否していた相手と対峙したかのような。

「いやいやあ。暫く見ない内に正義の味方ごっこを始めてるとはなあ。カツコイーツ！ とでも言うてほしいんか？」

「お前も相変わらず屑のまんまのようだな。見るだけで吐き気がする面あしてやがる」

諏佐の瞳に敵意が籠る。もう、頭の揺れは治まった。悪態を吐きながら演算を再び開始する。

煽られたの対して、天童は小さく鼻で笑う。

「ケツ！ 威勢だけは良いようやな。実験が怖くて研究所から逃げ出したチキンが」

そう煽り返した時には目の前に座標交換を使って転移してきた諏

佐が拳を振りかぶっていた。

「話は後で聞いてやるよ」

天童の前髪が揺れる。

「お前を口と声帯だけ残ってる肉の塊にしてからだけどなあッ!!」

轟!! と烈風を生み出しながら諏佐の拳が振るわれる。

対して。

「そりゃ上等やなあ」

天童は立てた人差し指を顔の前に持ってきただけだった。

だが、天童の一本の指は人体なら千回壊しても有り余る程の威力が込められている突きを軽々と受け止めていた。薄ら笑いを浮かべたまま指一本で諏佐の拳を払い除ける。

「なっ……!!?」

「何や? 正面なら勝てるつもりで思ってたんか」

容赦無い蹴りが諏佐の脚が土手っ腹に打ち込まれる。

常人、いや、そこらの能力者では真正面から諏佐を攻撃してもピクリとも彼をその場から動かせないだろう。だが、天童の放った蹴りは諏佐を軽々とノーバウンドで二十メートル程吹き飛ばす。

諏佐の体は壁を突き破り、先程まで目の前に居た天童の姿があったという間に小さくなる。

今度は電荷同士を反発させた斥力の装甲に運動量のベクトル拡散をプラスした為、初撃ほどのダメージは無い。

だが、自分は相手から一方的に攻撃を加えられている。思った程のダメージがない事に安堵している場合では無い。

飛ばされたままの勢いで地面に叩き付けられるが、電荷装甲で体を覆われている諏佐は意にも介さず起き上がる。辺りを見回すと、先程自分が突っ込んだ建物は解体予定の廃ビルで、今立っている場所はその敷地内という事が分かった。

廃ビルの崩された壁の空間から天童が姿を現す。奇襲をする事も無く、堂々と。だが、普通では無かった。

彼の体は地面から五メートル程の位置に浮いていた。そのままの

体勢で天童は此方向に向かってくる。

手足を動かさずに、ノーモーションで、尚且つ高速で迫ってくる。髪や衣服は揺れている、何かしらの力で移動しているのは確かなのだが。

空中に体を浮かせたまま、天童は今にも歯を剥き出しにしそうな諏佐の顔を見下ろす。

「まさか正面から殴りかかってくるとはなあ。お前、俺の重力制御フリーウェザーを忘れたんか？」

口からフツと息を漏らし、諏佐は血の混じった唾を吐き捨てた。

「重力のベクトルの向きを操るだけの能力で粹がつてんじゃねえぞゴミが」

足底に働く斥力を限界まで上げ、地面を蹴りあげて諏佐は弾丸の如く跳躍する。宙に浮いたまま、いや、正確には『空に向かって落ちていくまま』自分を見下ろしている天童に向かって。

放ったパンチはあっさりと片手で受け止められた。

諦めずに余った左拳を突き出すが、今度は外部から加えられた重力によって軌道を反らされる。拳は天童の頬すら掠められずに、大きく空ぶる。

「ハッハア！ 昔の俺と同じやと思ったら大間違いやで！」

カラカラと笑いながら、空中でバランスを崩しかけた諏佐の背中にスナツプを利かせた裏拳を叩き込む。

「があッ!？」

一見すると、友人同士の軽いど突きにも見えるが、実際は重力のベクトル変換を加えた重い一撃だった。一気に諏佐と地面の距離がゼロになる。

叩き付けられてバウンドした弾みで諏佐は仰向けになる。目が合った瞬間、天童の顔が狂喜で歪んだ。目を剥き出し、阿呆のように開いた口から罵倒が飛び出す。

「どうしたどうしたア!! それでも過去に何百人もの同期をぶち殺した悪鬼かよオオ!？」

恐らく、諏佐十拳という人間を手玉に取っている事が嬉しくて堪らないのだろう。堪えきれなくなった汚い笑い声が漏れだした。

「ギイヤっはははははっ!!!」

「ひやは」

諏佐も笑う。相手と同じく堪えきれなくなったのだ。

そうだ、過去に自分は何の抵抗も持たずに自分と同じ年、年下の相手でも容赦無く殺していた。寧ろ、快感を感じてた時もあった。

だが、『あの時』のトラウマ以降、自分と同じ能力者相手と本気の殺し合いをするのは億劫になっていた部分もあるかもしれない。

この瞬間だけ天童は能力者を躊躇いなく殺していた時の衝動を思い出させてくれた。

何故なら、目の前で笑っている天童も自分と共に多くの同僚を虐殺していた過去があるから。

「ハハハ……は？」

笑い続けていた天童の顔が固まった。

諏佐の掌から飛び出した自由電子レーザーが天童に向かって直進していたからだ。余裕を見せつけていた天童に避ける暇など無い。

緑色の光線は、天童に直撃する前に閃光を放って散々になった。

恐らく、レーザーの軌道を曲げようとして失敗したのだと諏佐は観察する。

もし、あれを湾曲させようものなら超能力者《レベル5》クラスの能力だ。そんな芸当はブラックホールに近い程度の重力を操れる事を示している。

「ガバツ……!!」

「つうかテメエさあ」

直撃を避けていたとはいえ、余波をまともに受けた天童は空中に血を撒き散らしながら落ちてゆく。左肩が赤く染まっている。

諏佐は足で地面を軽く叩く。

「いつから俺と余裕こいて殺り合う身分になったんだよ。隙見せすぎなんだよコラ」

突如、長さ二メートル程の鉋物の塊で作られた細い杭が地面を突き破って現れる。地点は天童が落下している位置。このまま自由落下すれば、確実に串刺しだ。

「チイツ！」

頭から杭に向かって落ちていた天童だったが、右腕を突きだして杭を掴んだ。

ギリギリの瞬間で、意識を取り戻して演算を開始していたのだろう。まるで曲芸のように腕一本を使って逆立ちの状態で静止していた。

それを見た諏佐は焦る、というより面倒臭そうな表情をする。

「無駄にしぶてえな」

天童の体を支えていた杭が破裂する。周囲に粉塵を巻き上げ、それは粉々に砕かれた。

天童の体が宙に放り出される。自分へと向かって飛ばされてくる天童へと拳を握る。

体全体にダメージは伝わって演算もままならい状態の筈だ、この期を逃さなければ先程みたいに攻撃を逸らされる事は無い。

「あばよ、棚上げ野郎」

抑揚の無い声で処刑宣告を告げ、腕を持ち上げる。

(あ……！？)

天童との距離はあと数センチの距離だった。

体の自由が効かないとはこういう事を言うのだろう。膝から下の血が失せる感覚がした、振り上げた腕が固まったまま動かない。

相手の顔を潰そうとしていた諏佐の顔面に衝撃が走る。

体が地に無理矢理寝かされる。慌てて立ち上がるうとするも、今度は左肩にとつもない鈍痛が走った。

小枝を折るような小気味が間近で連続して響く。

「ぐツあああ……ッ！」

瞳を動かすと感覚を無くした左肩の上に足が置かれていた。誰の物かは確認する必要も無かった。

「ヘッ！ やっぱり最初のが効いとつたみたいやな」

荒々しく息を吐きながらも、天童はふらつきもせず立ち上がっていた。

「これはさっきのお返しや」

相手の肩を踏みつけた足をグリグリと憎しみを込めて動かしながら、自分の左肩を指差す。

そして、勝ち誇った笑みを浮かべながら身を屈め、天童は震える程強く握り締めた拳を自分の顔の位置に振り上げた。

「あばよ、棚上げ野郎」

V S 重力制御へフリーウォーカー (後書き)

最低でも7日に一回は更新目指します

まあ、勢いだけは毎日更新目指してるんですけどねえ

それにしてもアニメの浜面がイケ面ですなWWW

不穏な台詞

肩を砕かれ、地に無様に身を横たえている。だが、諏佐は意識まで取られていない。

「頭に乗んじゃねえぞ！！ ゴミがあッ！！」

まだ動く右手を握り締め、相手の顔に唾が掛かる程の勢いで天童を罵倒する。

「ケツ。往生際悪いな」

天童は諏佐を嘲笑う。かつては同僚として恐れていた相手だった。だが、今は自分がこうしていつでも命が取れるまでに落ちぶれた存在。

「……結局、お前は命の取り合いが怖くなって逃げた卑怯者なんや。これで本当にさいならや」

頭の横で握った拳に演算を開始し、能力を集中させる。体の芯が縮むような感覚に興奮を覚えた。

この一撃を放てばあの廃ビルもその土地も崩壊するだろうが、そんなのは知った事ではない。そして今から殺害する諏佐に対しても、もはや何の未練も無い。言いたい事は全て戦闘で語った。

気兼ね無く拳を降り下ろそうとした天童だったが、
「ギイツ！？」

右手に走った激痛によってそれは停止された。

慌てて見ると、手首にコルク抜きが二本、突き刺さっていた。

音は全くしなかった。

諏佐の座標攻撃か、と考えたが、それは直ぐに払拭される。

「久しぶりの再開に水を差すなんて少し大人げ無かったかしら？」
第三者による攻撃、明らかに諏佐のものではない高い声で判断した。声は聞こえるが姿は見えない。

この敷地内に幾つか点在する廃ビルの物陰に隠れて能力を行使し

ているのか。

「痛いなあもっ」

突き刺さったコルク抜きを見て天童は顔を歪める。

それを口で抜き取るうと天童が手首に顔を近付けた瞬間を諏佐は見逃さなかった。

地に着いていた脚を真上に振り上げる。能力補正無しの単純な諏佐の脚力による蹴りだったが、集中が背いている天童を突き放すのには十分だった。

「クソが……あと少しやったのによ。大量殺人野郎に仲間が居たとはな」

蹴られた勢いで諏佐から数歩遠ざかった天童は周りの廃ビルを血走った目で見回す。

「フン。まあ、ええわ。次会った時はギタギタにして引き裂いたるわ。」

闇路の仕事も順調に行つとるらしいしな」

その言葉を最後に天童は地を蹴って廃ビルの屋上に飛び上がった。屋上から別の廃ビルの屋上へと飛び移り、彼は諏佐の前から姿を消した。

それを見届けた諏佐は呻きながら体を起こす。

（チツ。不意を突かれたとはいえ天童如きにここまでされちゃあ世話ねーな。……それに向こうには闇路までいやがるよときた）

やれやれと自分自身に軽く失笑しながら首を振る。

「こんな調子じゃあ一方通行どころか闇路にも勝てねえかもしれないじゃねえか。たまたまねーな」

「堪らないのはこっちよ」

ザシリ、と砂利を踏む音が聞こえた。

「重症じゃない。中心を任されてる貴方が一番重い傷を負ってどうするのよ」

誰なのか、確認するまでも無く諏佐はそれに答える。

「そういうお前こそ油売ってて大丈夫なのかよ、結標」

「その前に命の恩人に何か言う事は無いのかしら？」

「結標先輩あざーす」

「ふ、フフ……結標先輩。悪くは無いわね」

（コイツ、シヨタコン発言狙ってるとしたか思えねー。嫌がるくせにMかよコイツ）

後ろから咳き込む声が聞こえた。恐らく結標は年下の可愛い童顔の男の子から先輩と呼ばれる妄想に浸っていたに違いないから、背中越しに冷たい視線を送っておく。

「たまたま近くを歩いてたら物騒な物音が聞こえてきたから駆け付けただけよ。」

ああ、仕事はこなしたわよさつき暗部を名乗ってた連中を一人潰してきたとこだし。そのせいでかなり気分が優れないけど」

「へーえ。そりゃご苦労なこつたあ。俺は失敗したけどな」

「別に手柄を自慢したかつたわけじゃ無かったのに……それより、行くわよ」

「は？ どこにだよ？」

此方を見てポカンとした顔をする諏佐を見た結標は軽く息を吐いた。

そして、ジト目で手にしていた警棒の役割も兼している懐中電灯を軽く降り下ろした。

「病院に決まってるでしょ」

「おかしいなあ。本当におかしい」

第七学区三九号線。木の葉通り。

ファミリーレストラン『オリヤ・ポドリーダ』で腹を満たしてきた茶髪メガネは鼻歌を歌いながら、通称『ケンカ通り』と呼ばれる路地裏を歩いて居た。

絡んできた血の気の多い兄ちゃん達はその辺に転がしてある。
スキルアウト

「外部から雇った大脳生理学専門チームは何故か次々と襲撃を受けて行動不能になっているんだよねー。何でかなあ」

周りに意識がある人間は居ない筈だが、それでも茶髪メガネは淡々と語り続ける。

「まあ、今から分かるだろうね。しびれを切らしたのかは知らないけど、僕の所にその『襲撃者』がわざわざ来てくれてるみたいだし？」

自分の推理を言い終えた途端、茶髪メガネはバックステップでその場から飛び退いた。

次の瞬間には、茶髪メガネが居た位置にあつたダストボックスが真つ二つになつて崩れ落ちていた。

「どうやら僕を潰しに来たみたいだけれど、そうはいかないよ。それより、『姿を現さなくて良い』からさ。僕の話を聞く気は無い？」

自分の左上に目線を送りながら茶髪メガネはにっこりと笑う。
錆びかけた看板の上に一人の男が立っていた。

「……………どういう事だ。……………何故、俺の能力が無効化された。それに、俺の存在にどうやって気付いた」

「僕の能力は犯罪誘発といつて周りの人間の悪意を増幅させてそれを感知する精神干渉系統の物なんですよ。」

それで一際、目立つ悪意がありましたからね。君を見つけたのはそれのお陰ですね。それと君の能力を無効化したのは所謂、応用つてヤツですよ」

茶髪メガネは笑顔を絶やさない。まるで、自分の手の内を明かすのが至福だと言わんばかりに。

「あ、そうだ。例えを見せてあげましょうか？ 『そこで立っている』ください」

「……………ッ!？」

男は自分の意思とは関係無しに空中に身を放り出していた。他人から見れば、日射病で意識を失って倒れる人のような頼りない動きに見えるだろう。

このまま重力に従えば、男は高さ七メートルから地面に体を叩きつける事になる。だが、茶髪メガネは助ける素振りを見せない。

助ける必要が無いからだ。

地面に激突する一メートル前で男の体がふわりと浮き上がった。同時に突風が吹き荒れ、茶髪メガネの前髪を揺らす。

二本の足で着地した男は茶髪メガネと相對する。

「ふふ。この程度で倒せるなら僕も苦労しませんよ十字闇路さん」

「……俺の名前まで知っているとはな。……もはや笑いが込み上げてくる。……さて、話は変わるが、此方の目的は完了した」

「何の事です？」

ここで初めて茶髪メガネの笑顔が崩れた。童顔には似付かわしくない陰険な口調で闇路は続ける。

「……俺達の依頼主の計画が完了したという事だ。……貴様の始末は要するにおまけだ。だが、どうやら思っていた以上に貴様は面倒だ。……ここは、退く事にしよう」

「依頼主の計画、だと？」

「……クク、お前の勝ち誇った顔は笑えたぞ。……七月二十五日を楽しみにしておくがいい」

次の言葉を闇路に茶髪メガネがぶつけようとするが、その時には闇路の気配も悪意も完全に消え去っていた。

不穏な台詞（後書き）

【茶髪メガネ】

【犯罪誘発】 マリストリガー

周りの人間の悪意を感知する精神干渉系統の能力。
更に、相手の悪意を自分に対してひねくれた方向に増幅させる事により、『使用者の命令に従えなく』する事が出来る。

【プロフィール】

青髪ピアスの従兄。

糸目フェチで彼を可愛がっている事から諏佐からはブラコン扱いされている。

能力者が起こす事件の専門の探偵である。

格闘術に長けていて、大体はこれを使用して戦闘を終わらせる。

幻想御手事件、偽りの終結

七月二十四日。

樹形図ツリーダイヤグラムの設計者の使用申請を断られ、代替の演算装置として作成された幻想御手。

その作成者であり、事件の首謀者だった木山春生きやま はるみと超能力者《レベル5》第三位、御坂美琴が戦闘。結果、御坂美琴が勝利する。

だが、手痛いダメージを負った木山春生の幻想御手のネットワークが暴走し、幻想猛獣《AIMバースト》が出現。再生能力と複数複数の能力を使って苦戦を強いてくるも、最後にはワクチンソフトによりネットワークが解体され弱体化し、『核』を御坂美琴の超電磁砲に打ち抜かれ消滅。

これで、『表』の事件は終結した。

「しかし、驚いたな。事件が解決してから連絡をよこしやがるとは」
携帯電話を耳に当てながら諏佐十拳は苛立った様子で歩道を歩いていた。いつもは、彼が仕事をする環境は人通りの少ない場所、あるいは深夜なのだが今は真っ昼間から人通りの多い大通りを進んでいる。

「……さすがに録な情報も無しに連絡するのは気が引けてね」
「テメエなら木山が首謀者だったって事くらい簡単に突き止めそうなモンだが……まさか、それすらも大した情報じゃないとか言いたいのかあ？」

『御名答です』

諏佐の足が止まった。急に彼が止まったせいで、携帯端末の地図アプリを確認しながら歩いていた結標淡希が諏佐の背中に頭をぶつけた。

「ほーお。で、勿体ぶらないでそのとっておきの情報とやらを教え
てもらおうか。目的地だけ教えられてもいまいち気合いが入らない
んだよな」

後ろで結標が何やら文句を言っているが、諏佐は視線すらそちら
に向けない。

『『ツール』の連中が二十五……つまり今日、何か起きるって事
を告知してきた事までは伝えましたっけ？』

「ああ。それにしても闇路か。奴も暗部に堕ちていたとはなあ」

やはり、『特力研』であの『実験』に関わった連中は録な場所に
いられないのだな、と自嘲気味に諏佐は笑う。

『君達がやる事の手順は目的地に着いてから教えるとして……そう
だね、簡単に言っと、再び幻想御手を使って何かをやらかそうとし
ている連中がいるって事かな』

「ははっ。おいおいそりゃガセ情報じゃねえのか？ 幻想御手のネ
ットワークはワクチンソフトによって解体された。その幻想御手を
作った木山の研究データも全て削除されてたって話じゃなかったの
かよ」

『幻想御手そのものを再び作りだした、と言ったら？』

「なるほどねえ。んで、幻想御手を使用するって事あネットワーク
を形成する為に能力者が必要って事だよなあ？」

『その通りです。察しがいいねさすがは君だ』

諏佐の口調に粘り気が生じてくる。彼の苛々のボルテージが上が
っている証拠である。

『首謀者の疑いがある詰井典夫つめいのちかおは『プロデューズ』という組織から
置き去り《チャイルドエラー》の子供達を借り』

「ミンチ決定だコラ」

言い終わる前に通話を切った。

そもそも、これは既に解決済みの事件の筈なのだ。幻想御手とい
うリスクがある物を複製し、挙げ句の果てには置き去りを被験者に
させる。その情報だけでも頭を煮えたぎらせるのには十分だった。

「それにしても何で私がまだ貴方達に付き合わないといけないのかしらね」

苛立ちMAXの諏佐に追い討ちをかけたのか、結標が愚痴をこぼす。もはや諏佐の物騒な言葉には馴れているのだろう、彼女に恐れは見えない。

「大体、私が協力した理由は幻想御手を利用した連中の末路に興味があっただけであって、それを作ってる人間の事になんか興味はあまり無かったのよ。もはや、幻想御手なんて私にとって陳腐な物ではないわ」

「ならリタイヤすればいいじゃん。してないって事は心の中で『先輩としての威厳を見せてやる』っていう裏心があるって事だろ」

「なっ……ち、違うわよ」

「お前みたいな人間が多かったら読心能力者サイコメトラも必要無えのにな。分かりやすいんだよバーカ」

第七学区と第五学区の境の位置に目的の場所があった。

「ここね。第四脳生理学施設というのは」

地図アプリの座標に名前は表示されているのだが、目の前にある高さ五メートル程の巨大なゲートが邪魔して外観は全く見えない。

携帯を取り出して諏佐は茶髪メガネに連絡を取る。

「着いたが、目の前に障害物があるぞ。ぶっ壊しても良いか？」

『駄目ですね。下手に破壊活動を行うと警備員が駆け付けてきますよ』

「じゃあ結標の座標移動を使えって事か？」

『それも止めた方が。何らかの感知システムが作動して結局警備員のお世話になるかもしれませんし』

「それで、どうしろと？」

とにかく頑丈な素材を使った感じを醸し出しているゲートを爪先で小付きながら、諏佐は少々投げやりに尋ねる。

「そこで僕の順番です。得意分野ではありませんが、今日来てくれた協力者さんと何とか頑張ってみます」

「あーなるほど。お前が同行しなかった理由はそれか。てっきりブルツちゃってるのかと思っていただけ。んじゃ、頼むぜえ」

「ハッキングが完了するまで数分かかりそうだから、少し待っててよ」

「ああ」

携帯を豊んで懐に仕舞う。

今からクソみたいな研究者を合理的に殺せるのだ。自然と頬の筋肉が緩んでいた。

「それにしても、体はちゃんと動くの？」

「ああ、完全に回復したみてえだな。カエルみたいな顔してっけどあの医者は名医だ」

左肩の粉碎骨折、肋骨は全て折れていた重傷を負っていた筈だ。それがたった三日程で完治したのだ。あの医者の腕は相当な物だと驚くしかない。

(けど、あの医者妙な事言ってやがったな)

「君の体は不思議だね？ 砕けた骨がピツタリと元の場所に癒着している。まるで骨に意志があるみたいだね？ 最初は骨芽細胞を操る能力者かと疑ったよ？」

(……ま、正直な所俺も自分の能力に分からねえ部分はあるしな。無意識にやっていた事だったのか)

眉をひそめる諏佐の耳に重たい音が入ってくる。茶髪メガネが扉のロックか何かを操作したのだろうか。ゆっくりとした動きでゲートは開いていく。

タイミングを見計らったように震え出した携帯を諏佐は耳に当てる。

「上手く行ったか」

『ええ。赤外線を始めとした感知センサーも全て無効にしたよ』

「ご苦労。後は俺達がやる」

改めて前方に目を遣る。外観は至って普通で、学園都市でよく見かける研究所といった所か。頑丈なゲートで塞いでいたわりには、とガツカリ感が漂うが、大事なものはそこでは無い。

大事なものは詰井という研究者がどこにいるのか、という事だ。ハッキングに引つ掛からなかったブービートラップは無いかと視線を彷徨させたその時、

『はっはっはぁーん。まーさか誰かがここに侵入するとはねえん。』

『上』から回された暗部の人達いー？』

幻想御手事件、偽りの終結（後書き）

【箱根勇次郎】
はこね ゆうじろう

【素敵無敵】
スーパーヒーロー

よく分からなすぎて研究者達も手をつけかねている能力。
気圧を操作して相手を潰したり、斥力を使って吹き飛ばしたりする
能力。

【プロフィール】

諏佐と同じ高校に通い、彼をライバル視している部分がある。
また、軍覇の事をとてつもなくリスpektしているらしい。

V S多才能力へマルチスキル

突然、頭そのものに打ち込まれるような声が聞こえてきた。相手の鼓膜を揺さぶらずに、自分の台詞を伝える。諏佐はこの能力を知っている。

(……何だこれは。念話能力テレパスの一種か?)

「その通りい」

次に聞こえた声は鼓膜を揺さぶってきた。

「空間移動……！」
テレポート

結標が呟く。目の前に一人の中年くらいの男が現れていた。髪は中途半端に伸びていて、着ている白衣は薬品か汗か判らない染みが所々に浮き出ている。

一目で分かる、コイツは置き去り《チャイルドエラー》では無いと。

「誰だ」

「僕う？ 僕は現在、この施設を貸し切らせてもらっている詰井という者だよ」

飄々とした様子のターゲットを見た諏佐は思わず溜め息を吐いた。どうやら自分の立場が分かっているらしい。

「ターゲットがわざわざ目の前に出てくるとはなあ。おい、俺がどれだけお前を殺してえのか分かってんの？」

「殺す？ この僕を？ あれえ君さあ、驕マカっちゃってるう？」

細めたお互いの瞳から放たれた冷たい視線が衝突する。そこに、スポーツのような気の高ぶりは見られない。あるのは、如何に早く相手を片付けるか、である。

「幻想御手には僕の脳波を使ってある。その副産物として僕は多才能力マルチスキルを手に入れた！ 誰にも僕の邪魔はさせないよおん！」

「だからどうしたよ中年。こっちはテメエとは修羅場の数が違げえんだよ」

ぶつかり合う視線が収束していく感覚に陥っていく。このままだと今にも爆発して拳が相手の顔面へと向かいそうだ。

「結標、お前はあの施設の中へ行け。置き去り達を助け出して来い」「あなた一人であれをやれるの?」

相手から視線を一切逸らさない諏佐に結標は問い掛ける。

マルチスキル
多才能力。報告によると、超能力者《レベル5》第三位の御坂美琴を追い詰める程の能力。その上、木山春生はまだ良識ある方の人間だったらしい。

だが、目の前の詰井はどうだろうか。雰囲気からして狂気が滲み出ている気がする。恐らく人を殺す事など躊躇わないだろうし、どんな手でも使ってくるだろう。

「いいから、行け。どうせ奴にはお前の周りの物を盾にして身を守る手段は通用しねえ。誰かを庇いながら戦うなんざ真つ平御免だぜ」
少しの間、諏佐と詰井に視線を揺らしていた結標だったが、軽く頷き走り出した。

「おつとう。どこに行く気だあい!?!」

建物に向かう結標に詰井が掌から蒼白い電撃を放つが、それは地面から現れた鉄杭に向かつて行き彼女には当たらなかった。

「俺を前にしてどこ見てんだコラ」

視線を戻すより先に諏佐の拳が詰井の頬を打つ。

「あん?」

打つたのは良いが、拳に妙な感触が残った。まるで、意図的に手が滑らされた感じだ。

詰井は空中で体を縮めて二転三転と回転し、綺麗に二本の足で地面に着地した。

「いやあイイネ! これイイネえ!! やっぱり凄いよ多才能力は!」

(ち……。手っ取り早くは潰せねえか。たまらねーな)

相手の態度からして何らかの能力を使われたのは確実。

目の前にいる敵はどんな能力を使っているのか、または応用して

いるのか。それは分からない。相手は多才能力だ、一つを分析しても、また新たな能力で対処してくるかもしれない。だから大事になるのは、一撃で詰井を叩き伏せる事だと諏佐は判断する。

「はっはぁーん。本当は色々試してみたいけれど、油断して計画がパーになっちゃ意味無いからね。さっさと終わらせる事にしようん」

笑いながら詰井が白衣の懐から取り出したのは、小型のメス。凶器として使えば人の肉など簡単に裂ける代物だ。

しかし、諏佐の体は電荷の反発によって生み出される斥力を利用した装甲に覆われている。投げて当てればダメージを与えられる程甘くは無い。

よって、体内に直接攻撃するのが無難な手段になる。

フツ、と詰井の手中にあったメスは消えて無くなる。次の瞬間にメスは諏佐の脳に転移される筈だった。

「何い!?!」

頭を軽く横に振って転移攻撃を避けた諏佐は虚空に取り残されたメスを掴む。

「悪いが俺に十一次元を介した攻撃は通用しねえよ」ニヤリと笑って諏佐は言い放つ。

「あぁんもう面倒だねえ。なら、真正面から僕のをぶつけるしか無いのかぁ」

「テメエの能力じゃねえだろうがよ……あアツ!?!」

降り下ろされた諏佐の脚がアスファルトの地面を粉々に砕いた。

彼を中心にして地割れのような亀裂が走り、周囲の地形を変えてしまいそうな勢いで地面が陥没していく。

「おお、怖いネエ」

対する詰井は両手を地面に着ける。すると、彼の体は空気が抜ける時の風船のように五メートル程空中に浮き上がった。

「空力使い《エアロハンド》か?」

続いて詰井の掌から発射された炎の弾丸が諏佐を襲う。

爆音が続けて数回こだまし、アスファルトの地面を粉々して削り取る。が、諏佐は既にそこには居ない。

地面に着地した詰井の腕を諏佐が掴み掛かろうとする。その手は虚しくも空を切っていた。相手が空間移動テレポートしたのだと直ぐに気付く。(クソツタレ！ 何人分の脳を使ってるのか知らねえが、さすがは樹形図ツリーダイヤグラムの設計者の代替の演算装置として作成されただけはある。

大能力者《レベル4》クラスの空間移動を楽々と行いやがって！ 辺りを見回す。詰井の姿は無い。どこで機会を伺っているのか、と諏佐は考え、

「ちっ！ あの野郎まさか結標を追って施設内へ！？」

そう思えたのは一瞬だった。

明らかかな違和感が諏佐の脚を撫でたからだ。見ると、膝まで自分の足が地面に埋まっているのが確認出来た。

『ふっふふーん。あの女の子を追うのも一つの手だけどねー』

再び、念話能力による声が諏佐の頭に打ち込まれて来る。目の前のアスファルトの地面に池に水を投げ込んだような波紋が広がり始めた。

その中から詰井の上半身が徐々に現れる。まるで沼から這い上がろうとする未確認生命体のような姿だ。

(コイツ……一旦地中に空間移動した後、何らかの能力で地中と地表を溶解させやがったのか。

まさかこんなブービートラップに引っ掛かっちゃうとはな。ひやははっ！ たまらねー)

何故だか、自分を嘲笑する余裕すら生まれてきた。

心理戦で負けた？ いや、こんなのはそんな大層な事では無い。ただ単に自分が油断していただけだ。

「彼女ではどうせ何も出来ないんだよ。何より、君はいたぶり殺し甲斐があるしねえ」

「何だと？」

「じゃじゃーん！ これナニが分かるかなあん？」

地中から全身を抜け出して諏佐を見下ろす詰井が懐から何かを取り出す。

「音楽プレイヤー？ 幻想ご……まさか」

「そのまさか！ 幻想御手のワクチンソフトだよおん！？ これが僕の手にある限り彼女が何をしようとする無駄なのさあ！」

勝ち誇る詰井を無表情で見ていた諏佐だったが、観念した様子でこう言った。

「参ったぜ。」

「テメエ本当に馬鹿だな」

幻想御手のワクチンプログラムを手を取った諏佐は不敵に笑う。

代わりに詰井の手中にはメスが握られていた。

「生憎だが俺はメスなんか貰っても使い道無いからな。テメエに返してやるぜ」

一瞬、呆気にとられた顔になった詰井だったが、ケタケタと笑い始めた。

「はははははははッ！ なるほど、君の座標交換はそんな使い道があるんだね！」

「あ？ 何でお前が俺の能力を知ってる」

「『プロデュース』に散々ちよっかい加えてるでしょ君。僕の実験動物達をそこから拝借した際に覗いた『危険人物』リストに君の名前があっただよん」

一気に頭に血が昇る。気付けば、拳を強く握り締めていた。

「あ、後一つ忠告しとくよ」

この状態では一歩たりとも体は動かせないのか。いや、動かせない事は無い。埋まっている部分の地面を粉々に砕いてしまえば良い。「僕は保身用にそれを取っただけで、実際にはあんま必要無いんだよねえん。実験動物達がどうなるかと僕は構わないしい？」

「なっ……！」

諏佐が呆気にとられ、詰井が不敵な笑みを作る。二人の表情は逆

転していた。

足だけで無く、全身が硬直する。指一本も動かせなくなりそうになる。

下手に動けば、詰井が攻撃を仕掛けてくるかもしれない。そうなれば彼は躊躇無く、このワクチンプログラムごと破壊してしまうだろう。

自身を転移して脱出する手は論外だ。この状態でそれを行えば、足の皮がベロリと剥がされる結標淡希の二の舞になってしまう。痛みには耐えられる自身はあるが、負傷して詰井と対等にやり合える自信など無い。

「ふふははッ！ その顔イイネエ！ さあて絶望タイムの始まりですよん」

VS 幻想猛獣へAIMバースト (前書き)

更新遅れて本当にすいません；

あとお気に入り登録三桁いったみたいでうれしいです。
ありがとうございます。

V S 幻想猛獣へAIMバースト

唇を左右に薄く伸ばしながら詰井は五本の指を開き、それを諏佐の前に突き付けた。どういう原理かは分からないが、そこに赤い光が瞬き始める。

「大能力者へレベル4」クラスの原子崩し「メルトダウン」だよ。第四位の^{ひびきの}麦野^{しずる}沈利のヤツには全然届かないけど、人間の体を吹き飛ばすには十分な威力だよな！」

「あ、そついや聞きたい事あったんだけどよ」
目を閉じながら諏佐が問い掛ける。

諦めの表情に見えるそれがまた可笑しくて、詰井の笑みに一層深みが生まれてくる。

「何かな？」

「お前の目的は何だ。幻想御手を使って何がしたい？ 高度な演算装置が欲しいのか」

「ノンノン！ そんな小難しい事なんか考えちゃいないよ。」

確かに、この素晴らしい力も悪くは無いけれど、僕が欲しいのはAIMの塊で出来た怪物だよ！ 人間以外の存在が能力を使う姿ってのは素晴らしいと思わないかい！？」

「なるほどな」

『怪物』とは七月二十四日に出現した『幻想猛獣』の事だろう。

確かに、あれはそうそう見られる代物ではない。研究者としては惹かれても可笑しくはないのかもしれない。

それは分かっている。

「ふざッけんじゃねえぞクソゴミがあああアアアアアアアアッ！」

！！！！！

分かっている上で諏佐は雄叫びを上げる。

分かっているからこそ共感が出来ない。研究者から見たら魅力的な物でも、そうではない人間から見れば下らないゴミにしか見えな

いかもしれないというのに。

そんな物を生み出す実験に付き合わされる子供達の事を少しは考えないのか。

爆発的に生まれた感情が脳と体を動かし、諏佐が掌からオレンジ色に変色したレーザーを放つ。

遠慮の無い全力の出力。応じるように、詰井の原子崩しも発射された。

二つの光の線は殆ど鏝迫り合う時間も無く巨大な閃光を放った。

「何が起こったの……!?!?」

置き去りを救うべく施設内に潜り込んでいた結標だったが、建物全体を揺らす振動に思わず足を止めていた。

飛び付くように窓に駆け寄って外の様子を伺う。

地上から六メートル程離れた二階のフロアからでも視界が覆われてしまう程に砂埃が漂っている。

「本当に何が起こったのよ。十拳、まさかやられたんじゃないでしょうね……」

恐る恐る窓を開けて下を見回す。

「結標ッ!?!」

突然張り上げられた大声と共にすぐ隣あった窓がぶち割られた。

「あああああッ!?!?」

フロアに転がって来た侵入者に向かってコルク抜きを座標移動させるが、その人物は頭を軽く振っただけでそれを軽々と避けてしまった。

「危ねえだるバカ」

「危ないだろじゃない! 敵と見間違えたわよ!?!」

怒鳴る結標に向かって諏佐が小さな長方形の物体を放り投げる。

「……? これは?」

「幻想御手のネットワークを解体するためのワクチンソフトだって

よ

「え！？ 貴方これを何処で」

「詰井の野郎からかっばらってきた」

目を丸くする結標。手の中にあるワクチンプログラムと諏佐の顔を見比べてハツとした表情をする。

「貴方がここに居て、そしてこれも手に入れてるって事は……決着が着いたの？」

「まだだ」

諏佐は薄く笑う。

「まだ、死体にしちゃいねえ」

その言葉だけを残して諏佐は歪に割られた窓から飛び降りた。

辺りは粉々に砕かれていた。アスファルトの地面が広がる敷地がまるでミサイルでも撃ち込まれたかのように無残な空間を作っている。

そこに立つのは一人。

「ば、馬鹿な……君はこんな出力は出せない筈だあ！！ 手に入れたデータにはそう書かれていたんだあっ！」

先程まで複数の能力を操って諏佐を追い詰めていた多才能力者の面影はもう詰井には無い。今存在しているのは目尻に涙を貯めながら尻餅を着いている哀れな中年である。

「そっいや、俺を開発した野郎は座標交換の事を『この世の理を理解して自分に集め、それを放出して操る』能力って言ってたっけか」
諏佐が一步踏み出す、それに対して詰井は尻餅を着いたまま何歩も何歩も後退る。

肩に抉れた傷口を負っている彼は、激痛で脳の演算が能力使用に割けない状況だ。それどころか意識を保つ事すら難しくなっている可能性もある。

「何が言いてえのか全く分からねえよ。ま、デベロッパー開発官も俺にはそんな

スペックは無えと笑ってやがった。

……が、さつき妙な感覚を味わったぜ。あと少しで本質ってヤツを掴めてたのかもしんねえな。けど、これじゃあ足りねえ。全く足りねえよ！ 一方通行どころか他の超能力者《レベル5》にも全然及べてねえよ」

笑いながら諏佐は詰井との距離を確実に縮めていく。

「っと、今はそんな事どうでもいいや。で、お前どうやって死にたい？ 肉をちよつとずつ千切るのも面白そうだよなあ。……いずれにしても普通には殺さねえけど」

首を横に振りながら尚も後退しようとする詰井だったが、その時背中に硬い感触が走った。体を動かすために足を動かしても地面を擦るだけ。

壁際に追い詰められた。

頭の中で考えていた事項が次々と抜け落ちて行く。その事に気が付きかけた時には既に詰井の頭は真っ白になっていた。

「あ……ああ……ああアあがががっ!？」

追い討ちをかけるように彼の頭を激痛が襲う。

思わず頭を片手で押さえるが、それだけでは堪えきれずに詰井は地面をのたうち回る。

(何だ？ 副作用か?)

諏佐は詰井の様子を観察しようとするが、それは直ぐに中断された。

詰井の背から現れた桃色の透けた物体が諏佐に向かって降り下ろされたからだ。舌打ちをしながら諏佐がその場から飛び退く。

鎌のように緩やかな曲線を描いたそれはアスファルトに地面をあつさり貫いた。

「ちつ。遊ばずに早めに潰しとくんだったな」

ボコボコと泡立つように人間の背中で蠢くそれはやがて形を象つていく。

それは気色の悪い姿だった。赤い瞳に血と肉の狭間の色をしたボ

デイ。

そして何といつても人間の胎児のようなその姿。

「幻想猛獣……か」

この世に現出した真正正銘の化け物を目の当たりにした諏佐は口端を限界まで吊り上げた。

「ぶっ潰してやんよ。醜い化け物が」

LEVEL 5 SECOND (前書き)

更新遅れて本当にすみません。

た。
「さつとと」

引き裂いた笑みを浮かべた諏佐は詰井に歩み寄る。

「さつき何の話をしたっけか？ …… ああ、思い出した。お前をどうやって殺すか、だったな。どういう愉快なオブジェにしようかなあ、たまらねーなあ」

指の骨を鳴らしながら詰井を見下ろす。完全に怯えきっているその顔に失笑しながら諏佐は右手から自由電子で構成されている剣を出現させた。

「じゃあ手始めに指を一本ずつ切り落と… …ッ!？」

諏佐は背後から何かを感じ取った。

気配でも、殺意でも無い。

全身を圧迫する重圧。

諏佐は振り向きざまに剣を躊躇無く大振りにする。

「まだ生きてやがったか」

視界の隅でピンクの塊が飛んで行くのが見えた。そして、正面に映るのは先程よりも化け物らしさを増した幻想猛獣だった。

頭は胎児を模したままだったが直径二メートル程に巨大になり、その下から明らかに変形していた。

頭から胴体が直接生えているように見えた。しかもその胴体も人間とは思えない形状をしている。その十メートル以上の長さはあるうかという胴体から無数に生える幾つもの触手が絡まった『腕』を切り落とした諏佐はニタリ、と自分の腕に残った獲物を切り裂く感覚を確かめながら更に笑みを深める。

「それにしても後ろから不意打ちとは情けねえな。デカイのは図体だけかよ、おい」

剣を振り上げると、何の小細工も無く断ち切った幻想猛獣の腕の断面に投げ付けた。

自由電子で構成された剣は相手の腕をザク口状に破裂させながら

突き進み、オレンジ色のフラッシュを瞬かせながら放射状に炸裂した。

「……ヒヤハツ！ いい気味だぜ」

左半身をこつそりと吹き飛ばされた幻想猛獣の姿を鼻で笑った後、諏佐は再び詰井に歩み寄る。

「大丈夫、大丈夫。あの化け物みてえにあっさりと殺したりしねえから安心しろ」

「ふ、ふふ……」

「おーおーついに気でも違えたか？」

俯いたまま、肩を震わせて含み笑いをする詰井に憐れんだ目を諏佐が向ける。

「そう見えるかい？ 君は少し幻想猛獣を甘く見すぎているよ」

「……あれは」

その言葉に不吉な情景を感じ取った諏佐は素早く後ろを振り返る。「再生……してるのか」

泡立つかの様に幻想猛獣の削られた断面から体が再生されてゆく。奥歯を噛み締めてその様子を見ながら諏佐は思考する。

（体の半分吹っ飛ばしても再生しやがるとはな……やはりワクワクンソフトでネットワークを解体するしかねえか……チツ！ たまらねー！）

溜め息では無く舌打ちをする。

それは苛立ちでは無い、危機感による物だった。ワクワクンソフトが流されるのはいつになるか分からない。

それでも、自分はその化け物の相手をしなければならぬ。数多の能力を使い、不死身の如く体を再生する化け物に。施設内の置き去り達から幻想猛獣を遠ざける為に。

「畜生が、急げよ結標ッ！」

結標淡希はこの施設内の心臓部と言っても過言では無い三階のと

ある部屋に辿り着いていた。

今、彼女の背後には二十人の置き去りが眠っている。

「……………」

頭を痛みが襲い、同時に強烈な嘔吐感が込み上げてくる。

勿論、普通にここまで通過して来たのでは無い。武装した警備部隊は居なかったものの、三階の階層からはレーザートラップ等の幾つもの罠が張り巡らされていた。

施設内の罠は対象外なの？ あの優男！？ と結標は思わず毒付いたが、後でたっぷりと嫌味を言っただけでやればそれは片が付くだろう。今は一刻も早く幻想御手のワクチンプログラムをこの施設周辺に流さなければ。ワクチンプログラムが入った音楽プレイヤーをセツトし、キーボードを叩く。

「え……………!?!」

結標の体が固まる。

ノートパソコンのモニターにはこう表示されていた。

『レベルアップ！ ワクチンプログラムをインストール中 予想所要時間 およそ十分』

(さーて俺は何分持つか？)

不協和音の様な咆哮を上げる幻想猛獣を睨みながら諏佐は珍しく弱気な思考を巡らせる。

(持つて五分くらいか……………あ?)

ふと、自分のズボンのポケットが振動しているのに気が付いた。

「もしもし。こっちは超取り込み中なんだけどなあ！ 結標さん 諏佐は取り出した携帯に耳を当てて呆れた声を出す。

『とりあえずは生きてるみたいね』

「あー、今はね。とりあえず目の前にいる幻想猛獣にぶっ潰されな
い限りはな。で、用件は何だ」

『幻想猛獣が出現したの？ さっきワクチンプログラムを

起動したのよ』

「……という事は後は放っておけばこの化け物は消滅するのか？」
電話の向こうから息を呑む音が聞こえた。良くない予感を諏佐は感じ取る。

『それが、ちゃんと起動するまで後十分は掛かるって……』

「十分か……倒しちまった方が効率的な気がしてきたな。たまたね

」

『何なら、私もそっちに向かう』

「それは遠慮するわ」

相手が言い終わらない内に答えをノーで返す。

この戦い、諏佐の目的は置き去り達を救いだす事にある。

だから、諏佐は自分の決めた役割を素直に遂行する。

「お前は置き去り達を守れ。何かあったら一緒にテレポしてでも逃げろ。任せたぞ」

『でも』

「うるせえなお前は。こっちはお前を信用して置き去りを預けてんだ、お前も少しは俺を信用しろっての」

無理矢理通話を切って元のポケットに携帯を仕舞う。そして握っていた携帯の代わりに自由電子の剣を出現させる。

「無駄だよ」

決意をした諏佐を絡み付いて止めるかのような不愉快な声が彼の耳へと入ってくる。

「無駄無駄。仮に君がワクチンプログラムが起動するまで生き残ったとしても、幻想猛獣は止まらないよ」

「……何だと」

「体のどこかにある『核』。それを壊さなければ幻想猛獣は消滅しないんだよ！ はははあっ！」

「……」

時間稼ぎ。

その概念が諏佐の頭から抜け落ちて行く。

諏佐の目的は置き去りを助ける事に重点を置いていた。とりあえずはワクチンプログラムが起動すれば昏睡しているであろう置き去り達は助かる。だが、あの怪物は倒れない。

しかし、不死身では無い。弱点を貫けば消滅する。

「ありがとよネタ垂らし君。お前、最期まで馬鹿だったな」

侮蔑の言葉を放つてやった相手の顔を見ずに、諏佐は幻想猛獣に向かつて突進する。恐らく詰井は「訳が分からない」というアホみたいな表情をしているだろう。

「面倒臭いから勿体ぶらねえでさっさと弱点さらけ出してくれねえかなあ!？」

走ってくる諏佐に対して幻想猛獣は先端が鎌を模した触手を振るうが、それは彼が持つ剣によってあっさりと吹き散らされる。

一瞬だけ怯んだ幻想猛獣の隙を突いて彼は自身を転移させて化物の懐に潜り込む。

弱点を露呈させると愚痴った諏佐だ。彼には適当に狙って幻想猛獣の核を破壊しようとする意思は無い。なら、どうするか。

「出す気が無えならバラバラにぶっ飛ばして見つけてやるぜえ!」
掌を幻想猛獣の体へ向ける。

自分の手を基点に演算し、相手の体をミリ単位であちこちへと分散させる必殺の一撃だ。

「ッ!？」

その一撃必殺は虚しく空を切る。

見失った相手を探す為に右を見て、左を見て……そして上を見る。
「空間移動か」

相手の動きを分析しながら、直ぐ様諏佐は自分を転移してその場から離脱する。一寸、遅れて発射された炎弾による五メートル程のクレーターが出来上がる。

その衝撃でギシギシと音を立てながら僅かに揺れる施設を見ながら、諏佐は舌打ちをする。

(クソが……! 俺より先にこの建物がくたばりそうだとぞオイ!)

どういう能力を行使しているのかは分からないが、上空十メートル付近で静止している幻想猛獣へと地面から発生させた鉋物塊を飛ばす。

が、当たらない。体表から数十センチ手前で鉋物塊が砕け散る。

(今度こそッ！)

当てる事が諏佐の目的では無かった。砕けた破片と自身の位置を入れ替え幻想猛獣に肉薄する。相手の体を粉々に散らせる魔手を伸ばす。

「ちっ……くうおんの、クソがあッ！」

またしても諏佐の五本の指を伸ばした掌は何も触れられなかった。「コイツ……空間移動と何かしらの能力を併用して使ってやがるのか？」

二度も隙を突いてからの転移接近攻撃が外れた。それに、何故見掛けは只、触れるだけの攻撃を恐れる？

着地する衝撃を電荷で殺しながら諏佐は考える。

「二回ともタイミングは間違っていないかった筈だ。なら、何かしらの能力で接近した俺を感知したに違いねえ。と、というか心を読まれてんのか？」

動きを読まれている。此方から仕掛ける攻撃は外される？

なら、どうする？

とりあえずは相手の様子を確認する事から始めるか。後ろを振り向こうとした諏佐の思考は中断された。

地響きが詰井の体を激しく揺らした。だが、詰井は笑っていた。

「ふは、はっははははははははははあ！！」

諏佐十拳が幻想猛獣の触手に叩き潰された。

油断していたのか、何かに気を取られていたのか。それは分からないが、とにかく諏佐は敗北した。

ハンマーの様な形なつた触手と地面の間から赤黒い血が滲み出てくる。

「最期まで馬鹿だったのは君だったねえ！ まさか油断してやられるとは！

そして、『疑似幻想御手』の成果も出したあああ！ これで『あの人』も僕を認めてくれるう！ これで僕の計画も円滑に進められるっ！」

詰井が両手を上げて喜ぶのと同時だっただろうか。

幻想猛獣が粉々に砕け散ったのは。

幻想猛獣の体は粉々になった。正確に言うと、全身を部分的にミリ単位でそれぞれの場所へ転移させられたのだ。

この状況を作り出したのは偶然だった。何しろ向こうから自分の肉体をぶつけてきてくれたのだから。

その上、幻想猛獣は諏佐が『咄嗟に』行った演算までは読めなかったのだから。

「くっくくく……」

頭の横に重々しい音を立てて落ちてきたメートル程の三角柱の形をした物体を見ながら諏佐は口角を吊り上げた。

既に胸から下の感覚はほとんど無くなつてはいるが、それでも笑いを溢す余裕が彼にはあつた。

「腕は、動くみてえだな。俺の、勝ち……だ」

指先を諏佐は幻想猛獣の『核』に向けた。

「本当、無茶な事しかしないわね」

茶髪メガネが手配した回収部隊の担架によって運ばれて行く諏佐

を見送りながら結標は本日何度目かの溜め息を吐いた。まあ、体に負担がかかる自身の転移を何回も行った彼女が言える台詞では無いかもしれないが。

「置き去りの子達も大丈夫そうだったし、何よりね。……十拳の怪我もあの医者任せれば確実にしようしね。

後は茶髪メガネへの嫌味と報酬が貰えれば満足ね。一つ引っ掛かる事があるけれど……私にとってはどうでも良い事だわ」

しかし、ここでご機嫌になりかけていた結標を吐き気を催す程に気分を害させるイベントが起こった。

茶髪メガネの指示で拘束されようとしていた詰井の頭が突如、ザククのように弾け飛んだ。

第十二学区の廃ビルの屋上。

詰井が死亡したという連絡をPDAによって確認した茶髪メガネは自嘲気味に少し笑った。

「証拠の隠滅ですかね？ ははっ、探偵とか名乗っている癖に僕はかなりの無知だったようだ。詰井の起こしたイベントはダミーだった。僕にとってはね」

君は知っていたから協力していたんでしょう？ と茶髪メガネは後ろを振り向く。

「あゝ。そっかそっか。センパイはどっちかっていうと裏の人間だけど暗部の底にはいなかったからなあ」

そこには容姿の整った少年が立っていた。髪は金髪に染めているが、左の2割くらいは黒色。前髪は目にかかるくらいの長さだ。

「そもそも幻想御手の発動にたった二十人程しか使っていないかった時点で強烈な違和感があったんですけどね。

ま、そんな事より教えてくれませんか九条君？ 君は知ってい

るんだろ『LEVEL5SECOND計画』とやらを」

「……別に構いませんよ。どうせセンパイは嫌でも知る事になり
そうだからね」

ニヤリ、と九条と呼ばれた少年は笑った。

LEVEL 5 SECOND (後書き)

次回からは二人目の主人公が登場します。これからも宜しくお願
い
します。

大叉竜鬼（八方封鎖）

第七学区にあるとある高校の昼休み。

如何にも「僕は優男ですよー」という顔立ちの黒髪の男が購買で購入したカレーパンにかぶり付こうとしていた。

「……………で、結局お前の好みは巨乳美少女って事でいいの？」

隣の席で自作の弁当をつついているツンツン頭の少年 かみじょう 上条当

麻としまが眠たそうな眼を黒髪優男に向ける。

「……………むぐ、まあ、そういう方向で」

「大叉、お前は全然分かって無いんだにやー。ひんにゅー白うさぎこそが至高なんだぜい」

「ぶつ、貧乳とか……………これだから童貞は困る」

「童貞のお前に童貞を馬鹿にする資格は無いんだぜい」

直後に金髪サングラスの少年 つちみかど もとほる 土御門元春は おおまた 大叉と呼んだ少年と睨み合う。

「僕はどんな女の子でも受け入れるほ」

「テメーの話は聞いてねえ！！ エセ関西人！」

「……………なんで君はいつも僕に対してそんなに冷たいん？ それに僕はエセやない！ ホンモノや！」

だから？ と大叉は青髪ピアスの学級委員（男）を軽くあしらう。因みに大叉が彼に対して冷たい理由は特に無い。なんとなく冷たくしているだけである。

と、まあ青髪ピアスの事はどうでもいいがそろそろ夏休みだなーと大叉はぼやっと思いつ出した。

何しようかなあ、海がいいね海。巨乳の女の子と行きたいなあ。

あ、オレ彼女居なかったわ、巨乳の可愛い彼女欲しいわ切実に、とまで考えたところで昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「上条エ……」

授業中、時間をほとんど睡眠に費やしていた上条はデルタフォー
ス+ の中で唯一補修の対象になってしまったのだった。思わず上
条の名前を呟く大叉。

「カミヤんは犠牲になったんだにゃー。小萌先生の補修、その犠牲
にな」

「その犠牲になったカミヤんを弔うために今からどっか遊びに行か
へん？ 明日は学校もないし」

「いや、今日は遠慮しとくぜい。急に野暮用が入っちまったから
な」

コイツとな、と言いながら土御門は大叉の首に腕を回してガツチ
リとロックする。心底嫌そうな顔をした大叉が深い溜め息を吐く。

「とゆる事でオレもパス」

「なんや、付き合い悪いな君等。ほな、僕はさっさと帰りまっせ」

眉を八の字にした青髪ピアスはクネクネとした動きでその場から
猛スピードで去っていった。

不愉快な映像を見てしまった、と大叉は更に深い溜め息を吐く。

「……はあ。最近、オレの『仕事』多すぎね？」

「俺に文句言っても仕方ないにゃー」

腕を離しながら土御門は肩を竦める。

「面倒だと思っならさっさと片付けるに限る。そうだろ？
八方封鎖<sup>オールコンク
リット</sup>」

「あんましその名前は好きじゃないんだけどな、お目付け役の土御
門元春君？」

大叉は一步前に出ると土御門とお互いにニヤリ、不気味に笑い合
う。

「場所は？」

質問に対して土御門は携帯を軽く弄りだした。数秒遅れて大叉の携帯からピロリーンと間抜けな音が鳴る。

「転送完了だ」

「オーケーい。じゃ、行ってくる」

「任せたぜい」

立てた親指を土御門に向けて大叉は両足を屈伸させる。

そして、彼は五十メートル程一気に跳躍した。

普段、彼は名目上は異能力者《レベル2》として在籍している。

しかし、彼の正体は非公式の超能力者《レベル5》、オルコンブリット八方封鎖。

八人のLEVEL5SECONDの一人でその序列は 第一位。

「さーて馬鹿な真似する連中はどんどんしまっっちゃおうねー」

今回の任務は第三学区で馬鹿な能力者達が麻薬の取引をしてるからソイツ等全員殺せというものだった。

携帯の地図アプリを確認しながら跳躍しまくって第三学区を闊歩する。

「おー、あつたあつた」

目的地の前に大叉は着地する。

セレブ向けのバイオエタノール工場の周りを彼は見回す。そしてウンウンと二回頷く。

（入り口の前に見張りが一人に運送用のトラックが三台ね。うわ、確かに怪しいわこれ。さて、どうやって攻略するか）

彼の能力、八方封鎖はこの世の素粒子を作成、変化、操作できる能力だ。先程の跳躍は自分の肉体を強靱に『作成』し、それに対応出来るように脳を少し『変化』させた結果だ。

そんな彼の能力の評価は一方通行に並ぶ程の最強の能力として上層部には定着している。

欠点があるとすればほぼ何でも出来てしまうので、あまりにも能力の使用手段が多すぎて迷ってしまう点だろうか。原石って訳わかんねーけど凄いやな、と使用者本人の大叉おおまた竜鬼りょうきは他人事のように思ってしまう。

「今日は基本の身体強化メインでやるか」

LEVEL5SECOND最強の超能力者《レベル5》は堂々と見張りの男へと近づく。

「あ？ 何かよ」

「はい、邪魔」

大叉が軽く拳を振っただけで身長百九十センチメートルくらいの見張りは竹トンボのように回転しながら吹っ飛び地面に墜落した。それには目もくれず大叉は入り口の扉をペタペタと触りながら調べると。

「電子ロックかかってんのかよ。面倒だな」

そう言いながら重圧感漂う扉をあつさり蹴破り、中へと侵入する。本当は扉を構成している素粒子を別物に変化させる方が楽なのだが、今回は身体強化を行使するのがメインという事であえてこの方法を選んだのだ。

「犯罪者の諸君お疲れです」

辺りを見回すと本来栽培されている筈のトウモロコシなどでは無く、真正銘の大麻が植えてあるのが確認出来た。

「ッ！？ 何故ここがバレた！？」

「おい、見張りの用心棒はどうしたんだ！？ まさか、やられたのかっ！？」

「知るか！ とにかく侵入してきたアイツを殺れば全て解決するだろ！！」

奥でアタツシケースに札束を詰めていた三人は一瞬慌てた様子を見せるが、すぐに獰猛な笑みを浮かべた。

電撃が、水流が、空気のうねりが大叉に襲い掛かる。だが動く必要は無い。

最初に向かってくる電流は電荷を消滅させ無効化、水流は気体に変化させて霧散させ、空気のうねりはこちらも風の凶器を作り出して迎撃した。

「さて」

爪先で地面を軽く小突くと、大叉は脚力を瞬間的に増大させ、奥の三人の後ろに回り込む。何か声を発する前に三人は首筋に手刀を当てられて無力化されていた。

「これで終わりか？」

その台詞に応じるように大叉に向かってマシンガンの如く炎弾が撃ち込まれる。降り注いだ炎弾は工場内の機器や大麻をこっそりと削り取る。

「まったく使えない馬鹿共だ」

入り口に立つモヒカン頭の男が舌打ちをする。彼はこの麻薬密売組織のリーダーだ。

彼は苛立っていた。少し自分が離ればこのザマだ。あっさりと侵入を許してしまったている。

「商品の大麻を燃やしちゃう馬鹿に馬鹿って言われたくないだろうなコイツ等も」

「な!？」

背後から突然聞こえてきた声に思わずモヒカン頭は飛び退いた。

「つか、コイツ等お前の仲間じゃないの？ 巻き込んだら危ないって事も分らないの？ 馬鹿なの？」

ハッとしてモヒカン頭は大叉の足元を見る。すっかり伸びた自分の部下達が転がっている。

まさか、あの不意討から他人を守りながらここまで移動してきたというのか。嫌な汗が額を伝い始める。

「ハッ！ 最初から役立たずの馬鹿共は焼き殺す予定だったんだよ」「ああ、そうだったの」

「で、テメエは何しにここに来た？」

「てめー等の抹殺」

やはり、自分達は『裏』の人間に目をつけられていたか、と内心でモヒカン頭は舌打ちをする。だが、危機的状況では無い。彼には自慢の能力があるのだから。

「随分と余裕だが？ テメエは俺の炎の弾丸ファイヤーマシンガンに何発まで耐えられると思っただら！？」

「じゃあ」

耳元でその声は聞こえた。

「お前はオレの攻撃何発まで耐えられる？」

次の瞬間には間合いを詰めた大叉の膝が突き立てられていた。モヒカン頭は腹を抑えながらガクガクと震え、泡を吹きながらその場に倒れ伏せた。

それを見届けた大叉はニツコリと笑いながらゆったりとした動作で、

携帯電話を取り出した。

連絡先は土御門では無く警備員アンチスキル。

（あー、また命令に背いちゃったよ。また土御門に説教されそうだよ……うへー。オレって馬鹿なのかもな）

コール音を聞きながら、何だか鬱になってきた大叉だった。

大叉竜鬼（八方封鎖）（後書き）

ご覧の通り第二の主人公はチートです。

チートという事で対戦相手もチートばかりになると思っているのでご了承下さい。

統括理事長との対面

大叉竜鬼は足元を抑えながら呻いていた。

第七学区に戻って土御門に会うなり、彼に『喧嘩殺法・親指潰し』を食らわせられたからである。

「何でテメエは抹殺系の仕事はくじく尽く失敗するんだよオオオオオ!? よりによって警備員に引き渡したってどついう事だアアア!」

「いや、この後飯食う予定だったし。ほら、人間の死体とか見ちゃつたら食欲失せるし……」

「そんなにグロ耐性無いなら最初から暗部の仕事やらずに普通のボランティアやってるオ!」

と、一通り怒鳴った後コホンと土御門は咳払いをし、

「……確かに殺人は良い事とは言わない。だが、お前がやってるのは『裏』の仕事だ。与えられた命令はこなせ」

それに、と何かを土御門は付け加えようとしたが、彼はそこで言葉を切った。

「だが、それとルールに従ってばかりいる、は別だがな」

どついう事だよ、と口に出しそうになった大叉だが、ここは素直に土御門の言葉を飲み込んでおく。彼は暗部で働きだしてまだ日数が浅い。長期間暗部に居る土御門の言葉は肝に命じていて損は無い。

「分かったよ。これからは意識する。で、もう帰っていい?」

「いや。それがまだ仕事が残ってるんだにやー」

「はあ!? 冗談だろ!?!」

「『学園都市統括理事長』がお呼びらしいぜい」

「お久しぶり、かにやー? 宜しく頼むぜい」

『案内人』結標淡希に軽い調子で話かける土御門……の後ろで目を輝かせて結標に手を振る巨乳好き大叉が居た。

手を振られた本人は「うわ、あの時の変な奴だ」とばかりに大叉から視線を逸らして土御門の肩に手を置き、嫌々ながら大叉の肩に手を置いた。

「……はあ、たまにはVIPらしいVIPの案内人を勤めたいわ」

「そう言うなにやー」

「ならオレの人生の案内人を勤めてくれ」

「きもっ」

三人の姿は結標の座標移動↑フポイントによって虚空に消えた。

大叉は正直言つて目の前に居る『人間』が苦手だった。

大人にも子供にも老人にも、そして聖人にも囚人にも見える学園都市統括理事長、アレイスターは培養液に満たされた巨大なビーカのような容器の中で逆さに浮かんでいた。

「久しぶりだな、裏の第一候補メインプラン。八方封鎖オルゴンブリート。」

「こんなにやる気の無いオレを未だに第一候補してくれてんのか」「実はもう一人候補はいるにはいるんだが……あくまで資質があるだけでまだ君みたいな域には達していない」

「ああ、そう。で、要件は？ 腹減ってるから早く夕飯にありつきたいんだけど」

あくまで対等っぽく会話してるが大叉は内心ではかなりビクビクしていた。

目の前にいる人物はどう見たって奇妙だ、奇妙すぎる。学園都市変人多しともコイツ超えられる奴いんのか？ という感じだ。

主な奇妙な点を三つ挙げるとすると、まずコイツは『計画』プランというものを実行してひたすらニヤニヤしている。そして自分もそれに組み込まれているらしい、実に不気味だ。

もう一つはこの空間にある機械類。素粒子を操る大叉ですら何なのかよく分からないアレキスターが浮かんでいる巨大ビーカーやそれに満たされた変な液に歪みにゴチャゴチャしたパイプなど。何だか彼の体の一部みたいで気色悪い。

そして、彼は魔術師、であるらしい。確か基本的に魔術サイドは科学サイドの敵では無かったか。でもその科学サイドの親玉が魔術師。もうなんなのこの人。総評、気色悪くて苦手で不気味だから怖い。

「それはすまなかったな。では簡潔に言おう、表の超能力者《レベル5》の『八人目』になってもらおうか」

「……は？」

「君がそうなる為の環境は整えておく。とりあえずはシステムスキャン身体検査を受けてもらう。そしていつも通りに手を抜く事は許されない」

「いやいや断るし、勝手に話進めんなし！ ざけんじゃないつての！！」

顔の前で高速に手を振る大叉だったが、隣に立っていた土御門にキツく腕を捕まれ、おまけに睨みまで利かされた。最後まで真面目に聞け、というメッセージを臆気に受け取った大叉は再びアレキスターの話に耳を向ける。

「断る……か。だが、君は只でさえ『絶対能力進化《レベル6シフト》』計画を蹴っている。私が言ってるのは最低限の要求だ」

「ああ、あつたなそんなキチガイ染みた計画」

大叉は鼻から笑い声を出す。『絶対能力進化』計画。

表の第一位、アクセラレータ一方通行と自分に同時期に提案された計画だ。今は一方通行が被験者になっているらしいが……大叉は素直に彼を尊敬できると思った。

自分だつたら一回目の実験で『壊れる』だろう。その狂った実験を続けられる第一位さんには是非一度は会っておきたいものだ。

「その最低限の要求すら弾いて、これ以上『計画』に支障をきたす

なら私にも考えがあるが」

「あー、分かったよ！ 従うよ！ もう帰っていいか!？」

「詳しい日時と場所は明日辺りに説明する。それまでは体を休めていたまえ」

踵を返して肩を落としながらとぼとぼと歩く大叉に土御門が続く。
が、彼は途中で振り返り、

「アレイスター。何が目的だ？」

質問の答えは帰ってこない。ただただ、その『人間』は笑っているだけだった。

騒がしい身体検査

「不幸だ……」

友人の上条のような台詞を言いながらとぼとぼと歩く『裏』の第一位、オイルコンクリート八方封鎖。

いや、厳密に言うところから不幸になるのだ。アレイスターの「表の超能力者『レベル5』の『八人目』になれ」というよく分からない命令のせいだ。

本日は七月二十四日。これから向かう場所は常磐台中学。そこにあるプールを緩衝材にして身体検査を行うらしい。

彼が『八人目』になる事を不幸だと嘆く理由は単純に目立つからである。目立つとどうなるか。そう、一方通行のように歩いているだけで襲撃を受ける立場になるかもしれないのだ。

いや、第一位じゃないから大丈夫じゃね？ では考えが甘いんだよバカカタレ、と一瞬でもそう思ってしまった大又は自分に憤る。

何しろ、学園都市の七人の超能力者『レベル5』！ が八人になるとこの都市中に発表されるらしいのだ。そうなれば恐らく大又の顔も『八人目』として割れてしまうだろう。

「あー。第八位とか……きつと馬鹿共が『八番目』だろ？ 超能力者『レベル5』最弱なんだろ？ なら俺様でも勝てるかも！」って噛み付いてくるよ……絶対」

大又は頭の中で悶々と妄想を膨らましながら溜め息を吐いた。

彼は『平穩』を好む性格である。いや、正確には『そう』なってしまうた。

(何だ何だよ何なんですかあ!? これは!?)

まさか身体検査を生中継されると誰が予想出来ただろうか。
緩衝材となるプールの前で大又は露骨に顔をひきつらせている。
(アレイスターの野郎、ここまでやるか!? 死ね! つーか、いつかぶち殺してやる!!)

カメラのフラッシュが瞬く度にそのカメラをぶっ壊してやりたくなる衝動に駆られるが、なんとか堪える。この状況で唯一マシなのは夏休みだからか、上条の知り合いの第三位ビリビリ中学生が居ない事だろうか。

なんとなく周囲に視線をざっとさまよわせる。レポーターやカメラマンのマスコミを始め、野次馬も合わせて三百人程の人間がプール周りを囲んでいた。

さすがに危ないという事でプール敷地内にまで入ってる人間は居なかったが。大勢の視線に晒されて苦笑しながら大又は呟く。

「全く、土御門の言う通りだ。嫌な仕事はとっと片付けるに限る」

空に向かって上げられた右手から大又をもう一人の第一位にまで
のしあげた『原石』の力が発動する。

「これは……一体? 大又竜鬼さんの頭上に蒼白い光が……?」

大又が発生させたのは『プラズマ』だ。彼の八方封鎖はこの世の素粒子を変化、操作させる。ならば空气中に含まれている成分の『状態』を操る事など造作もないのである。

啞然としている周りの人間など気にせず、彼は大気を操って風を発生させ、出現させたプラズマをプールの水面へと叩き込んだ。

この場に駆け付けていた記者の一人、^{みつやま}満山は目の前が真っ白になっていた。暫くして、視界がプールの水が蒸発したものによる水蒸

気に覆われていたのだと気付いた彼の耳に機械的な声が入った。

『……砲撃速度、秒速五十メートル、連続時間、計測不能、攻撃範囲、半径五十メートル、温度、一万二千二百二十度、総合評価、超能力者《レベル5》』

「結局、本当に新たな超能力者《レベル5》が誕生したって訳よ」「しかしマスコミ集めてまでする身体検査って超不自然だと思いませんか？」

サバ缶を右手に、携帯を左手に少し興奮君に震えている金髪碧眼の女子高生。彼女の携帯を覗いた見た目十二歳のふわふわニットのワンピースを着た少女が疑問符を浮かべる。

「むぎの。どう思う」

何となく脱力感漂う少女が隣のセレブな服装をした、この四人の中で一際大人の女オーラを出している人物に話しかける。

「第八位か……あまり興味湧かないわね。第四位に食い込んでこようものなら顔貸してもらおう予定だったけど」

と、学園都市第四位は邪悪な笑みを浮かべた。

『この瞬間！ 新たな超能力者《レベル5》が誕生しました！ 大又竜鬼氏は学園都市第八位に組み込まれる予定だったようで』

交差点の目立つ場所に設置された巨大のスクリーンの映像の中でリポーターらしき人物が興奮した面持ちで騒いでいる。

まるでオリンピックの種目で優勝した人物を報道しているテンションだな、とその生中継をホスト崩れのようなりをした青年

垣根提督は一笑に付した。

「八方封鎖、ね。秘密の第一位がこっちの第八位になりやがるとはな……何を考えてるかは知らねえが、面白れえ事にはなりそうか？」

様々なデパートが建ち並ぶ夜の交差点をあらたなる超能力者《レベル5》、大叉竜鬼は疲労の色が浮かんだ顔で歩いてた。

「はあ……面倒臭い手続きもあつたし、帰りに思い上がった馬鹿に絡まれるし、疲れた……ん？」

何やら、歩道橋がある辺りの場所に人だかりが出来ている。

彼に野次馬精神はほぼ存在しないのだが、通りすぎる間にチラリとそちらを見る。

「……は？」

その人だかりの中心に血だらけで倒れている人物を見て大叉は思わずかなり間抜けな声を上げてしまった。

「か、み条……？ おい、上条……！」

人混みを押し退けて倒れている友人の側へ近づく。すると、嗚咽が彼の耳に入ってきた。隣を見ると、大叉のクラス担任の月詠小萌つくよみ こもえが目尻に涙を貯めてしゃがみ込んでいるのが確認出来た。

「小萌先生！ 一体何が……ッ!？」

突然、全身から鳥肌が立った。それだけでは無い。胸を締め付けるような痛みまで襲い始めた。

大叉はこの感覚の正体を知っている。

超能力とは別の法則で異能の力を使う連中、それは……

「先生、上条を頼む」

そう言い残すと、大叉は跳躍して闇夜に消えていった。

連中はまだ近くにいる。

騒がしい身体検査（後書き）

次回はあの二人の魔術師との戦闘です！

アレイスターとか土御門のキャラ崩壊してないか心配です；

魔女狩りの王へイノケンティウス

ヒーローになりたかった。

弱き者を助け、悪人を殺さずに懲らしめる、そんなヒーローに。だから最初はひたすらに強くなるうとする事から始めた。けれど、その結果は『化け物』呼ばわりだった。

その二人の人間は先程、上条が倒れていた場所からそう遠くないビルの屋上に居た。

躊躇無く大又はその二人の前に降り立つ。二人の異様な雰囲気と出で立ちを見て間違いない、と思った。大又はこういう連中と幾度か手合わせした経験を持つ。

科学サイドの敵　超能力とは別の法則を使って起こす異能力の力、魔術。それを扱う人間、魔術師。

ここでふと、倒れていた上条の姿を思い出した。周りに走っていた何かで切りつけたような跡や亀裂も気になったが、何より彼の目を引いたのはズタズタにされた彼の右手だった。

上条の右手は異能力の力であれば何でも打ち消す特性がある。彼が直接魔術を打ち消すところは見た事ないが、アレイスターのあの期待のかけようから異能力の力に例外は無いだろうと大又は推測する。

普通の異能の力を使う相手にあの上条があんなにズタボロにされて負ける事はまず無い。推測ではない、断言出来る。現に上条は学園都市第三位の超能力者《レベル5》を軽くあしらう程の手練れなのだ、そして自分と軽く喧嘩になった時もあらゆる攻撃をいとも簡

単に打ち消していた。

なら、コイツ等は一体……どれほどの実力を持っているんだ!?

「お前ら、魔術師か?」

「ご名答です。貴方は?」

「超能力者だ」

あっさりと返事は帰ってきた。一応、二人が魔術師だという事は体に走る感覚でなんとなく分かったのだが、これで確定した。

そもそも大又がここまで来れたのは全身がトリップする感覚(『魔力』を感じるとでも言おうか)を追ってきたからだ。

「ご丁寧に返事を返してくれた女の魔術師を大又は見つめる。

Tシャツに片脚だけ太ももの付け根の辺りまで切っているジーンズという姿は彼にとってはただの工口い格好にしか見えない。だが、そんな自分好みのスタイルを持つセクシーな格好をした女性を見ても大又はいつも通りの反応を示す事は無い。

今、彼の内は燃え上がる黒い感情が支配しかけていた。

「で、一体君はここへ何をしにきた。能力者?」

今度はもう一人の男の魔術師が質問をしてきた。

ニメートルはあるうかという長身に黒の修道服。こちらも異様な出で立ちだ。その赤く髪を染めた魔術師はうるさい八工を見つけたような目付きでこちらを睨んでいる。

「用ね、お前らの応答しだいで変わるかもな。

「……上条をやったのはお前らか?」

「ええ。しかし行ったのは私一人で、ですが」

「またもやあっさりと肯定の返事は返ってきた。だが、まだ質問しなければならぬ事がある。

「何で、上条をあんなんにした? まさかむしゃくしゃして八つ当たりしたって落ちじゃないよな。違うなら」

「本来なら初対面の相手にはスタイル「マグヌスと名乗りたいとこ

「ただ、まさか『こつちの名前』を名乗る事になるとはね F o
r t i s 9 3 1」

「ッ!? テメエ、『魔法名』をいきなり名乗るのかよ!?!」

『魔法名』、それは魔法を使う魔法名というより『殺し名』というニュアンスの強いらしい。それを知ってて叫ぶ大叉を無視してステイルはくわえていた煙草を横合いへ放り捨てた。

「炎よ」

水平に飛んだ煙草のラインをなぞって轟! と爆発するように直線に揺らめく炎の剣が生み出される。

「巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルは容赦無く灼熱の炎剣を目の前の少年に叩き付ける。

しかし、大叉は迫る炎を前にしても動かなかった。

「何だ炎の魔法か」

「なっ……!?!」

魔術師ステイルは思わず声を上げてしまった。炎剣が突如、灼熱に焼かれて鉛細工のようになる予定だった少年の前で霧散してしまっただからだ。

「馬鹿な!? 三千度の炎だ」

「温度関係ないよバーカ。所詮、魔法で生み出された炎といっても炎上はこの世で起こる現象に過ぎない。

なら話は簡単で発火現象そのものを抑えてしまえばいい。例えば酸素を奪う、とか方法はいくらかもある」

得意気に語る大叉だがもしこれが魔術師との初戦闘だったら彼は炎を避ける事を選択しただろう。今までの戦闘で炎や雷を扱う魔術師と戦った経験があるからこそ取れた方法だった。

「簡単に言つとこの世の物理現象を使つてる時点で俺には勝てないつて事だ。分かってくれたかな? 魔法で無知なステイル! マグナス君?」

ニイっと笑う大叉からステイルは思わず二、三步退いているのに

気が付いた。嫌な汗がステイルのこめかみを伝い始める。目の前の男は、あの奇妙な右手を持つ男と似通っているようにも見えてきた。

「世界を構築する五台元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」
ツカツカと歩きながら距離を詰めてくる男を睨みながらステイルは詠唱を始める。

彼の服の内側から数万枚ものルーンが刻まれたカードが飛び出した。それは渦を巻いて、今居る屋上やビルの側面にビタビタと貼り付いていく。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を」

もう二人の距離は二メートル程に縮まっていた。一気に大叉が踏み出さないのは何だかんだでやはり、魔術というものを用心しているからか。

「その名は炎、その役は剣。
顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ
ッ！」
「なっ!?!」

突如、大叉の目の前で爆発が起こった。それはステイル自身が自爆したかのようにも見えた。

一時は唾然とした大叉だったが、その現象が起こした結果 人間の形をした炎の塊を見て拍子抜けした表情を作る。

「だーかーらあ」

襲い掛かる炎の巨神は大叉の数センチ手前で先程の炎剣の如く霧散し、辺りに粘り気のある黒い飛沫を撒き散らした。

「炎じゃ俺には勝てないのだよ……ん？」

相手の諦めの悪さに指でも振って挑発してやろうかとした大叉の顔を黒い何かが横切った。

それらは再び一ヶ所に集まっていく。まるで何かを再び形作るかのように。

(これはさっき飛び散った……!?)

そう気付いた時には炎の巨神 『魔女狩りの王』は既に復活していた。『魔女狩りの王』はいつの間にか手にしていた二メートル以上の巨大な十字架を両手で握って振り上げる。

「こ、れはさすがに避けなきゃマズイかつ!？」

慌てて後ろに飛んで十字架の一撃を回避する。巨大な十字架は屋上の床を派手に叩き割った。

あまりにも異質な重圧に思わず圧されてしまった。

これでまたステイルとの距離が開いてしまう。

(今は本当に避ける必要はあったのか……? クソっ! やっぱり魔術つてのは気味悪いな)

間違はなく自分は一度、空気中の素粒子を操って燃烧そのものを無効にして炎の巨人をデリートさせたはず……どうやらあれは再生能力があるらしい。

(どうする……もう一度あの炎の巨人に挑むか? いやでもリスキ―な事はしたくない。なら、回り込んでステイルとかいう魔術師を叩くのは?)

いーやきつと、それすると後ろの女魔術師が黙ってないだろうし、術者を倒しても動くイメージがあるんだがあれ)

暫く色々な策を巡らせる大叉だったが、

(ああ、多分これだわ。炎の巨人を完全に消滅させる方法は……!)
大叉は右手を軽く振った。そこから発生したのは青白い電撃。

それは指向性を持つ弾丸のようにいくつもの方向に分かれて標的に向かう。だが、標的はステイルではない、彼が放ったカードだ。貼り付けられた数万枚のカードが電撃によって塵にされる時間は一瞬だった。

「どうやら、オレの考えは正解だったようだな」

自転車の空気が抜ける時の音に似た情けない音を立てながら『魔女狩りの王』は今度こそ完全に消滅した。

「 あ 」

ステイルの喉が一気に干上がる。うって変わって弱気な顔になったステイルを憐れむ余裕すら見せながら、大叉は体を前に倒しながら爪先に力を込める。

「オレをもう少ししてこずらせたかったなら最初っからカードをセツトしておくんだっとな」

能力によって強化された大叉の体が爆発的なスピードでステイルへと迫る。

聖人

地を蹴った大叉は一瞬でステイルの懐まで接近する。相手の首筋を狙い、手刀を斜めに掲げる。

端から大叉には相手を殺すつもりはない。この炎魔術師を気絶させた後に彼の五メートル後方に控えている女魔術師に色々聞き出せばいい。

「ッ！」

が、ステイルの首に当たる五寸手前の距離で大叉の手刀は停止していた。いや、停止させられていた。体つきからは想像出来ない力で大叉の左手首を握る女の魔術師によって。

(この間合いに割り込んできただと……ッ!?)

慌てて女魔術師の手を振り払って、一旦後ろに下がる大叉。対して女魔術師はステイルを庇うかのように彼の前で立ち止まる。

「……お前は」

「かんざき かおり神裂火織、と申します」

「別に名前を聞きたいわけじゃなかったんだけどな。で、お前は俺の質問に答える気はあるのか？」

「いいえ。それに、魔法名を名乗る気もありません。大人しく退いていただけると有難いのですが」

淡淡と言葉を繋ぐ神裂にを見て思う。

そんな自信満々に自分を強者アピールしている奴を見るとますます退きたくなくなるじゃないか、と。

「断る！ と言ったら？」

「……無理矢理にでも退いてもらうまで」

神裂が居合いの構えを取る。そしてその端正な手が二メートルはあるつかという刀の柄に触れる。

その時、筋肉などの構造自体が変革された身体を操る為に変化さ

せた脳。それに伴って強化された大叉の五感が青く艶がある細い線のような物を捉えた。

ワイヤー
鋼糸。

「七閃」

七つの斬撃が今立っているビルの屋上を切り裂きながら迫ってくる。

（うおお！？ 滅茶苦茶速いッ！）

直ぐ様ワイヤーが届かないであろう上空十メートル程の位置に大叉は跳躍する。

ワイヤーの素粒子を変化させて無効に出来る事は出来る。だが、相手は魔術師だ。ワイヤーに変な魔術が組み込まれている可能性は十分に有り得る。その場合、逆に大叉の能力が無効にされてしまうかもしれない。

ドヤ顔のまま八つ裂きにされるのは御免だ。

（上条が倒れていた現場にあった刀傷は恐らくこれだな……）

風を操り、神裂の元まで急降下する。あの『七閃』とかいう妙な抜刀術を使わせる隙を与えたくはない。

「『七閃』をかわ躲しましたか。詳細は知りませんが強力なチカラですね」

神裂は鈴の音に似た落ち着いた声色で素直に相手の能力を誉めながら、迫りくる大叉の足首を掴んでその動きを止める。

「はあ！？」

大叉は素直に相手に驚愕する。

何度も言うがこちらは相手を殺す気は微塵も無い。相手が避ける前提で自分は攻撃したのに、神裂はそれを受け止めた。それは相手が予測してない行動を取ったという驚きだ。

だが大叉を真に驚愕させたのは神裂の『力』だ。腕力、動体視力などの力だ。この神裂火織という魔術師はそれらが並外れている。踏み潰す要領で放った風の力と位置エネルギーを利用した一撃。速度と重さを合わせればこのビルが半壊する程の威力を秘めていた（コイツ、能力で強化された俺の体並みの身体能力を持つてやがるのか……！？ これは上条が負けたのも納得出来るわ）

カクン、とバランスを崩し始めた大叉の体を神裂は彼の足首を掴んだまま目下の地面に叩き付ける。とんでもない怪力で叩き付けられた大叉は屋上を叩き割り、このビルの最上階のフロアまで突き破って瓦礫と共に落ちて行く。

背骨が軋み腕や足の骨が砕け、内臓が幾つか潰れた感覚も走る。「ガッ……ばあっ……！？ ここは何階だ？ っつか誰か巻き添えになつて!？」

喉まで迫り上がった血を吐き出し、大叉が体を起こす。能力で骨や内臓を高速で回復させながら立ち上がった大叉の目に超人的な魔術師の姿が映る。いつの間ここに降りてきたのだろうか。

「その事については心配いりませんよ。ステイルに人払いの刻印を刻ませていましたからね。」

それより、驚きましたね。私の推測だとこれで終わりだと思っていたのですが……」

「へっ、この程度でオレが倒れるかよ。一つ質問するが、アンタのその人払いの刻印とやらはその名の通りに人を近付けなくさせる魔術なのか？」

「ええ」

「ふーん」

納得した顔で頷くと大叉は床を爪先でリズム良く叩き始めた。

「それにしてもここまでダメージ食らったのは久しぶりだな。あー、なんだろなこの気持ち。なんというか」

ヘラヘラとした笑みを浮かべる大又に対して神裂は眉を潜める。
「燃えてきた」

人外の力を持つ者同士が真正面から衝突した。

大又は相手の顔に向かって拳を突き出す。それに対して神裂は左膝を素早く振り上げた。

「チツ！」

「ッ！」

二人が激突した衝撃波が辺りのショーウィンドウをまとめて割っていく。この場所は洋服売り場のフロアらしい、と神裂から目を離せなかった大又はようやく気付く。

お互いに相手の攻撃を防いだ大又と神裂は衝撃を殺しきれずにフロアの床を削りながら後ろに下がっていく。

今の一撃で、神裂は悟った。

(この少年……『聖人』である私の動きについてきている。……魔
法名を名乗らずにあの少年を退かせる事が段々難しく感じてきまし
たね……！)

偶然とは思えなかった。此方は普通の人間の五感では認識できな
い程の速さとタイミングで攻撃を行ったのだ。

「痛ってー！ 拳銃の弾受けてもびくともしないくらい体を強化し
てるってのに」

神裂の膝を受けた左腕をぶらぶらと揺らしながら大又が苦悶の表
情を浮かべる。

「七閃」

七本のワイヤーが進行方向にある障害物を切り裂きながら大又を
食いちぎろうとする。

「おおおおオオツッ！！」

それを見た大又は何を思ったか、雄叫びを上げながら『七閃』に
向かって両腕を突きだした。

「あれは……！？」

神裂の瞳が捉えたのは爛々と炎上している大叉の腕だった。手首から肘の辺りまで炎が燃え盛っている。

最初はステイルが援護を行っているのかと思った。だが、違う魔力が感じられない。何よりあれは大叉の腕が燃えているのでは無く、大叉の『腕自体が炎に変化』しているように神裂の目には見えていた。

炎が放射状に広がる。その数千度に達する炎は『七閃』のワイヤーを全て焼き切った。

「くっそ。やっぱり肉体を構成している素粒子以外の素粒子に体を変化させるのは演算が面倒だな」

訳の分からない事をぼやきながら自分の懐に潜り込んでくる能力者を神裂は睨み付ける。

腰のホルスターに挟んであった刀の柄で彼の頭を打とうとしたが、能力者の少年は体勢を下げてあっさりとそれを避けた。それどころか神裂の腹に肘鉄をぶちかましてきた。

『七閃』を破られた瞬間から無意識の内に焦りが生じたのだろうか。とにかく、油断した。

「かはっ！」

肺の空気を吐き出しながら神裂は砲弾のような勢いで向かい側の壁へと突っ込んだ。

「……何でだよ。アンタ、滅茶苦茶強いじゃねえか」

粉塵のカーテンを見詰めながら大叉はポツリと呟く。意識して言ったというよりは、無意識に漏れてしまったという感じだった。

「その無茶苦茶強い力が自分にはあるってアンタは自覚はあったんだろ。なら、何でそんな力を平凡な人間にぶつけられるんだよ。何であんなになるまでボコボコにしちまったんだよ。」

なあ、何でだよ？ アンタらが上条を襲った理由は知らない。あの『善人』を襲ったって事はそれは……！？

彼は最後まで言葉を続けられなかった。

空気を裂きながら二メートルの巨大な刀が超高速で飛来してきていたからだ。

偽善者にすらなれない主人公

鞘に収まっているとはいえ、音速で飛んでくる刀に頭を打たれればどうなるか。全力で首を振ってそれを大叉は回避する。

「ぶほっ!？」

その僅かな大叉の隙を突いて神裂は大叉の頭上に跳躍していた。神裂は彼の頭を踏み台にして更に跳躍し、猛スピードで飛んでいた刀を掴み取る。

(コイツ……全然さっきの肘鉄響いてる様子が無いぞ。体の強度も超人クラスなのかよ)

今しがたへし折られた鼻を再生しながら大叉は相手の様子を見る……暇は無かった。

十メートルの距離を神裂は一気に詰めて柄打ちやら蹴りなどの打撃を打ち込む。これに大叉も肉弾戦で応じる。と、いうより相手はこちらが複雑な演算をする機会を与えてくれない。

「私だつて好きであんな事をしているわけではありません。仕方が無かつたんですよ」

打ち合いの中、神裂がポツリと言葉を漏らした。今までとは打つて変わって弱々しい声だった。

大叉が感情を剥き出しにして放った言葉を彼女はちゃんと聞いてくれていたようだ。

「仕方無い、なあ？」

鳩尾に迫ろうとしていた神裂の膝をこちらも膝を突き出して受け止める。

この僅かにお互いの動きが止まった瞬間に大叉は常時やっている身体強化の演算に加えて別の演算を開始する。

あらゆる場所からかき集めた酸素と水素が数百キロの質量を持つ塊に姿を変え神裂の背後を取る、が。

「私は必要悪の協会ネセサリウスの一員として、彼 上条当麻が匿っていた保護対象を回収しに来ただけです」

静かにいい放ちながら後ろも見ないで神裂は水の塊を片手で弾き飛ばす。

「はっ……！？」

だが、そんな現象がどうでも良くなる程の情報を大叉は聞いてしまった。

今、この魔術師は何と言った？

必要悪の協会……それは確か大叉の友人兼お目付け役の金髪サングラスの野郎が所属している組織の名前では無かったか？

ゴキリ、という音が耳に入った。それが自分の胸にめり込んだ刀の柄が助骨を砕いた音だというのに時間は掛からなかった。

「がばッ……しまっ……！」

一瞬の隙が敗北に繋がるかもしれないというのに、油断をしてみたら。これではさっきの神裂の二の舞ではないか。

その後悔した時には大叉の体は二十階建てのビルの十七階から投げ出され、宙に浮いていた。

ステイルという魔術師からなんとか逃げ切ったインデックスは月詠小萌の自宅 いや、上条当麻の元へと急いでいた。

正直言うと今ははしゃぎたい気分だった。何せ先程自分はあの馬鹿な魔術師を撒いてやったのだ。

さっきまでインデックスが居た銭湯のフロントには上条の姿は見当たらなかった。ならば、上条は小萌宅に帰っている可能性が高いのでは？ と思ったのだ。

「小萌、ただいまなんだよ！」
テンションが高めになっていたインデックスは勢い良く玄関の扉を開けた。

開けたまま、彼女はその場で固まってしまった。やはり上条はここにいた。

入り口から見える八畳程の部屋、そこに全身が傷だらけで眠っている上条当麻がそこにいた。

つい数分前まで大又達が堂々と戦闘を行っていたデパートは警備員やら野次馬達が集まり、騒がしくなっていた。

神裂の一撃をもらって高所から地上へ叩き付けられる筈のところを風を操作して難を逃れた大又はデパートから離れる事を選択した。恐らく『人払いの刻印』とやらの効力が切れたのだろう。仮にあのデパートに戻って魔術師達を見付けても、ギャラリーのせいで戦闘は行えない。もしかしたら向こうもそれを知っててあえて魔術をディスプレイしたのだろうか。

「やられた……」

まんまと嵌められた事に歯を食い縛る。

だが、まだ自分に出来る事はあるかもしれない。大又は携帯を取り出し、彼の友人である土御門に電話を掛ける。コール音が十回くらい響いた後に相手は電話に出た。

「何だ」

「土御門、聞きたい事がある。上条が魔術師に襲われてボロボロに

された。それもお前が所属する『必要悪の教会』の魔術師達にだ。奴等は上条が匿っている人物を保護したいとか言っていた。……これから、俺はどうすればいいんだ」

「……簡単な事だ」

少しの間を置いて土御門はこう言った。

「この件からお前が身を引けばいい」

「本気で言ったのかお前」「少し魔術を知ってるだけでいい気になるなよ素人が」

剣呑な音色になった相手の声にも臆さずに土御門は言葉を返す。

「お前、上条を見捨てるとかいいう気か？ いくらアイツに幻想殺しがあるとしてもあの神裂とかいう魔術師が相手だったら通用しないと思うぞ」

「誰がカミヤンを見捨てると言った。俺はお前に手を引けと言っただけだ」

「へっ？」

「後は俺に任せておけて事だ。同じ組織の仲間として話をつけてやるよ。回りにくい言い方してすまなかつたな」

「土御門、お前……」

「一応、俺はお前のお目付け役だからな。お前を危険なイベントから遠ざけるのも俺の仕事だ。だからこの事は全部忘れてくれると有り難い。」

後、気負う事は全然無い。お前はカミヤンを助ける為に『聖人』とまで戦ったんだ。そこまでやりや十分だと思っぜい？」

「聖人？ ってそれより、何でお前は俺が魔術師達と戦った事知ってるんだよ」

「お目付け役、これヒントな。もう一度言っつがお前はもうこの件に関わるな。じゃあ、切るぞ」

「ち……分かつたよ」

通話が切れた携帯をポケットに戻した大叉は自分が安堵感に包まれているのに気付いた。

結局、土御門と上条が背負う事になってしまった。

「やっぱり今更オレがヒーローになれるだなんて間違ってたんだよな」

ああ、そうだ。結局オレは自分の平和が一番大事なんだ。何だかんだ言っておレはやはり神裂やステイルに内心ビビってたんだ。

いつの間にヒーローどころか、偽善者すらも演じる事が出来なくなっただろう。

「上条、土御門……ごめんな」

大叉は知らない。この数日後に上条当麻が『死ぬ』事を。

大叉との通話が終わった後、土御門元春は少しバツの悪そうな顔をしていた。

「大叉……悪いな。実は俺って嘘つきなんだぜい？」

偽善者にすらなれない主人公（後書き）

更新遅れてすみません……

また用事がどっさりと入ってしまった；

今回の章はチート主人公とねーちゃんやスタイルと戦わせるのが一つのメイン

もう一つは主人公がヘタレという事を伝えるのがメインです（一応色々と成長する予定です）

今回かませみたいになってしまったスタイルを活躍させたいですね

……

次回は再登場の諏佐に色々やってもらおう予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6320q/>

とある科学の座標交換《テンソルフォース》

2011年9月23日03時15分発行